

一般国道183号道路改良事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書 I

鳥取県日野郡日野町

# 上菅荒神原遺跡

1 9 9 9

財団法人 鳥取県教育文化財団

一般国道183号道路改良事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書 I

鳥取県日野郡日野町

# 上菅荒神原遺跡

1 9 9 9

財団法人 鳥取県教育文化財団

# 序

鳥取県は東西に長く、日本海沿いには河川によって運ばれた土砂により形成された平野部が存在するものの、県域の多くは中国山地に連なる山間部が占めています。そのため、県民の活動域はこの平野部が主たるものであり、道路・鉄道などの交通網は平野部を東西方向に横断するルートが地形的になだらかなこともあり主要なものとなっており、整備が進められているところです。しかし、山陽方面に向かうためには南北方向に中国山地を縦断する交通網の整備も欠かせません。

鳥取県西部地域では、古くから日野川とその支流が山地を開拓して出来た谷筋で人が生活することで道が形成され、山陽方面に向かう交通路として利用されてきました。日野川の中流域に位置する日野町は交通路の要衝にあたりますが、これまで発掘調査はほとんど実施されておらず、偶然発見された遺物がわずかに知られるのみであり、その歴史的な変遷はほとんど未解明のままとなっています。鳥取県の委託を受けた財団法人鳥取県教育文化財団では、一般国道183号の道路改良事業に伴って失われる日野町内にある遺跡を記録保存するため、平成10年度に発掘調査を実施いたしました。

発掘調査では、土器類などの遺物や、住居跡や土坑などの遺構が見つかりました。縄文時代の住居跡と考えられる遺構は、鳥取県内であまり見つかっていないものであり、当時の生活環境を考える上で貴重な資料となるものです。

本書は、この発掘調査の成果に学術的な考察を加え、「記録」として保存するためにまとめたものです。本書の「記録」が、文化財に対する認識と理解を深める一助となり、教育及び学術研究のために広くご活用いただければ幸いと存じます。

最後になりましたが、調査に際しまして、多大な御理解と御協力をいただいた地元の方々をはじめとする関係各位に対し、心から感謝すると共に厚くお礼を申し上げます。

平成11年3月

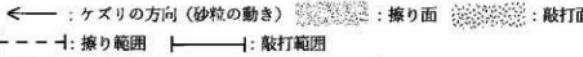
財団法人鳥取県教育文化財団

理事長 田渕 康允

## 例　　言

1. 本報告書は、一般国道183号（生山道路）の道路改良事業に伴い、1998（平成10）年度に調査を実施した日野郡日野町大字上菅字才ノ木原1334番地、1336番地、1343番地に所在する上菅荒神原遺跡の埋蔵文化財発掘調査記録である。
2. 調査地には道路予定地のセンター杭に対応する10m単位のグリッドを設定し、南北方向をアルファベット、東西方向をアラビア数字で表示しグリッド名とした。方位は国土座標第V系に基づく座標北、レベルは海拔標高である。なお、全体造構図には国土座標第V系を併せて記載してグリッドとの位置関係を示した。グリッド方位は、国土座標第V系の方位に対し東に25度47分31秒振れている。
3. 本報告書の遺跡周辺地形図に使用した地図は鳥取県根雨土木事務所から提供を受け、周辺遺跡分布図には国土地理院発行の5万分の1地形図「根雨」（平成2年修正版）、「上石見」（平成7年修正版）を使用した。
4. 本報告書の作成は調査員の討議に基づく。本文は調査員が分担して執筆し目次に執筆者を記載した。造構、遺物の実測並びに浄写は調査員を中心に実施した。
5. 石材鑑定および地質に関する現地指導を鳥取大学名誉教授の赤木三郎氏にお願いした。
6. 土器の胎土分析および石器の産地同定を岡山理科大学自然科学研究所の白石純氏に依頼し玉稿をいただいた。
7. 住居跡の判定を東京国立文化財研究所の宮本長二郎氏に依頼し玉稿をいただいた。
8. 鉄滓の成分分析及び炭素14年代測定をそれぞれ業者に委託して実施し、結果を掲載した。
9. 出土遺物、図面、写真等は鳥取県埋蔵文化財センターが保管している。
10. 現地調査および報告書作成にあたっては、下記の方々に指導・協力を頂いた。記して感謝いたします。  
古賀 信幸　　谷岡 陽一　　中越 利夫　　根鈴 輝雄　　平井 勝　　家根 祥多　　矢野 健一  
山縣 実　　山田 真宏　　（五十音順、敬称略）

## 凡　　例

1. 出土遺物にネーミングした遺跡名は下記の略称を用いた。  
上菅荒神原遺跡：上コウジン
2. 本報告書における造構記号は下記のように表す。  
S B : 壁立式平地住居跡・梁間1間型平地住居跡　　S H : 主柱2本型伏屋式平地住居跡  
S K : 土坑　　S D : 滅状造構　　P : 柱穴・ピット
3. 本報告書における遺物記号は下記のように表す。  
Po : 土器　　S : 石器
4. 造構図においては、土器の出土位置を○●で、陶磁器を☆★で、石器を△▲で、鉄滓を×で表す。
5. 遺物実測図中における記号は以下の通りとする。  

6. 遺物観察表の法量欄の丸数字は下記の意味で、数値の前につけた※は復元値、△は残存値であることを表す。  
①器高　②口径　③底部径　④高台径　⑤長さ　⑥幅　⑦厚さ
7. 遺物観察表の色調欄の記述は農林水産省農林水産技術会議事務局監修の『標準土色帖』に基づく。
8. 遺物観察表の備考欄に記載した「清水-1」等の番号は実測者番号であり、遺物特定のために記載した。
9. 発掘調査時におけるピット番号と本報告書におけるピット番号では変更があり、対照は押表1～20で行った。なお、実際に遺物に記載されている造構名は発掘調査時の造構名であるが、遺物観察表中では変更後の造構名を載せた。なお、遺物観察表の備考欄に調査時の造構名も併せて記載している。

# 目 次

序	
例 言	
凡 例	
日 次	
挿図目次	
神表目次	
図版目次	
第1章 調査の経緯	西川
第1節 発掘調査に至る経緯	1
第2節 調査の経過と方法	1
第3節 調査体制	2
第2章 位置と環境	西川
第1節 地理的環境	3
第2節 歴史的環境	4
第3章 上菅荒神原遺跡の調査	
第1節 調査区の層序	八峰 7
第2節 平地住居	八峰 13
第3節 ピット群	八峰 32
第4節 土坑	八峰 32
第5節 落し穴	西川 38
第6節 溝状遺構	八峰 40
第7節 暗茶褐色土包含層	八峰 47
第8節 黒色土包含層	八峰 53
第9節 遺構外の遺物	八峰 78
第4章 考察	
鳥取県出土の木葉文土器について	西川 80
上菅荒神原遺跡の遺物と遺構	八峰 88
上菅荒神原遺跡の住居遺構	92
東京国立文化財研究所	宮本長二郎
上菅荒神原遺跡出土土器の胎土分析	97
岡山理科大学自然科学研究所	白石 純
上菅荒神原遺跡出土黒曜石製石器の産地推定	100
岡山理科大学自然科学研究所	白石 純
上菅荒神原遺跡鉄滓分析	101
ジオサイエンス株式会社	
上菅荒神原遺跡における放射性炭素年代測定	102
株式会社古環境研究所	
特論図版（白石）	
図版	
報告書抄録	

## 挿図目次

挿図1	遺跡周辺地形図	v	挿図34	S K - 1 3 ~ 1 9 遺構図	35
挿図2	周辺遺跡分布図	6	挿図35	S K - 2 0 ~ 2 3 ~ 2 4 ~ 2 7 ~ 2 8 遺構図	36
挿図3	第1遺構面全体図	7	挿図36	土坑出土遺物実測図	37
挿図4	第2遺構面全体図	8	挿図37	S K - 2 1 遺構図	38
挿図5	II区西壁土層図	10	挿図38	S K - 2 2 遺構図	38
挿図6	I区西壁土層図	11	挿図39	S K - 2 5 遺構図	39
挿図7	I - II区間土層図	12	挿図40	S K - 2 6 遺構図	39
挿図8	S B - 0 1 遺構図	13	挿図41	S D - 0 1 ~ 0 2 土層図	40
挿図9	S B - 0 2 遺構図	14	挿図42	S D - 0 1 ~ 0 2 遺構図	41
挿図10	S B - 0 3 遺構図	14	挿図43	S D - 0 1 遺物実測図	43
挿図11	S B - 0 4 遺構図	15	挿図44	S D - 0 2 遺物実測図	44
挿図12	S B - 0 5 遺構図	15	挿図45	S D - 0 3 遺構図	45
挿図13	S B - 0 5 P 1 土器実測図	16	挿図46	S D - 0 4 ~ 0 5 遺構図	46
挿図14	S B - 0 6 遺構図	16	挿図47	暗茶褐色土包含層土器実測図(1)	49
挿図15	S B - 0 7 遺構図	16	挿図48	暗茶褐色土包含層土器実測図(2)	50
挿図16	S B - 0 8 遺構図	17	挿図49	暗茶褐色土包含層石器実測図	51
挿図17	S B - 0 9 遺構図	17	挿図50	暗茶褐色土包含層遺物出土状況図	52
挿図18	S B - 1 0 遺構図	18	挿図51	黒色土包含層遺物出土状況図	55
挿図19	S B - 1 1 遺構図	18	挿図52	黒色土包含層土器実測図(1)	57
挿図20	S B - 1 2 遺構図	19	挿図53	黒色土包含層土器実測図(2)	59
挿図21	S B - 1 3 遺構図	20	挿図54	黒色土包含層土器実測図(3)	61
挿図22	S B - 1 4 遺構図	20	挿図55	黒色土包含層土器実測図(4)	63
挿図23	S B - 1 5 遺構図	21	挿図56	黒色土包含層土器実測図(5)	65
挿図24	S B - 1 6 遺構図	21	挿図57	黒色土包含層土器実測図(6)	67
挿図25	S H - 4 5 P 2 土器実測図	23	挿図58	黒色土包含層土器実測図(7)	69
挿図26	I区第1遺構面全体図(1)	25	挿図59	黒色土包含層土器実測図(8)	71
挿図27	I区第1遺構面全体図(2)	26	挿図60	黒色土包含層土器実測図(9)	73
挿図28	I区第1遺構面全体図(3)	27	挿図61	黒色土包含層土器実測図(10)	74
挿図29	I区第1遺構面全体図(4)	28	挿図62	黒色土包含層石器実測図(1)	75
挿図30	II区第1遺構面全体図	29	挿図63	黒色土包含層石器実測図(2)	76
挿図31	II区第2遺構面全体図	30	挿図64	黒色土包含層石器実測図(3)	77
挿図32	S K - 0 1 ~ 0 6 遺構図	33	挿図65	遺構外出土遺物実測図	79
挿図33	S K - 0 7 ~ 1 2 遺構図	34			

## 挿表目次

挿表1	S B - 0 1 ピット一覧表	13	挿表5	S B - 0 5 ピット一覧表	15
挿表2	S B - 0 2 ピット一覧表	14	挿表6	S B - 0 5 P 1 土器観察表	16
挿表3	S B - 0 3 ピット一覧表	14	挿表7	S B - 0 6 ピット一覧表	16
挿表4	S B - 0 4 ピット一覧表	15	挿表8	S B - 0 7 ピット一覧表	16

挿表9	SB-08 ピット一覧表	17	挿表24	土坑出土石器観察表	37
挿表10	SB-09 ピット一覧表	17	挿表25	SD-01 土器観察表	42
挿表11	SB-10 ピット一覧表	19	挿表26	SD-01 石器観察表	42
挿表12	SB-11 ピット一覧表	19	挿表27	SD-02 土器観察表	42
挿表13	SB-12 ピット一覧表	19	挿表28	SD-02 石器観察表	44
挿表14	SB-13 ピット一覧表	19	挿表29	暗茶褐色土包含層出土遺物一覧表	47
挿表15	SB-14 ピット一覧表	20	挿表30	暗茶褐色土包含層土器観察表	48
挿表16	SB-15 ピット一覧表	21	挿表31	暗茶褐色土包含層石器観察表	50
挿表17	SB-16 ピット一覧表	21	挿表32	黒色土包含層土器観察表	56
挿表18	平地住居一覧表	22	挿表33	黒色土包含層出土遺物一覧表	62
挿表19	SH-4 5 P 2 土器観察表	23	挿表34	黒色土包含層土器・陶磁器観察表	62
挿表20	主柱2本型伏屋式平地住居一覧表	23	挿表35	黒色土包含層石器観察表	74
挿表21	ピット群一覧表	31	挿表36	遺構外出土土器・陶磁器観察表	78
挿表22	土坑・落し穴一覧表	32	挿表37	遺構外出土石器観察表	78
挿表23	土坑出土土器観察表	36			

## 図版目次

### 図版1 調査前風景（北東より）

SK-01 土層断面（西より）  
 SK-02 土層断面（南西より）  
 SK-03 遺物出土状況（北より）

I区黒色土包含層遺物出土状況（東より）

Po180出土状況（北西より）

I区第1遺構面完掘状況（北より）

II区第1遺構面完掘状況（北より）

### 図版2 SK-21 土層断面（東より）

SK-26 土層断面（北より）

SD-01 土層断面（東より）

SD-01 完掘状況（東より）

SD-02 検出状況（北より）

II区第2遺構面住居完掘状況（北より）

I区西壁土層断面（東より）

II区西壁土層断面（東より）

### 図版3 SB-05 P 1 出土遺物

SH-4 5 P 2 出土遺物  
 SK-03 出土遺物  
 SK-06 出土遺物

SK-08 出土遺物

SK-09 出土遺物

SK-10 出土遺物

SK-11 出土遺物

### 図版4 SK-16 出土遺物

SD-01 出土遺物

SD-02 出土遺物

### 図版4 暗茶褐色土包含層出土遺物（1）

暗茶褐色土包含層出土遺物（2）

黒色土包含層出土遺物（1）

### 図版6 黒色土包含層出土遺物（2）

黒色土包含層出土遺物（3）

### 図版8 黒色土包含層出土遺物（4）

黒色土包含層出土遺物（5）

### 図版10 黒色土包含層出土遺物（6）

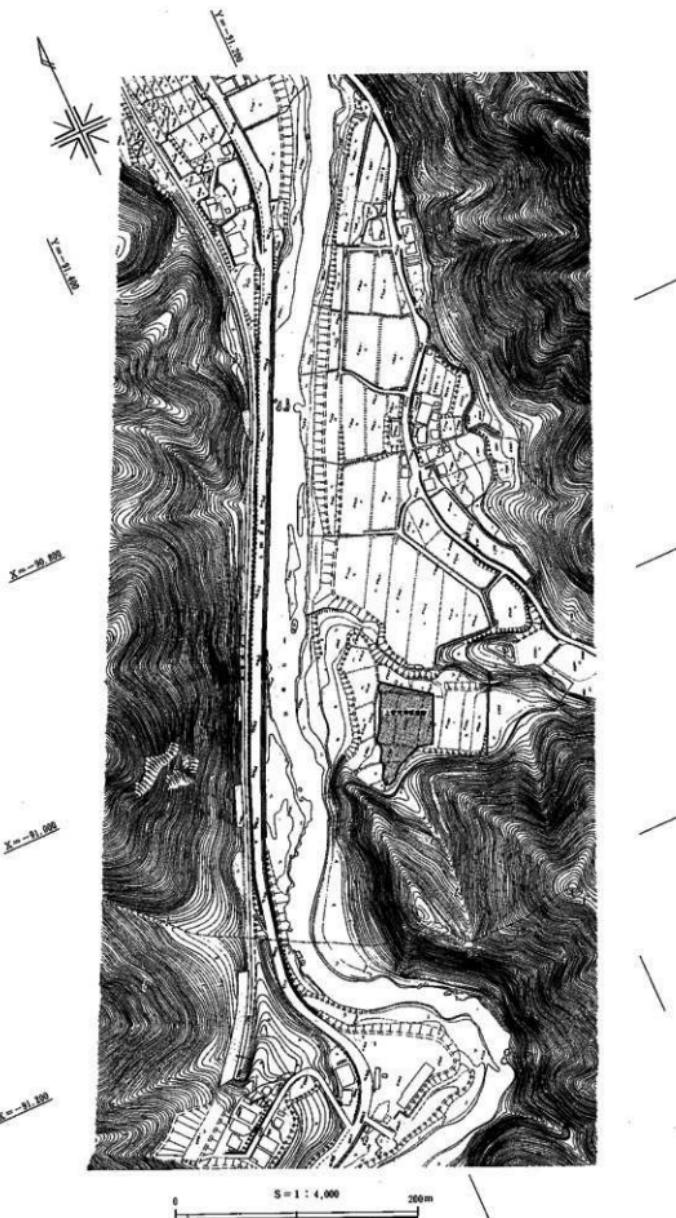
黒色土包含層出土遺物（7）

### 図版12 黒色土包含層出土遺物（8）

遺構外出土遺物（1）

### 図版13 遺構外出土遺物（2）

調査参加者



插図1　遺跡周辺地形図

# 第1章 調査の経緯

## 第1節 発掘調査に至る経緯

周囲を急峻な山々に囲まれた鳥取県では、他地域との交流をはかる上で交通網の整備が不可欠である。しかし、山陽方面との間には、中国山地の山々とその間に形成された狭くて屈曲を繰り返す谷筋が発達しており、交通網の整備に対して大きな障害となってきた。そのため、道には幅員が狭く勾配の急な箇所も多く、特に冬季の通行に際して大きな障害となっていた。そのため、住民の生活環境の向上のためにも強く要望されている道路改良工事が順次実施されているが、その一環として鳥取県西部から広島県北部に抜ける将来的幹線道となる地域高規格道路江府三次線（生山道路）工事が鳥取県によって実施されることになった。工事に先立って鳥取県埋蔵文化財センターと日野町教育委員会が踏査を行ったところ、日野郡日野町荒神原地内から土器散布地が確認された。そこで遺跡の範囲を確認するために日野町教育委員会が国及び県の補助金を得て試掘調査を実施することとなった。平成9年10月から実施された試掘調査の結果、いくつかのトレンチから土坑などの遺構や縄文土器などの土器類が出土し、遺跡の存在が確認された<sup>註1)</sup>。そこで、調査の結果、鳥取県根南土木事務所長から文化庁長官に対し発掘通知が提出され、発掘調査の指示を得て、財団法人鳥取県教育文化財団（以下、財団）が発掘調査を行うこととなった。鳥取県から発掘調査の委託を受けた財団は、文化庁長官に発掘調査の実施を届け出た上、平成10年度に西部埋蔵文化財糸子調査事務所日野分室を設置して2名の担当調査員を配置し上菅荒神原遺跡の調査を実施することになった。

## 第2節 調査の経過と方法

調査地は日野川右岸及び持ヶ瀧川左岸に形成された河岸段丘上に位置する上菅荒神原遺跡である。日野町教育委員会が実施した試掘調査によって、縄文時代後期から弥生時代前期にかけての多数の土器片、土坑・溝状遺構・ピットなどが検出された。遺構面は2面が確認されたために2面調査が必要と判断された。調査予定面積は総計6,912m<sup>2</sup>であり、発掘調査期間は平成10年の4月から10月までとなった。

調査地は便宜上北側をI区、南側をII区とした。

発掘調査は、4月6日に重機による表土剥ぎから開始した。表土剥ぎはII区から開始し続いてI区に移った。排水は調査区外の道路用地部分に搬出した。4月13日には作業員の稼働を始めた。日野町教育委員会による試掘調査はI区部分に2つのトレンチが設定されて掘り下げられていたため、土層の堆積状態は概略が分かっていたものの、II区部分にはトレンチが掘り下げられておらず堆積の様相が掴めていなかった。そのため、南北方向と東西方向に交差するトレンチを設定して掘り下げた。このトレンチを掘り下げた時点では明確な地山が確認できなかったが、幾度にも渡って砾を含む土砂が堆積したことが判明し、I区とは堆積状況が異なることが予想された。表土剥ぎ終了後、業者に委託して道路予定地のセンター杭に対応するグリッドを設定するための基準杭を設置した。そのため、グリッドは国土標識と対応していないが、調査区においては便宜上グリッド方位を使用して方位を記録した。第1遺構面の調査はII区から開始し、その後I区へと移った。第1遺構面の掘り下げは6月末で終了したため、業者に委託をしてラジコンヘリコプターを使用した調査区の遺構全体写真を7月1日に撮影する予定とし準備をした。しかし、業者の不手際により撮影ができなかつたためラジコンヘリコプターの使用を断念し、代わりにクレーンを利用した遺構全体写真を7月8日に撮影した。その後、I区の掘り下げを開始し第2遺構面の調査に着手した。I区の調査がほぼ終了した段階で再度重機を使用してII区の土を剥ぎ、調査を実施した。そして、10月21日に全ての調査を終了した。調査の工程上現地説明会は開催できなかつたが、見学は随時受け入れ、地元の菅福小学校児童の見学などがあった。

註1)『上菅荒神原遺跡試掘調査報告書』日野町教育委員会 1998

### 第3節 調査体制

#### ○調査主体 財団法人鳥取県教育文化財団

理事長	田 潤 康 允（鳥取県教育長）
常務理事	大和谷 朝（鳥取県教育委員会事務局次長）
事務局長	岡 山 宏 徳

#### 財団法人鳥取県教育文化財団 鳥取県埋蔵文化財センター

所 長	古 井 喜 紀（鳥取県埋蔵文化財センター所長）
次 長	八 木 谷 昇
調整係長	松 田 漢
調査員	小 谷 修 一（4～6月、退職）
主任事務職員	矢 部 美 恵
事務職員	大 川 秋 子

#### ○調査担当 財団法人鳥取県教育文化財団 鳥取県埋蔵文化財センター 西部埋蔵文化財糸子調査事務所日野分室

所 長	國 田 俊 雄
主任調査員	八 峰 興
	西 川 徹
調査補助員	秦 美 香
整理員	杉 田 千津子

#### ○調査指導 鳥取県教育委員会事務局文化課 鳥取県埋蔵文化財センター

#### ○調査協力 日野町教育委員会

##### 発掘作業従事者

石 田 茂 雄	石 田 進	石 田 美 知 子	伊 田 栄	稻 田 茂	奥 田 春 子
恩 田 孝 雄	金 田 公 子	小 谷 佐 枝 子	後 藤 多 喜 子	後 藤 行 永	柴 田 博
谷 口 千 鶴 子	西 囲 恵 美 子	西 村 か づ 子	西 村 茂 夫	長 谷 川 省 一 郎	長 谷 川 由 美 子
前 田 幸 子	松 本 寿 美 子	水 谷 照 美	矢 田 旦 茂	矢 田 旦 富 子	矢 田 川 重 雄
山 根 一 也	山 根 忠 良	山 本 千 寿 美	山 本 幸 男		

##### 整理作業従事者

大 角 展 子（旧姓青木）	清 水 房 了	(敬称略、五十音順)
---------------	---------	------------

## 第2章 位置と環境

### 第1節 地理的環境

#### 鳥取県

鳥取県は、本州の西部、中国地方の北東部に位置する。東は兵庫県、西は島根県、南は岡山県・広島県とそれ接し、北は日本海に面している。中国地方は、標高1200mを越える山々を擁する中国山地を隔てて、瀬戸内海に面する山陽地方と、日本海に面する山陰地方に分けられ、特に冬季の気候環境に大きな違いがみられる。晴れの日が多く乾燥している山陽地方に対し、山陰地方ではどんよりとした曇り空が続き積雪も多い。鳥取県はこのような山陰地方に属している。

鳥取県の県域は、東西約126km、南北約62km、面積約3,507km<sup>2</sup>である。県内には、鳥取市周辺を中心とする東部地域、倉吉市周辺を中心とする中部地域、米子市・境港市周辺を中心とする西部地域に大きく分けられる。各地域とも地勢は山がちであり、山地が県総面積の86.3%を占める。それぞれの地域には、県下を代表する三大河川である千代川（東部）、天神川（中部）、日野川（西部）が流れ、その下流域には、鳥取平野（東部）、倉吉・北条・羽合平野（中部）、米子平野（西部）が形成されている。各平野の海岸線には、全国的にも有名な鳥取砂丘をはじめとして、河川によって運ばれた多量の砂により大小の砂丘・砂州が発達している。

人々の生活領域は、山間の谷奥平野と海岸に開けた沖積平原に展開している。千代川下流域には、江戸時代に鳥取池田藩三十二万五千石の城下町として発展し、現在は県庁所在地である鳥取市が位置する。その南東側にはかつての律令時代には「因幡國」の国府が置かれていた国府町が位置している。天神川中流域には、かつての律令時代には「伯耆國」の国府が置かれていた倉吉市が位置している。日野川下流域には、「山陰の商都」と呼ばれる商業の町として発展してきた米子市が位置し、現在も交通の要所として発展している。米子市の北西に延びる弓ヶ浜半島の尖端部には、国内有数の漁業基地である境港市が位置している。

現在鳥取県は、前述した4市を中心として39市町村により構成されている。人口は、615,418人（平成10年12月1日現在）と47都道府県で最少であるが、自然の多い美しい景観を残している。

#### 日野町

日野町は、鳥取県の西部にある日野郡4町の中央部に位置し、東から南側にかけては岡山県と接し、西は日南町、北は溝口町・江府町と接している。

日野町域は、周囲を宝仏山・二子山・古崎山・鎌倉山などの標高500～1000m級の山々に囲まれているため、地勢は山がちであり、地目の9割以上を山林原野が占めている。そのため、緑豊かな美しい自然が残されており、河川にはオオサンショウウオの生息も確認されている。人々の生活領域は町を二分するように南西から北東方向に蛇行を繰り返して流れる日野川やその支流である板井原川・小川尻川などによってその流域に形成された点在する小規模な河岸段丘上に集中している。日野町は、東西約20km・南北約12km、面積約133.6km<sup>2</sup>、人口は4,781人（平成10年12月31日現在）である。

#### 調査地

調査地は日野町と日南町の町境から約100m日野町に入った地点に位置し、日野川と東側の山中から日野川に向けて流れ下って合流する持ヶ瀧川の影響によって日野川右岸に形成された細長い河岸段丘の南端部にあり、調査地の北側隣接部に持ヶ瀧川が流れる。周囲は花崗岩を基盤とする地域であるため、花崗岩に由来する真砂土が厚く堆積している。日野川を挟んで荒神原集落西側にある国道181号と国道183号の合流地点からは約700m南側で、標高は約280mを測り、日野川との比高差は約10mである。

## 第2節 歴史的環境

上菅荒神原遺跡が所在する日野町、隣接する日南町とも日野川の流域をその町域として分け合っており、元来は1つの地域圏として捉えることができる地域であるが、現時点では偶然発見された遺物が僅かに知られるのみで、共に発掘調査がほとんど行われていないため歴史的な解明は余り進んでいない。

日野町・日南町域に限らず、鳥取県内では旧石器時代の確実な造構は確認されていないが、大山山麓一帯を中心としていくつかの旧石器が発見されている。淀江町原畠出土の東山・杉久保型系統の黒曜石製ナイフ型石器、関金町野津三第1遺跡出土の茂呂型系統の黒曜石製ナイフ型石器、溝山町長山馬籠遺跡出土の細石刃様の石器などである。さらに、日南町上石見に隣接する岡山県神郷町野原の早風A地点遺跡から発掘調査によって水晶や黒曜石製のナイフ形石器や石核などが出土している。また、旧石器時代～縄文時代草創期のものとされる有舌尖頭器は、黒曜石製のものが淀江町中西尾から、サヌカイト製のものが日野郡内の溝口町の代遺跡・三部野遺跡・忠魂碑原、江府町の山神脇遺跡などで発見されている。

鳥取県内から草創期の土器は発見されていないが、大山山麓の縁辺部で点々と有舌尖頭器が出土していることを考えると、今後この時期の遺構・遺物が大山山麓を中心に発見される可能性は高い。また、尖頭器では江府町袋原でサヌカイト製のものが出土している。江府町の佐川第1遺跡からは早期～前期・後期～晩期の土器が出土し、竜王遺跡からは前期や後期の土器が出土している。日南町折渡遺跡からは早期の押型文土器が出土し、印賀からは水田中から後期のものと推測される縁起片岩製の石棒が出土。椎現ノ前遺跡から後期の土器が出土し、生山桜原遺跡から縄文が施された土器の底部・突唇文土器が出土した。日野町野田から磨消縄文を持つ後期の土器が出土している。なお、土器が出土していないため時期が不明であるが、日南町宝谷で石斧、福万来で石匙、日野町下安井で石斧、江府町苦塔で石斧・石匙・石鐵などが出土している。

日野町・日南町において弥生時代の水田遺跡は検出されていないが、小規模な水田が形成されていた可能性は否定できない。日野町内で弥生時代の明確な遺跡は多くないが、岩田遺跡で中期の竪穴住居跡が1棟出土している。なお、遺構に伴うものではないが上菅荒神原遺跡で前期の土器、黒坂字久住原で磨製石斧が出土している。日南町でも明確な遺跡に伴って遺構・遺物が出土した例は多くないが、生山桜原遺跡からは前期の壺が出土。丸山大洞遺跡からは竪穴住居跡や中期から後期の土器溝りが検出された。偶然の機会に遺物が見つかる例はかなりあり、笠木字削石では土坑中から中期の壺が出土した。なお、福万来の字椎現ノ前で中期の土器、同字杉ノ本道ノ下では赤彩されたものを含む後期の土器、同字山王塚や同字平ル林では大型蛤刃石斧などが出土している。また、出土地については不確実な点があるが新屋出土と伝えられる袈裟繩文銅鐸が存在する。

日野郡内では前期・中期段階の古墳は見つかっていない。しかし、後期になると他地域と同様に小規模な古墳から形成される群集墳が各地に出現する。日野町では遺物は不明ながら岩田古墳・櫻市古墳などの両袖式の横穴式石室を持つ古墳が知られ、舟場字荒神田にあった古墳から須恵器・鉄刀・刀子・管玉などが出土している。日南町は見つかっている古墳の数が多く前方後円墳も存在する。生山・印賀・笠木・宮内などに古墳群があり、生山の田の原古墳群には横穴式石室や箱式石棺を主体部とするものがあり、圭頭の柄頭が出土した古墳もあるという。印賀古墳群中には箱式石棺から人骨・耳環・須恵器・鉄器類が出土したものがある。下石見8号墳は横穴式石室をもつ小円墳であるが須恵器・耳環・鉄器類・玉類が出土した。丸山2号墳からは須恵器・土師器・鉄刀などと共に馬具の轡・杏葉が出土。名土古墳からは珠文鏡が出土。また、内ノ倉山横穴群・霞横穴群<sup>(1)</sup>などの横穴墓が見つかっており、内ノ倉山横穴群からは人骨と共に須恵器・土師器・耳環・玉類・鉄器類が出土。なお、山上小学校に陶館が所蔵されていたらしい<sup>(2)</sup>。

律令時代には現在の鳥取県域が西側の伯耆国と東側の因幡國の2国に編成されていた。伯耆国は六郡からなり、現在の日野町・日南町域は日野郡に該当するが、郡衙跡と推測される遺跡は発見されていない。奈良・平安時代の様相はほとんど分かっていないが、平安期以降鎌倉期までに石清水八幡宮の莊園である奈良原別宮が日野町内に置かれていたようである。鎌倉期末に後醍醐天皇が船上山に行在所を構えた元弘の船上合戦の折りには日野町

に本拠をもつ日野義行・義泰父子や金持広栄の一党が馳せ参じたとされ、多くの一族郎党を抱えた武士階級が形成されていたことが分かる。日南町印賀には南北朝時代の南朝方の「正平十二年」銘をもつ宝篋印塔が残されており、伯耆国守護の山名時氏に従って戦に赴く南朝方の武士が自らの死後の冥福を祈って建立したものとされている。戦国時代の永禄8年には江府町にあった江尾城主の蜂塚氏が尼子方であったため毛利軍に攻められ破れており、詳細は不明であるが、日南町を中心とする山上に山城跡とされるものが数多く残されており、伯耆国から備中国・美作国に接する交通路をめぐって争いが繰り返されたようである。江戸時代になると黒坂の町政が鳥取藩家老の福田氏に委任され、独自の支配を受けている。また、砂鉄の産出が容易であった日野郡内では鉄山経営が盛んであり、未調査のものが多いため詳細は不明であるが、日野町の才ノ原たら跡・持ヶ瀧山たら跡、日南町の阿太上東たら跡・大畠たら跡などの製鉄に関係すると推測される数多くの遺構が残されている。

#### 註

- (1) 1号墓と2号墓が離れているため、それぞれを田曾1号横穴墓、段1号横穴墓と分けて扱う考えもある。  
中原斉『伯耆国・口野川上流域における横穴墓の様相』『北谷ヒナ横穴群』江府町教育委員会 1990
- (2) 亀井熙人『日野郡の古代遺跡』『郷土と科学』第14巻第1・2号 1969  
山上小学校校長の澤田美紀人氏にお尋ねしたが、現在では所在不明のことである。

#### 参考文献

- 『旧石器・縄文時代の鳥取県』鳥取県埋蔵文化財センター 1988  
梅原末治『鳥取縣下に於ける有史以前の遺跡』 1921  
稲田孝司・日野琢郎『鳥取県関金町野津三第1遺跡の石器群』『岡山大学文学部紀要』第19号 1993  
『長山馬籠遺跡』溝口町教育委員会 1989  
『野原遺跡(早風A地点)発掘調査報告書』岡山県教育委員会 1977  
『野原遺跡群 一早風A地点-』岡山県教育委員会 1979  
安川豊史『先土器時代』『岡山県の考古学』 1987  
『溝口町内遺跡発掘調査報告書 一代遺跡-』溝口町教育委員会 1990  
『三部野遺跡発掘調査報告書』溝口町教育委員会 1990  
根鈴輝雄『山陰の尖頭器』『考古学ジャーナル』No435 1998  
『佐川遺跡群』財団法人鳥取県教育文化財団 1986  
『日南町史 一自然・文化-』日南町 1984  
『生山桜原遺跡試掘調査報告書』日南町教育委員会 1993  
『日野町史』日野町 1970  
『岩田遺跡発掘調査報告書』日野町教育委員会 1980  
『丸山4号墳・丸山大洞遺跡・田の原2号墳』日南町教育委員会 1990  
『丸山大洞遺跡発掘調査報告書』日南町教育委員会 1990  
『下石見8号墳』日南町教育委員会 1993  
『印賀古墳群 一印賀6・7・26号墳の調査-』日南町教育委員会 1992  
『内・倉山横穴群発掘調査報告書』日南町教育委員会 1986  
『内・倉山横穴群II発掘調査報告書』日南町教育委員会 1989  
『歴史時代の鳥取県』鳥取県埋蔵文化財センター 1989  
『鳥取県史2 一中世-』鳥取県 1973  
内藤正中・真田廣幸・日置象左エ門『鳥取県の歴史』 1997  
『鳥取県生産遺跡分布調査報告書』鳥取県教育委員会 1984

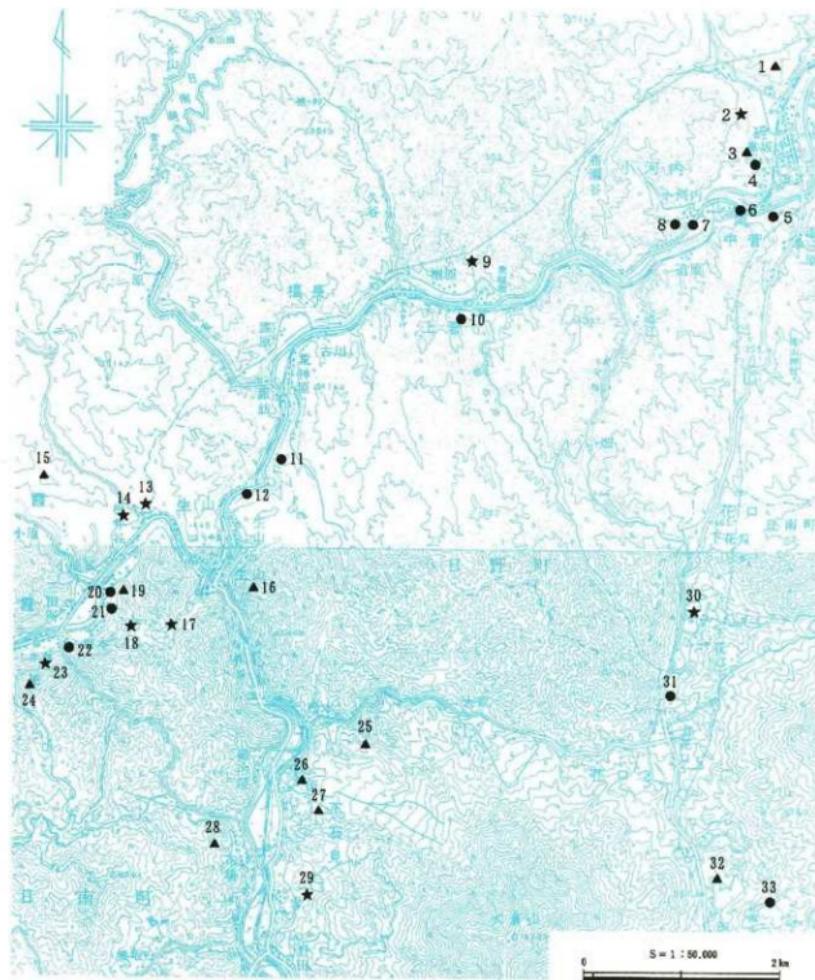
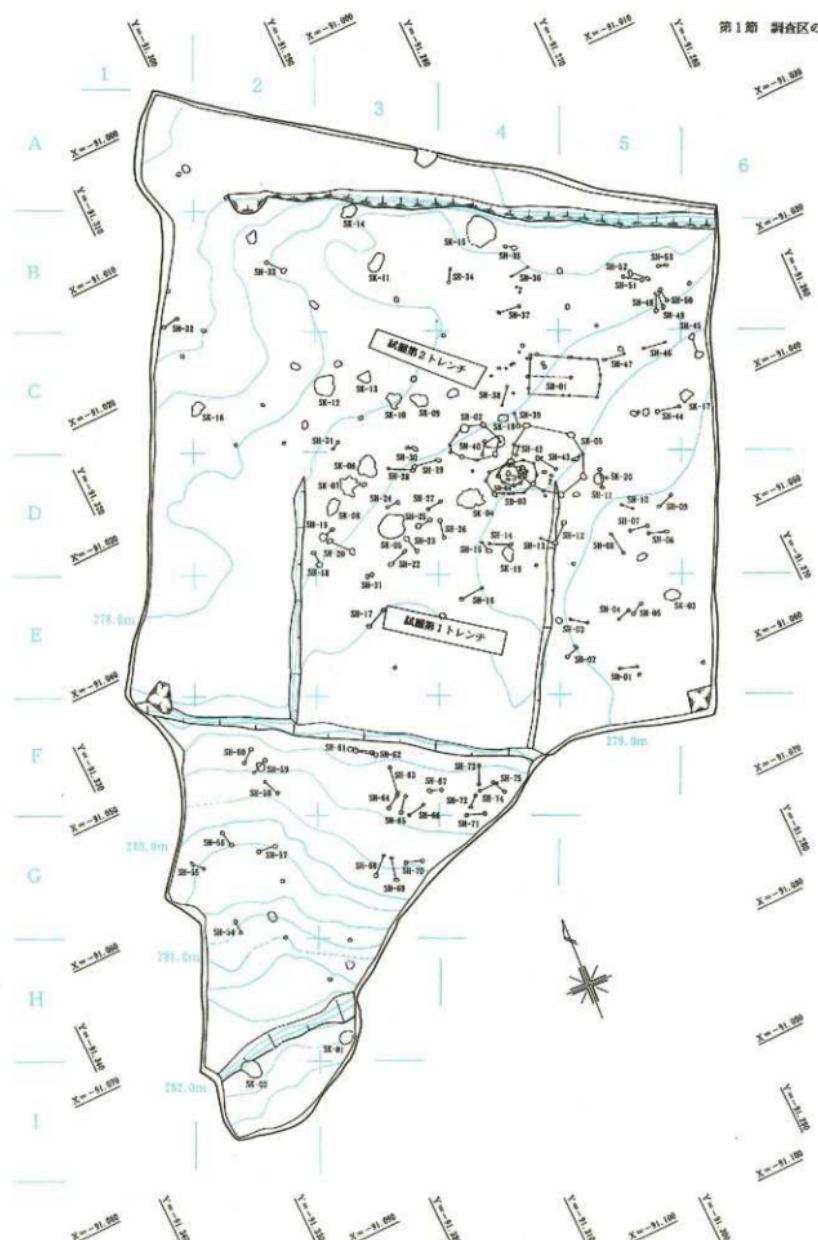


図2 周辺遺跡分布図

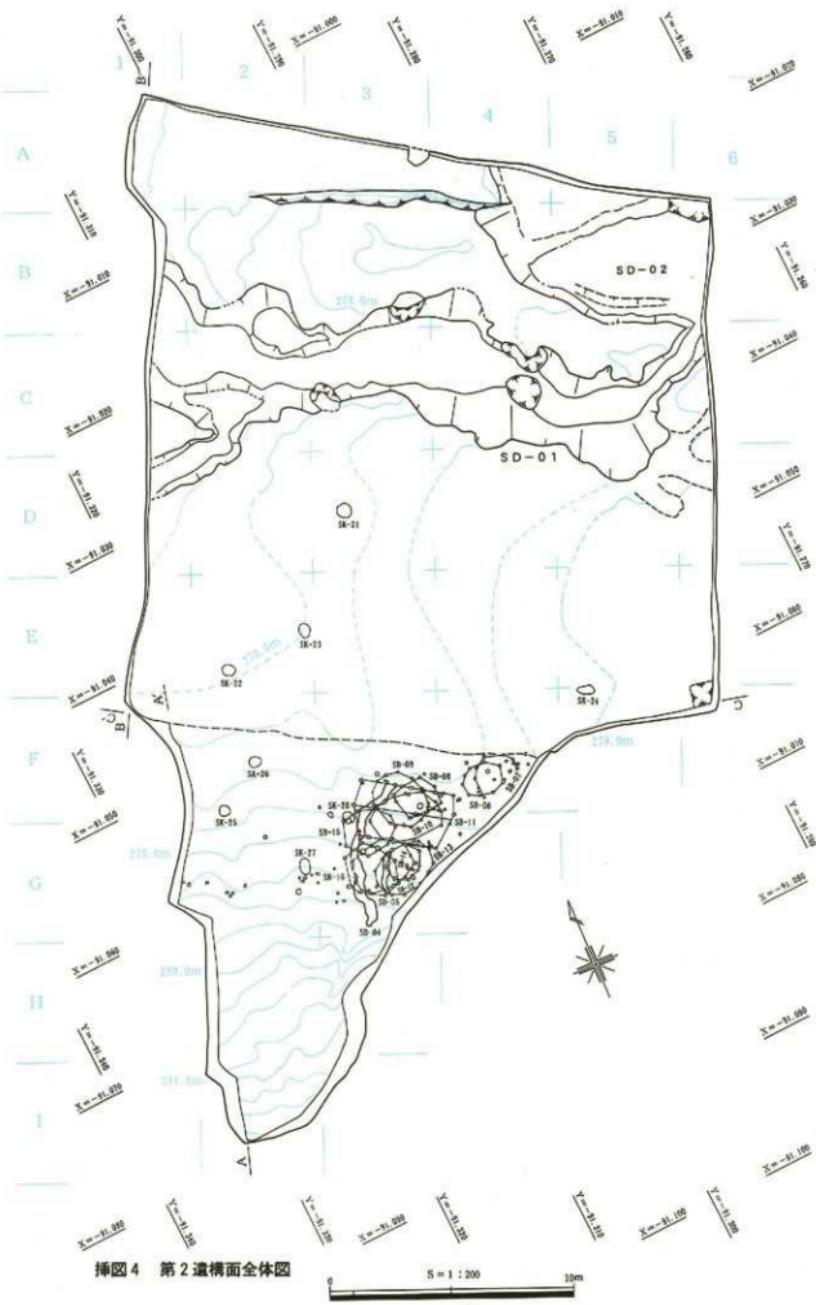
- |             |             |               |              |
|-------------|-------------|---------------|--------------|
| 日野町         | 9. 福長1号横穴   | 17. 田ノ原古墳群    | 26. 下石見若跡    |
| 1. 黒板要害山    | 10. 上菅所在遺跡  | 18. 霞古墳群      | 27. 下石見原所在城跡 |
| 2. 橫手古墳     | 11. 上菅荒神原遺跡 | 19. 段の原要害跡    | 28. 市場所在城跡   |
| 3. 黒板城跡     | 12. 生山桜原遺跡  | 20. 段遺跡       | 29. 下石見古墳群   |
| 4. 愛宕山遺跡    | 13. 板井谷古墳   | 21. 霞板本遺跡     | 30. 花口1号墳    |
| 5. 中畠所在遺跡   | 14. 内ノ倉山横穴群 | 22. 霞牛ノ尾遺跡    | 31. 花口上所在古墓  |
| 6. 中菅遺跡     | 15. 板井谷所在城跡 | 23. 霞1号横穴     | 32. 神戸上所在城跡  |
| 7. 小河内所在遺跡1 | 16. 龜井山城跡   | 24. 霞所在城跡     | 33. 神戸上所在遺跡2 |
| 8. 小河内所在遺跡2 |             | 25. 下石見松本所在城跡 |              |

第1節 調査区の概況



插図3 第1調査面全体図

S = 1 : 200  
10m



插図4 第2遭構面全体図

S = 1 : 200

## 第3章 上菅荒神原遺跡の調査

### 第1節 調査区の層序

調査区は日野川の右岸にあり、調査区西際は日野川の東岸から約50~70m程東の中・低位段丘上に立地する。調査区の北際から7~14m程北には持ヶ瀧川が西流して日野川に流れ込んでおり、調査区はこの川が造り出した扇状地の端付近に位置する。調査区がI区は東から西、II区は南から北に向かう棚田として使われており斜面の上側は削平されるが、遺構の遺存状態は縄文時代の遺跡としては比較的よいと思われる。

調査区の土壤は基本的に真砂土で、いわゆる白真砂という花崗岩の風化したものである。真砂には良質な鉄分を多く含み、持ヶ瀧川の上流でも近世以降たたらが行われ、調査区内や持ヶ瀧川にも鉄滓が散見できた。調査区の南西側では日野川に向けて山が張り出しており、堆積物には河原石などはみられず、ほとんどが花崗岩の岩や大石、あるいは風化した角礫や粗粒花崗岩である。この中には半花崗岩（アブライト）も含まれる。周辺の地形、生山付近から日野川の下流域付近には岩が柱状に切り立っている地形が目立つが、これは花崗岩と半花崗岩の風化の時間差により形成されたものと考えられる。

調査区の南端は山裾で、北に向けて傾斜する地形である。ただし堆積状況は南側の山からの土砂に加え東側の持ヶ瀧川上流からの土砂も加わり非常に複雑である。調査の結果、遺構面を2面確認した。

西壁の土層をみるとII区では南側斜面部からの土砂により厚い堆積をしている。第1遺構面では住居・土坑・ピット、第2遺構面でも住居・土坑・ピット・落し穴・溝を検出した。遺構面の間には最低でも80cm、深いところでは1mもの土砂の堆積がある。この土層の堆積はレンズ状堆積がほとんどで、安定した堆積状況を示している。I区では第1遺構面の上面が耕作のため掘削されており不明瞭であるが、第1遺構面と第2遺構面の差はII区との境で約30cm程度である。北に向かい遺構面の差は徐々に小さくなり、約15m程で同一遺構面となる。またI-II区間の堆積をみると、東側に向かい遺構面の間の堆積は小さくなっていることがわかる。

東壁の土層をみると、I区の南隅付近では耕作土を除去するとすぐに褐色の真砂が現れ、この面はすでに第1・第2遺構面の同一面である。それが西壁とは逆に、15m程北から第1・第2遺構面に分かれ、北の隅でまた同一遺構面となる。この原因は調査区を東西方向に横切る自然流路SD-01によるものとみられる。SD-01にどの段階まで水が流れていたかは不明であるが、徐々に堆積していく過程があり、下方から第2遺構面、暗茶褐色土包含層、第1遺構面、黒色土包含層と明瞭に区分される。しかしこの範囲は川の上流方向から下流に向かうため、調査区の東壁付近では明確に高低差があるが西壁に向かい堆積は徐々に小さくなり、西壁付近では一つの遺構面しか検出できない。また東壁の北側では、C-6グリッドから北側の黒色土包含層の上層部で斜め方向に入りいわゆるクサビ状の堆積がみられ、土石流のような堆積状況を示している。位置的にみると持ヶ瀧川からのものとみられる。

次に遺構面よりも下層の堆積であるが、最終的に掘り下げた結果からみると、I区の南東隅から北方向に向かい幅の広い流路が確認された。これをSD-03としているが、この底面にはきめの細かい砂の上に角礫や亜角礫が堆積する不自然な堆積状況を示しており、東側の山側付近を土砂の供給源とする大水があったものと考えられる。この遺構はSD-01の底面よりさらに深いため、時期的には遙かと考えられる。SD-03の西側の肩であるが、この部分の山土を削りとったものとみられる。つまり山が北側に舌状に張り出した部分に沿うように持ヶ瀧川が南に振られたものと解釈したい。張り出し部の西側は緩やかに西方向に下るが、調査区の西壁手前で急激に日野川に向かって下る。原因は不明であるが日野川との関連を想定した方がよいかと思われる。

出土した遺物の時期は、縄文時代早期・中期・後期・晚期～弥生前期・弥生中期・後期とあり、少量ではあるが幅広い時期に認められた。遺構面の時期は不確定であるが、土層をみるとかぎり遺構面付近は比較的安定しており、付近に自然流路もあることから、断続的ではあるものの縄文から弥生時代を通じて生活の場として利用されていたことがうかがわれる。

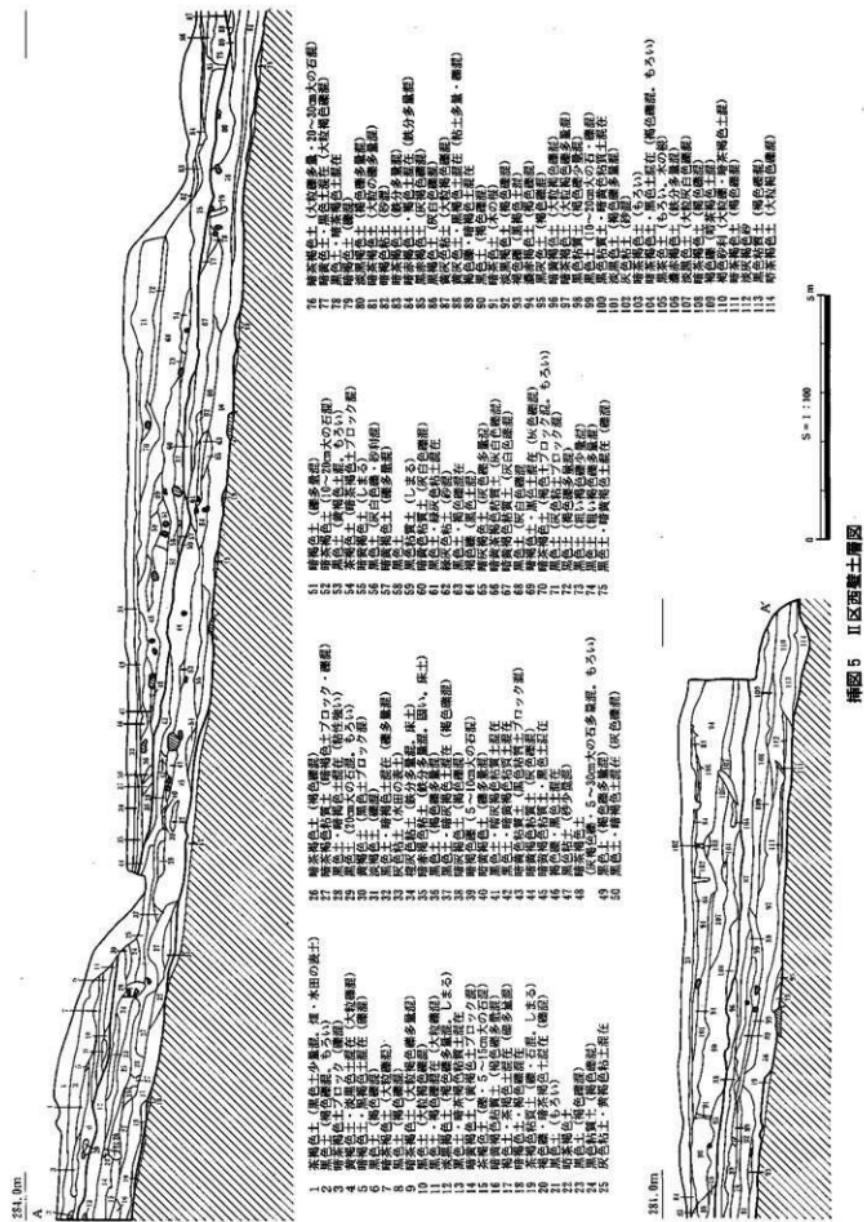


插图 5 II区西壁土质图

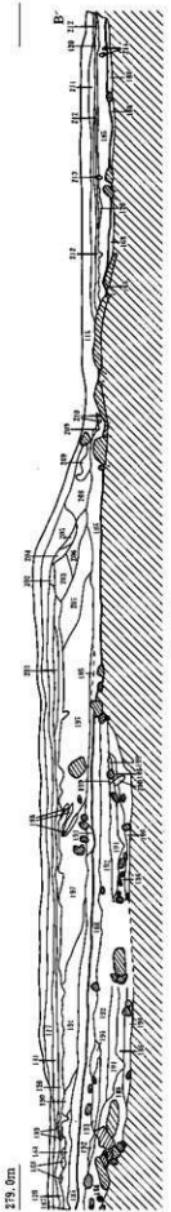
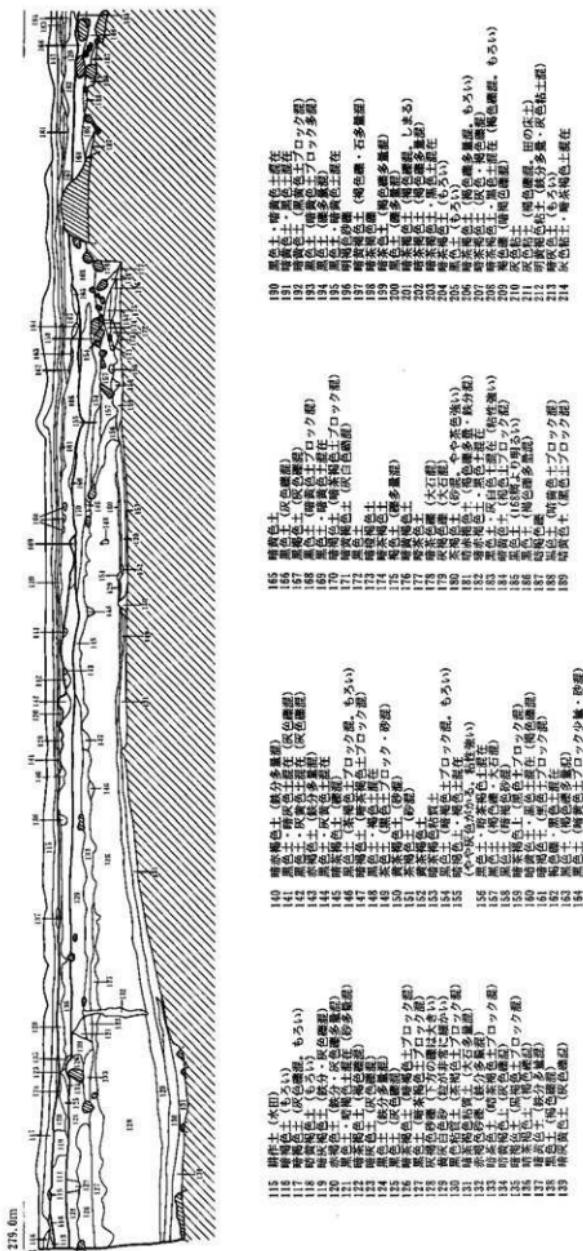
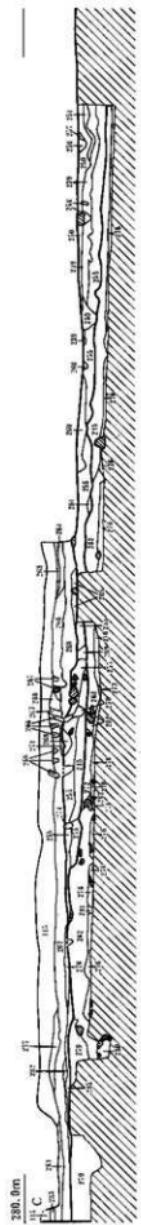
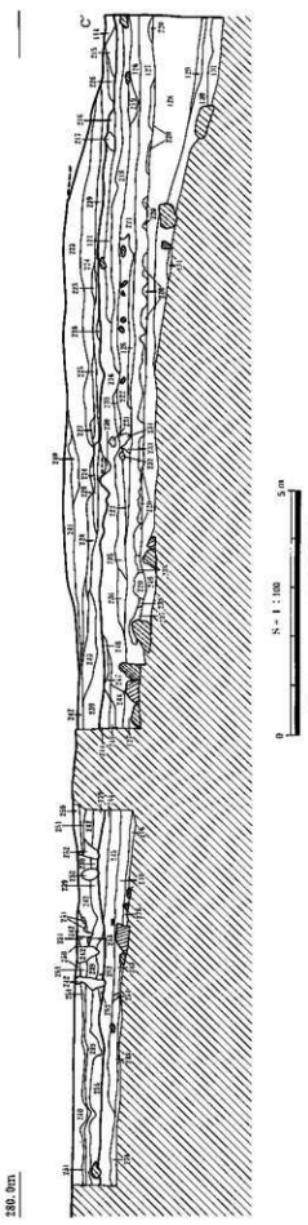


図6 1区西壁土層図



- 215 暗褐色土 (砂質土) (砂質土ブロック層)  
216 長英岩層 (黑色土・黒色土層) (5~15cmの大いさの石)  
217 黒色土・黒色土層 (多量泥炭)  
218 黄褐色土・黒色土・多量泥炭 (黒色土層)  
219 黑褐色土 (多量泥炭)  
220 黑褐色土 (多量泥炭)  
221 黑褐色土 (多量泥炭)  
222 黑褐色土 (多量泥炭)  
223 黑褐色土 (多量泥炭)  
224 黑褐色土 (多量泥炭)  
225 黑褐色土 (砂質土) (砂質土)  
226 黑褐色土 (砂質土)  
227 黑褐色土 (砂質土)  
228 黑褐色土 (砂質土)  
229 黑褐色土 (砂質土)  
230 黑褐色土 (砂質土) (10cmの大いさの石)  
231 黑褐色土 (砂質土) (多量泥炭)  
232 黑褐色土 (砂質土) (多量泥炭)  
233 黑褐色土 (砂質土) (多量泥炭)  
234 黑褐色土 (砂質土) (多量泥炭)  
235 黑褐色土 (砂質土) (多量泥炭)  
236 黑褐色土 (砂質土) (多量泥炭)  
237 黑褐色土 (砂質土) (多量泥炭)  
238 黑褐色土 (砂質土) (多量泥炭)  
239 黑褐色土 (砂質土) (多量泥炭)  
240 黑褐色土 (砂質土) (砂質土)  
241 黑褐色土 (砂質土) (砂質土)  
242 黑褐色土 (砂質土) (砂質土)  
243 黑褐色土 (砂質土) (砂質土)  
244 黑褐色土 (砂質土) (砂質土)  
245 黑褐色土 (砂質土) (砂質土)  
246 黑褐色土 (砂質土) (砂質土)  
247 黑褐色土 (砂質土) (砂質土)  
248 黑褐色土 (砂質土) (砂質土)  
249 黑褐色土 (砂質土) (砂質土)  
250 黑褐色土 (砂質土) (砂質土)  
251 黑褐色土 (砂質土) (砂質土)  
252 黑褐色土 (砂質土) (砂質土)  
253 黑褐色土 (砂質土) (砂質土)  
254 黑褐色土 (砂質土) (砂質土)  
255 黑褐色土 (砂質土) (砂質土)  
256 黑褐色土 (砂質土) (砂質土)  
257 黑褐色土 (砂質土) (砂質土)  
258 黑褐色土 (砂質土) (砂質土)  
259 黑褐色土 (砂質土) (砂質土)  
260 黑褐色土 (砂質土) (砂質土)  
261 黑褐色土 (砂質土) (砂質土)  
262 黑褐色土 (砂質土) (砂質土)  
263 黑褐色土 (砂質土) (砂質土)  
264 黑褐色土 (砂質土) (砂質土)  
265 黑褐色土 (砂質土) (砂質土)  
266 黑褐色土 (砂質土) (砂質土)  
267 黑褐色土 (砂質土) (砂質土)  
268 黑褐色土 (砂質土) (砂質土)  
269 黑褐色土 (砂質土) (砂質土)  
270 黑褐色土 (砂質土) (砂質土)  
271 黑褐色土 (砂質土) (砂質土)  
272 黑褐色土 (砂質土) (砂質土)  
273 黑褐色土 (砂質土) (砂質土)  
274 黑褐色土 (砂質土) (砂質土)  
275 黑褐色土 (砂質土) (砂質土)  
276 黑褐色土 (砂質土) (砂質土)  
277 黑褐色土 (砂質土) (砂質土)  
278 黑褐色土 (砂質土) (砂質土)  
279 黑褐色土 (砂質土) (砂質土)  
280 黑褐色土 (砂質土) (砂質土)  
281 黑褐色土 (砂質土) (砂質土)  
282 黑褐色土 (砂質土) (砂質土)  
283 黑褐色土 (砂質土) (砂質土)  
284 黑褐色土 (砂質土) (砂質土)  
285 黑褐色土 (砂質土) (砂質土)



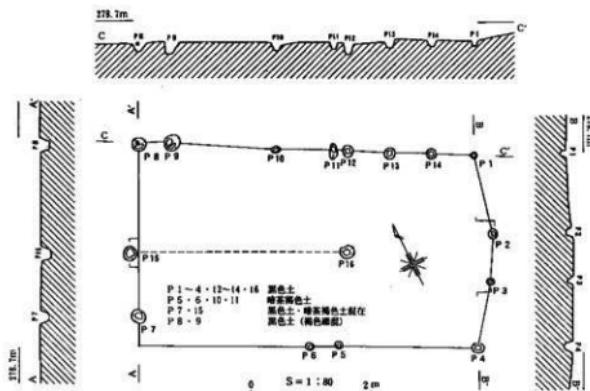
插図7 I-II区断面図

## 第2節 平地住居

I区第1造構面、II区第1・第2造構面上でピット群が確認された。調査当初は周囲も含めて炉跡や焼土、壁間の溝や窓穴の痕跡等も確認できないことからピット群としていたが、東京国立文化財研究所の宮本長二郎氏により、平面形が円形および椭円形の壁立式平地住居14棟、平面形が方形の梁間1間型平地住居2棟、推定ではあるが平面形が円形の主柱2本型伏屋式平地住居が復元された。詳細については、第4章の宮本長二郎「上古荒神原遺跡の住居構造」を参照していただきたい。

このうち壁立式平地住居と梁間1間型平地住居は、I区第1造構面からSB-01～05の5棟が、II区では第2造構面からSB-06～16の11棟を復元した。主軸はSB-01～05では大きな差はみられないが、II区ではSB-06・08・10・12～15とSB-07・09・16の主軸が直交しており、それぞれまとまりが想定できる。ただしSB-11は主軸を異にしている。円形平面の主柱2本型伏屋式平地住居は75棟で、SH-01～53までの53棟はI区第1造構面上、SH-54～75の22棟はII区の第2造構面上で検出され、調査区のほぼ全域に散在する。

次に各棟の概要について記述するが、円形平面の主柱2本型伏屋式平地住居については推定であるため造構毎の説明は行わず、規模等は一覧表に記した。SB・SHとともに一覧表の柱穴間距離については、基本的に次番号の柱穴との間の距離のこととし、番号順でないものについては該当する柱穴名を( )内に記している。したがって出土遺物を中心に記述を進めるが、ここでいう粗製土器とは突帯文土器深鉢の体部または内外面無文の深鉢の体部のことである。その理由として尚者が区別ができないためであるが、誤解を招くおそれもある。しかし体部片では縄文土器か弥生土器かという問題も含まれてくるが、ここでは突帯文土器の器形を壺ではなく深鉢としていることから、縄文土器の手法・焼成を踏襲する体部片という意味で粗製土器として記述しておく。



插図8 SB-01造構図

插表1 SB-01ピット一覧表

新番号	旧番号	長 軸	短 軸	深 さ	造 物	柱穴間距離	新番号	旧番号	長 軸	短 軸	深 さ	造 物	柱穴間距離
P1	P215	12cm	11cm	10cm		1.34m	P 9	P234	27cm	20cm	20cm		1.74m
P2	P213	16cm	14cm	11cm		0.79m	P 10	P220	16cm	11cm	15cm		0.98m
P3	P212	13cm	12cm	11cm		1.10m	P 11	P219	26cm	15cm	15cm		0.34m
P4	P211	20cm	17cm	16cm		2.33m	P 12	P218	19cm	17cm	20cm		0.70m
P5	P221	13cm	12cm	8cm		0.46m	P 13	P217	17cm	15cm	16cm		0.69m
P6	P222	14cm	13cm	27cm		—	P 14	P216	17cm	16cm	12cm		0.71m(P1)
P7	P229	24cm	21cm	15cm		2.85m	P 15	P228	25cm	21cm	16cm		3.57m
P8	P225	23cm	23cm	18cm	粗製土器	0.52m	P 16	P210	24cm	22cm	10cm		—
							平均		19.1cm	16.1cm	14.9cm		1.29m

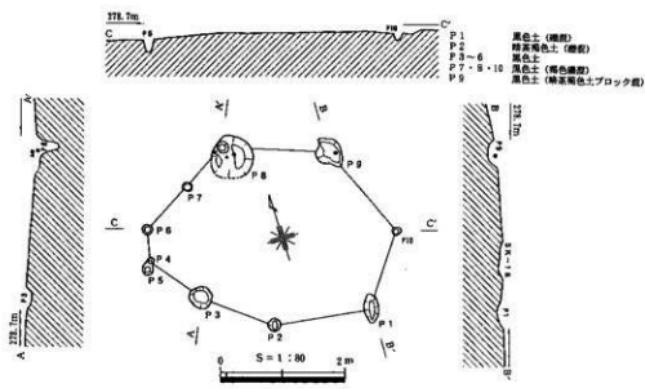


図9 SB-02構造図

表2 SB-02ピット一覧表

新番号	旧番号	長軸	短軸	深さ	遺物	柱穴間距離	新番号	旧番号	長軸	短軸	深さ	遺物	柱穴間距離
P1	P195	47cm	24cm	14cm		1.60m	P 6	P 246	17cm	17cm	22cm		0.96m
P2	P199	22cm	22cm	11cm		1.29m	P 7	P 245	19cm	15cm	20cm		0.87m
P3	P132	36cm	35cm	9cm		1.01m	P 8	P 149	71cm	66cm	46cm	粗製土器	1.72m
P4	P202	△11cm	11cm	7cm		0.52m(P6)	P 9	P 243	55cm	43cm	16cm	粗製土器	1.70m
P5	P201	18cm	△15cm	13cm		—	P 10	P 148	15cm	12cm	15cm		1.32m(P1)
平均							平均						

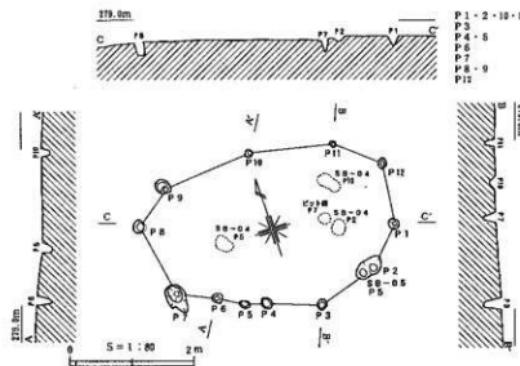
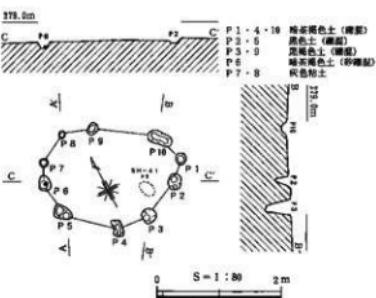


図10 SB-03構造図

表3 SB-03ピット一覧表

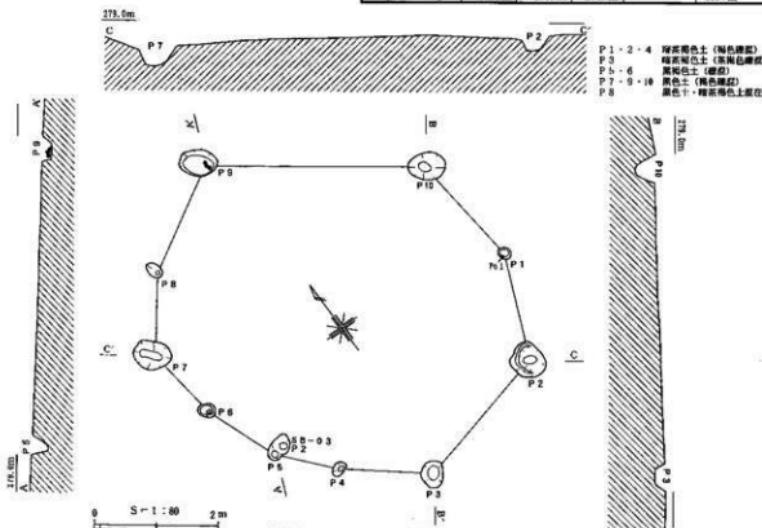
新番号	旧番号	長軸	短軸	深さ	遺物	柱穴間距離	新番号	旧番号	長軸	短軸	深さ	遺物	柱穴間距離
P1	P106	19cm	16cm	16cm		0.80m	P 7	P 124	51cm	30cm	23cm		1.23m
P2	P105	27cm	△23cm	28cm		1.03m	P 8	P 197	22cm	17cm	20cm		0.75m
P3	P109	16cm	15cm	16cm		0.91m	P 9	P 196	27cm	17cm	12cm		1.48m
P4	P121	19cm	16cm	32cm		0.34m	P 10	P 119	13cm	12cm	14cm		1.37m
P5	P122	16cm	13cm	9cm		0.47m	P 11	P 116	10cm	9cm	15cm		0.86m
P6	P123	17cm	17cm	23cm		0.66m	P 12	P 107	17cm	14cm	26cm		1.00m(P1)
平均							平均						



插図11 SB-04遺構図

插表4 SB-04ピット一覧表

新番号	旧番号	長軸	短軸	深さ	遺物	柱穴間距離	新番号	旧番号	長軸	短軸	深さ	遺物	柱穴間距離
P1	184	20cm	16cm	29cm		0.35m	P 6	P192	25cm	19cm	13cm	粗製土器	0.37m
P2	112	27cm	22cm	12cm		0.76m	P 7	P191	14cm	12cm	13cm		0.54m
P3	110	23cm	23cm	41cm		0.49m	P 8	P190	13cm	12cm	18cm		0.49m
P4	187	28cm	14cm	25cm		0.86m	P 9	P118	22cm	16cm	25cm		1.04m
P5	125	32cm	23cm	16cm		0.62m	P10	P185	40cm	22cm	9cm		0.57m (P1)
平均							平均						



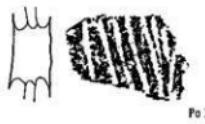
插図12 SB-05遺構図

插表5 SB-05ピット一覧表

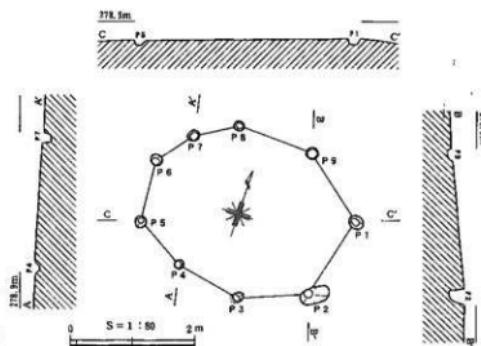
新番号	旧番号	長軸	短軸	深さ	遺物	柱穴間距離	新番号	旧番号	長軸	短軸	深さ	遺物	柱穴間距離
P1	P 94	25cm	20cm	25cm	木棒2式	1.79m	P 6	P114	30cm	23cm	18cm		1.27m
P2	P178	56cm	48cm	22cm		2.41m	P 7	P120	64cm	48cm	40cm	黒曜石刮削器	1.34m
P3	P 99	45cm	37cm	22cm		1.52m	P 8	P233	29cm	18cm	25cm		1.90m
P4	P101	27cm	18cm	19cm		1.10m	P 9	P144	64cm	43cm	20cm	粗製土器	3.59m
P5	P186	26cm	△23cm	30cm		1.27m	P10	P143	51cm	45cm	35cm		1.90m (P1)
平均							平均						

插表6 SB-05P1土器観察表

遺物名 旧番号	遺構名	種類	形 品	法 量 (cm)	地盤上の特徴 外 面 装 置	内面調整	内面色調	外面色調	胎土・焼成	取上No.	備考	実測點
Po 1 13 3	SB-05 P1	攤文中窓 陶鉢	①△ 1.7	I	1枚の網目文を約3mm間隔に施す。一部斜め方向に並ぶ。	傾力向のナデ。	明赤褐色 5YR5/6	明赤褐色 5YR5/6	赤・良好	1616	里木2式 旧番号 P94	清水:149



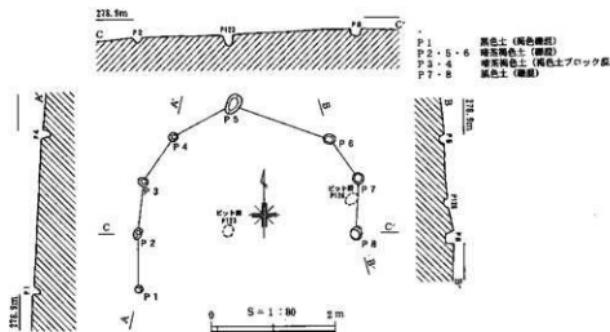
插図13 SB-05P1土器実測図



插図14 SB-06遺構図

插表7 SB-06ピット一覧表

新番号	旧番号	長 軸	短 軸	深 さ	遺 物	柱穴間距離	新番号	旧番号	長 軸	短 軸	深 さ	遺 物	柱穴間距離
P1	P295	25cm	20cm	13cm		1.41m	P6	P301	18cm	17cm	10cm		0.74m
P2	P292	48cm	25cm	26cm		1.20m	P7	P300	22cm	17cm	14cm		0.77m
P3	P304	18cm	15cm	12cm		1.09m	P8	P307	16cm	16cm	7cm		1.26m
P4	P303	16cm	13cm	7cm	0.94m		P9	P310	20cm	19cm	9cm		1.32m(P1)
P5	P302	20cm	18cm	8cm		0.98m	平	均	22.6cm	17.8cm	11.8cm		1.08m



插図15 SB-07遺構図

插表8 SB-07ピット一覧表

新番号	旧番号	長 軸	短 軸	深 さ	遺 物	柱穴間距離	新番号	旧番号	長 軸	短 軸	深 さ	遺 物	柱穴間距離
P1	P309	15cm	12cm	9cm		0.94m	P5	P311	44cm	22cm	15cm		1.66m
P2	P305	19cm	14cm	9cm		0.84m	P6	P294	17cm	16cm	9cm		0.79m
P3	P306	16cm	15cm	15cm		0.90m	P7	P291	19cm	18cm	7cm		0.92m
P4	P299	14cm	14cm	6cm		1.08m	P8	P287	21cm	18cm	14cm		—
		平 均						平 均	20.4cm	16.1cm	10.5cm		1.09m

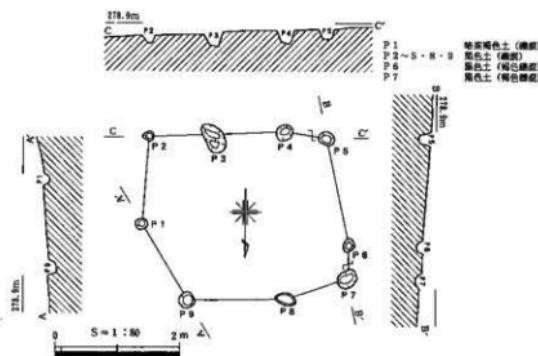


図16 SB-08遺構図

表9 SB-08ピット一覧表

新番号	旧番号	長軸	短軸	深さ	遺物	柱穴間距離	新番号	旧番号	長軸	短軸	深さ	遺物	柱穴間距離
P1	P374	21cm	15cm	11cm		1.44m	P6	P336	21cm	19cm	11cm		0.55m
P2	P327	18cm	18cm	12cm		1.05m	P7	P337	32cm	26cm	13cm		1.06m
P3	P326	49cm	30cm	25cm		1.15m	P8	P338	25cm	21cm	7cm		1.60m
P4	P356	29cm	25cm	23cm		0.71m	P9	P344	25cm	24cm	14cm		1.45m(P1)
P5	P355	26cm	21cm	20cm		1.78m	平 均		27.3cm	22.4cm	15.1cm		1.20m

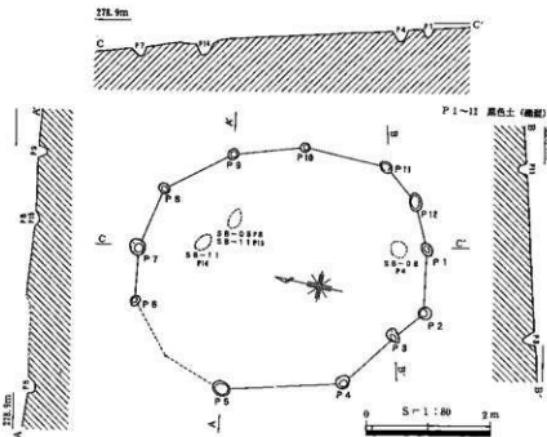


図17 SB-09遺構図

表10 SB-09ピット一覧表

新番号	旧番号	長軸	短軸	深さ	遺物	柱穴間距離	新番号	旧番号	長軸	短軸	深さ	遺物	柱穴間距離
P1	P359	24cm	18cm	15cm		1.04m	P7	P361	27cm	24cm	16cm		1.05m
P2	P349	21cm	21cm	22cm		0.63m	P8	P345	20cm	19cm	13cm		1.26m
P3	P341	27cm	19cm	23cm		1.10m	P9	P355	18cm	16cm	14cm		1.20m
P4	P348	23cm	20cm	25cm		1.99m	P10	P331	15cm	15cm	16cm		1.34m
P5	P347	30cm	28cm	18cm			P11	P343	22cm	17cm	15cm		0.74m
P6	P362	19cm	12cm	9cm		0.85m	P12	P325	29cm	20cm	26cm		0.78m(P1)
		平 均		22.9cm		19.1cm		17.7cm					1.09m

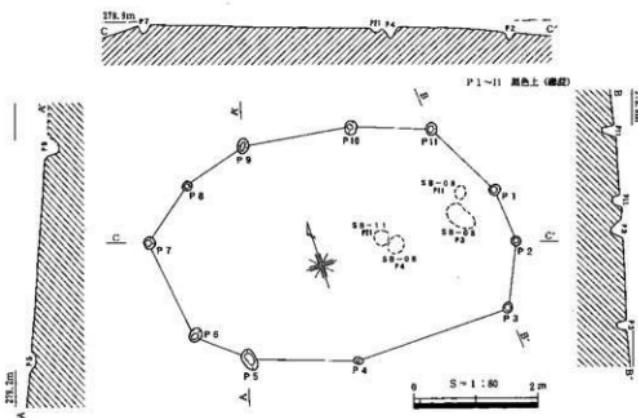


図18 SB-10造構図

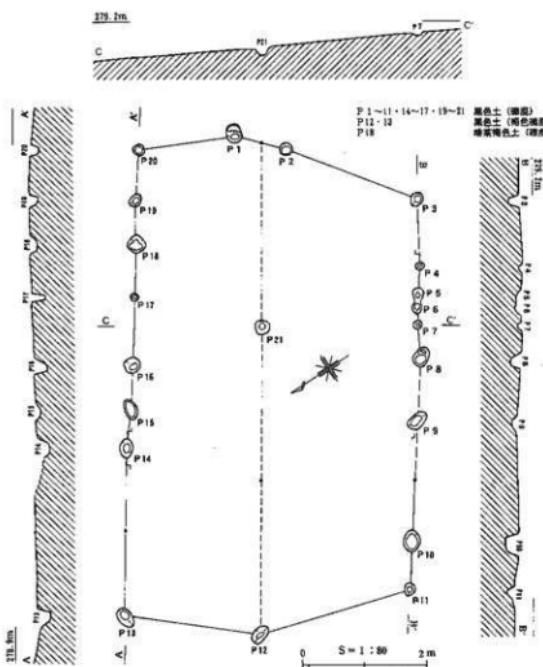


図19 SB-11造構図

插表11 SB-10ビット一覧表

新番号	旧番号	長軸	短軸	深さ	遺物	柱穴間距離	新番号	旧番号	長軸	短軸	深さ	遺物	柱穴間距離
P1	P328	18cm	17cm	14cm		0.91m	P7	P358	19cm	16cm	14cm		1.12m
P2	P322	16cm	16cm	12cm		1.10m	P8	P365	17cm	16cm	6cm		1.12m
P3	P321	18cm	17cm	16cm		2.58m	P9	P353	27cm	16cm	14cm		1.78m
P4	P401	15cm	11cm	6cm		1.77m	P10	P334	22cm	19cm	17cm		1.32m
P5	P402	34cm	20cm	7cm		0.98m	P11	P332	21cm	18cm	22cm		1.43m(P1)
P6	P377	25cm	19cm	18cm		1.69m	平均	21.1cm	17.2cm	13.3cm		1.44m	

插表12 SB-11ビット一覧表

新番号	旧番号	長軸	短軸	深さ	遺物	柱穴間距離	新番号	旧番号	長軸	短軸	深さ	遺物	柱穴間距離
P1	P315	31cm	26cm	16cm		0.85	P12	P359	34cm	20cm	12cm		2.23m
P2	P314	22cm	20cm	15cm		2.29m	P13	P364	35cm	21cm	21cm		2.72m
P3	P362	23cm	20cm	19cm		1.09m	P14	P352	32cm	22cm	17cm		0.63m
P4	P396	14cm	13cm	4cm		0.49m	P15	P338	25cm	21cm	7cm		0.71m
P5	P397	17cm	△15cm	10cm		0.18m	P16	P351	26cm	25cm	23cm		1.15m
P6	P398	△17cm	17cm	10cm		0.30m	P17	P330	15cm	14cm	24cm		0.86m
P7	P399	15cm	15cm	5cm		0.58m	P18	P342	30cm	29cm	15cm		0.72m
P8	P384	33cm	23cm	20cm		0.99m	P19	P319	21cm	17cm	14cm		0.84m
P9	P402	34cm	20cm	7cm		1.98m	P20	P318	18cm	18cm	13cm		1.58m(P1)
P10	P376	34cm	27cm	25cm		0.79m	P21	P340	25cm	24cm	15cm		—
P11	P372	22cm	20cm	12cm		2.54m	平均	25.4cm	20.6cm	14.5cm		1.18m	

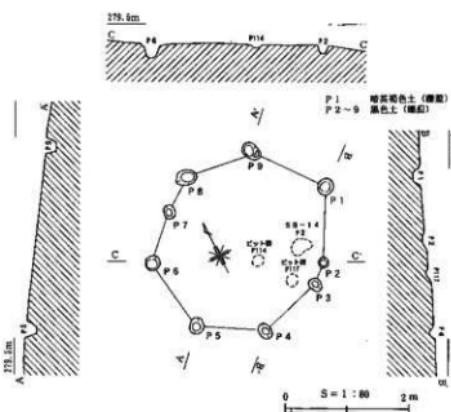


插图20 SB-12遺構図

插表13 SB-12ビット一覧表

新番号	旧番号	長軸	短軸	深さ	遺物	柱穴間距離	新番号	旧番号	長軸	短軸	深さ	遺物	柱穴間距離
P1	P391	28cm	25cm	13cm		1.25m	P6	P387	25cm	24cm	20cm		0.89cm
P2	P390	18cm	16cm	15cm		0.37m	P7	P388	23cm	19cm	12cm		0.65cm
P3	P415	24cm	19cm	12cm		1.13m	P8	P386	35cm	25cm	18cm		1.15cm
P4	P418	26cm	19cm	12cm		1.13m	P9	P384	33cm	23cm	20cm		1.30m(P1)
P5	P388	27cm	23cm	19cm		1.25m	平均	26.7cm	21.4cm	15.7cm		1.01cm	

插表14 SB-13ビット一覧表

新番号	旧番号	長軸	短軸	深さ	遺物	柱穴間距離	新番号	旧番号	長軸	短軸	深さ	遺物	柱穴間距離
P1	P393	20cm	16cm	18cm		1.16m	P7	P376	17cm	16cm	10cm		1.14m
P2	P382	20cm	19cm	21cm		0.88m	P8	P427	17cm	17cm	11cm		1.20m
P3	P416	23cm	18cm	18cm		△1.19m	P9	P407	28cm	18cm	14cm		1.12m
P4	P381	△39cm	△11cm	—		△1.61m	P10	P385	35cm	25cm	18cm		1.09m
P5	P422	23cm	21cm	11cm		1.02m	P11	P384	33cm	23cm	20cm		1.16m
P6	P389	28cm	20cm	27cm		1.53m	P12	P400	25cm	20cm	16cm		1.15m(P1)
						平均	23.9cm	19.4cm	16.7cm				1.15m

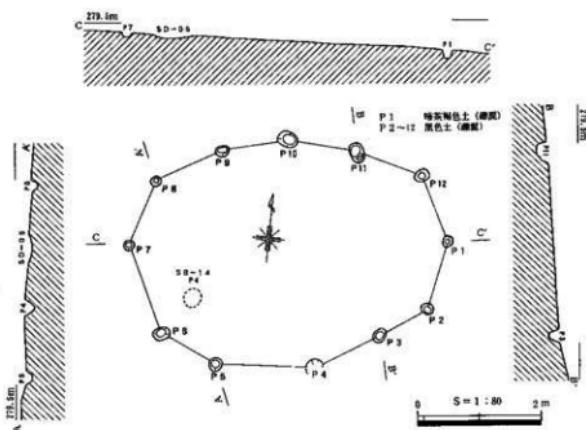


Fig. 21 SB-13 Survey Plan

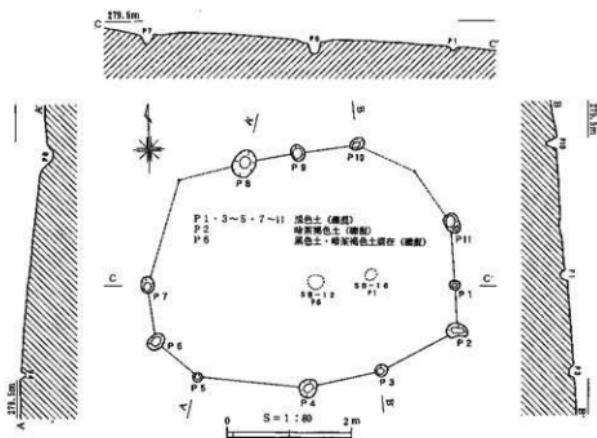
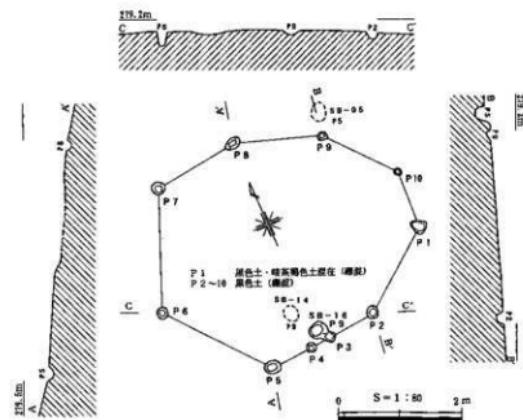


Fig. 15 SB-14 Pit Survey Table

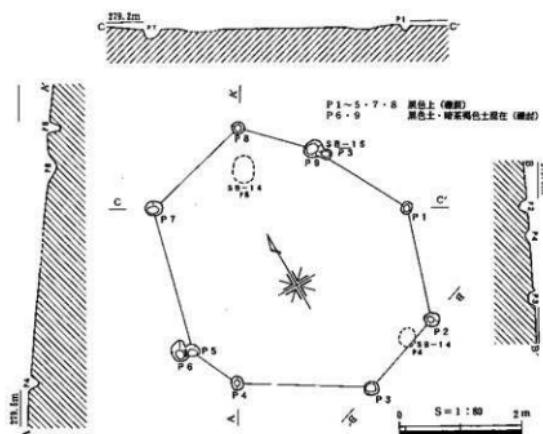
新番号	旧番号	長 軸	短 軸	深さ	遺 物	柱穴間距離	新番号	旧番号	長 軸	短 軸	深さ	遺 物	柱穴間距離
P1	P409	17cm	17cm	7cm		0.75m	P7	P433	27cm	21cm	—		—
P2	P410	36cm	23cm	9cm		1.42m	P8	P434	45cm	36cm	19cm		0.85m
P3	P419	20cm	19cm	13cm		1.20m	P9	P428	27cm	23cm	7cm		0.96m
P4	P421	32cm	28cm	15cm		1.81m	P10	P377	25cm	19cm	18cm		—
P5	P424	15cm	14cm	8cm		0.89m	P11	P384	33cm	23cm	20cm		△1.04m
P6	P431	30cm	23cm	12cm		0.92m	平	均	27.9cm	22.3cm	15.0cm		1.10m



插図23 SB-15遺構図

挿表16 SB-15ビット一覽表

新番号	旧番号	長 軸	短 軸	深 さ	速 物	柱穴距離	新番号	旧番号	長 軸	短 軸	深 さ	速 物	柱穴距離
P1	P387	25cm	21cm	21cm		1.59m	P 6	P437	20cm	17cm	25cm		2.04m
P2	P403	22cm	18cm	13cm		0.82m	P 7	P368	22cm	21cm	10cm		1.41m
P3	P404	17cm	△16cm	15cm		0.35m	P 8	P370	28cm	17cm	7cm		1.48m
P4	P406	16cm	16cm	13cm		0.71m	P 9	P365	17cm	16cm	6cm		1.38m
P5	P378	28cm	22cm	11cm		2.00m	P10	P354	12cm	12cm	10cm		0.96m (P1)
		平均				20.7cm		平均		17.8cm	13.1cm		1.27m



插図24 SB-16遺構図

插表17 SB-16ピット一覽表

新番号	旧番号	長 軸	短 軸	深 さ	遺 物	往穴間距離	新番号	旧番号	長 軸	短 軸	深 さ	遺 物	往穴間距離
P1	P408	20cm	16cm	14cm		1.84m	P6	P435	32cm	△19cm	22cm		—
P2	P420	26cm	24cm	14cm		1.49m	P7	P436	28cm	23cm	17cm		1.92m
P3	P423	23cm	23cm	11cm		2.19m	P8	P429	21cm	20cm	21cm		1.25m
P4	P432	24cm	19cm	14cm		0.88mm	P9	P405	29cm	△20cm	18cm		1.83m(P1)
P5	P434	20cm	△19cm	17cm		2.39m(P7)	平 均		24.8cm	20.8cm	16.4cm		1.72m

挿表18 平地住居一覧表

住居番号	区名	検出面	グリッド名	主軸方向	標 高	平面形	住 居 型	検出面規模 (m)	遺物	時期・備考
SB-01	I区	1面	C-4~5	N-62° -W	278.2~278.5m	方形	梁間1間型平地住居	5.8×3.3	粗製土器	縄文晩期~弥生前中期
SB-02	I区	1面	C-4	N-71° -W	278.6m	椭円形	壁立式平地住居	4.0×2.8	粗製土器	縄文晩期~弥生前中期
SB-03	I区	1面	D-4	N-71° -W	278.7~278.8m	椭円形	壁立式平地住居	4.0×2.6	黒曜石	縄文晩期~弥生前中期
SB-04	I区	1面	D-4	N-82° -W	278.7~278.8m	椭円形	壁立式平地住居	2.3×1.6	粗製土器	縄文晩期~弥生前中期
SB-05	I区	1面	C-D-4~5	N-54° -W	278.4~278.9m	椭円形	壁立式平地住居	6.0×4.9	里木2式・粗製土器・黒曜石	縄文中期後半~弥生前中期
SB-06	II区	2面	F-4	N-73° -E	278.5~278.7m	椭円形	壁立式平地住居	3.4×3.4		
SB-07	II区	2面	F-4	N-19° -E	278.5~278.7m	椭円形	壁立式平地住居	△3.0×3.5		
SB-08	II区	2面	F-3	N-88° -E	278.5~278.8m	椭円形	壁立式平地住居	3.2×2.7		
SB-09	II区	2面	F~G-3	N-11° -W	278.4~278.9m	椭円形	壁立式平地住居	4.5×3.8		
SB-10	II区	2面	F~G-3	N-72° -W	278.6~279.0m	椭円形	壁立式平地住居	5.9×3.8		
SB-11	II区	2面	F~G-3	N-55° -W	278.5~279.0m	方形	梁間1間型平地住居	8.0×4.7		
SB-12	II区	2面	G-3	N-43° -E	279.0~279.3m	椭円形	壁立式平地住居	3.0×2.7		
SB-13	II区	2面	G-3	N-83° -E	279.0~279.4m	椭円形	壁立式平地住居	5.1×3.7		
SB-14	II区	2面	G-3	N-89° -W	279.0~279.5m	椭円形	壁立式平地住居	5.0×3.8		
SB-15	II区	2面	F~G-3	N-71° -W	278.8~279.1m	椭円形	壁立式平地住居	4.4×3.5		
SB-16	II区	2面	G-3	N-61° -W	279.0~279.4m	椭円形	壁立式平地住居	4.5×3.9		

## S B-01~05 (挿図8~13 挿表1~6・18 図版2・3)

I区第1造構面検出の壁立式平地住居は5棟である。SB-01は梁間1間型平地住居で、いずれの壁柱も暗茶褐色土包含層を掘り下げ中または後に確認した。北壁の壁柱は並んだ状態で検出できたが、南壁は斜面の上側にあるためか遺存状態は悪い。主柱はP15とP16の2本とみられ、距離は3.57mである。住居の西側についても遺存状況は悪いが、主柱の状況から住居の西側は東側と同様に中央が張り出す形態になると推測できる。壁柱中の遺物としてP8から粗製土器が1点出土した。内外面ともにナデである。

SB-02~05の壁柱は、暗茶褐色土の上面または掘り下げ後に検出できたものが混在する。暗茶褐色土の掘り下げ中または掘り下げ後に検出できたものは、SB-02はP1・2・4~7、SB-03はP8・9、SB-04はP1・4・6~8・10、SB-05はP2・8で、他はいずれも暗茶褐色土の上面からの検出である。

出土した遺物は、SB-02のP8から粗製土器が2点と黒曜石片1点、P9から粗製土器1点が出土した。粗製土器はこれ以外も含め、いずれも内外面とともにケズリ状のナデまたはナデである。SB-04のP6出土の粗製土器は、内面には炭化物が付着していた。時期の明らかなものは、SB-05のP1からPo1が出土した。外側は1段Lの捺糸文を施し、内面は横方向のナデである。里木2式の土器と考えられる。またP7からは黒曜石、P9からは粗製土器3点が出土した。外側に煤が付着するものや、穿孔を試みた痕のあるものがみられた。

## S B-06~16 (挿図14~24 挿表7~18 図版2)

II区第2造構面検出の壁立式平地住居は11棟である。SB-11は梁間1間型平地住居で、南北壁のピットは並んだ状態で検出できた。主柱はP21であるが、対応するとみられるもう1基の主柱は確認することができなかった。遺物は出土していない。

SB-06~10・12~16についていはいずれの壁柱からも遺物は出土していないが、壁面で立ち上がりの確認できるSB-13のP4について、埋土中に比較的多くの炭化物が含まれていたため炭素14年代測定を実施した。結果については考察に「上菅荒神原遺跡における放射性炭素年代測定」として掲載しているが、6780±70BPという結果が得られた。暦年代に換算するとBC5620年で、縄文時代早期後半となる。同時期に当たる遺物は出土していない。

これらの結果から、SB-01~05の住居は出土遺物から判断すると縄文時代中期後半~縄文時代晩期~弥生時代前期頃となるが、SB-01のように全ての柱穴が暗茶褐色土掘り下げ後に検出された比較的古い様相をもつものみられる。SB-06~16は年代測定を積極的に解釈すると縄文時代早期後半で、層位的にもよいが、遺構内からの遺物の出土はなく上限を押さえるのに留まる。

## SH-01~75 (挿図25~31 挿表19・20 図版3)

調査区の第1遺構面で75棟の住居跡を復元した。主軸方向を検討すると、I区では緩斜面に対し主軸が等高線に直交するもの、斜行するもの、平行するものがそれぞれみられたが、II区の比較的傾斜の強い付近では等高線に対し直交するものが目立つように思われる。

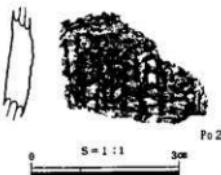
構造としては、基本的に2本一組の主柱をもつが、主柱の間にピットまたは土坑をもつものが2棟みられた。SH-11はI区第1遺構面、D-5グリッド北西部にあり、SB-05の東に位置する。SK-20を跨ぐよう主柱があり、SK-20の東隣にはピットがあり、まとまりのある配置をしている。SH-59はII区第1遺構面、F-2グリッドほぼ中央にあり、南にはSH-58、北にはSH-60がある。主柱の中間にP3があり、住居内のピットとみられる。しかしいずれの遺構からも焼土・炭化物を含め遺物は確認できなかった。

遺物は計13基のピットから黒曜石・粗製土器・弥生土器・縄文土器が出土した。

黒曜石はSH-12のP1とSH-13のP1から出土した。粗製土器は、SH-20のP1、SH-23のP1、SH-25のP1、SH-28のP1、SH-30のP1、SH-33のP1、SH-35のP2、SH-39のP2、SH-43のP1、SH-45のP1から各1点が出土した。外面ともにナデ、粗いナデ、ケズリ状のナデ調整である。

弥生土器は、SH-23のP1から器壁が薄く外面が赤彩された弥生時代中期の上器1点が出土した。ただし検出面よりも浮いた状態で出土しており、上層の黒色土包含層のものである可能性が高い。SH-35のP2からは弥生土器が3点出土した。内1点は2mm間隔で4点以上の櫛状工具の刺突が並ぶ。縄文土器はSH-45のP2からPo2が出土した。2段RL縄文の船元式で縄文時代中期後半頃である。

これらの遺物の時期は黒曜石については不明瞭ではあるが、概ね縄文時代中期後半～弥生時代中期におよぶ。粗製土器が大半であるが、焼きは比較的よく突尖文土器の体部と考えることも可能であろう。したがって縄文時代中



挿図25 SH-45 P2土器実測図

挿表19 SH-45 P2土器観察表

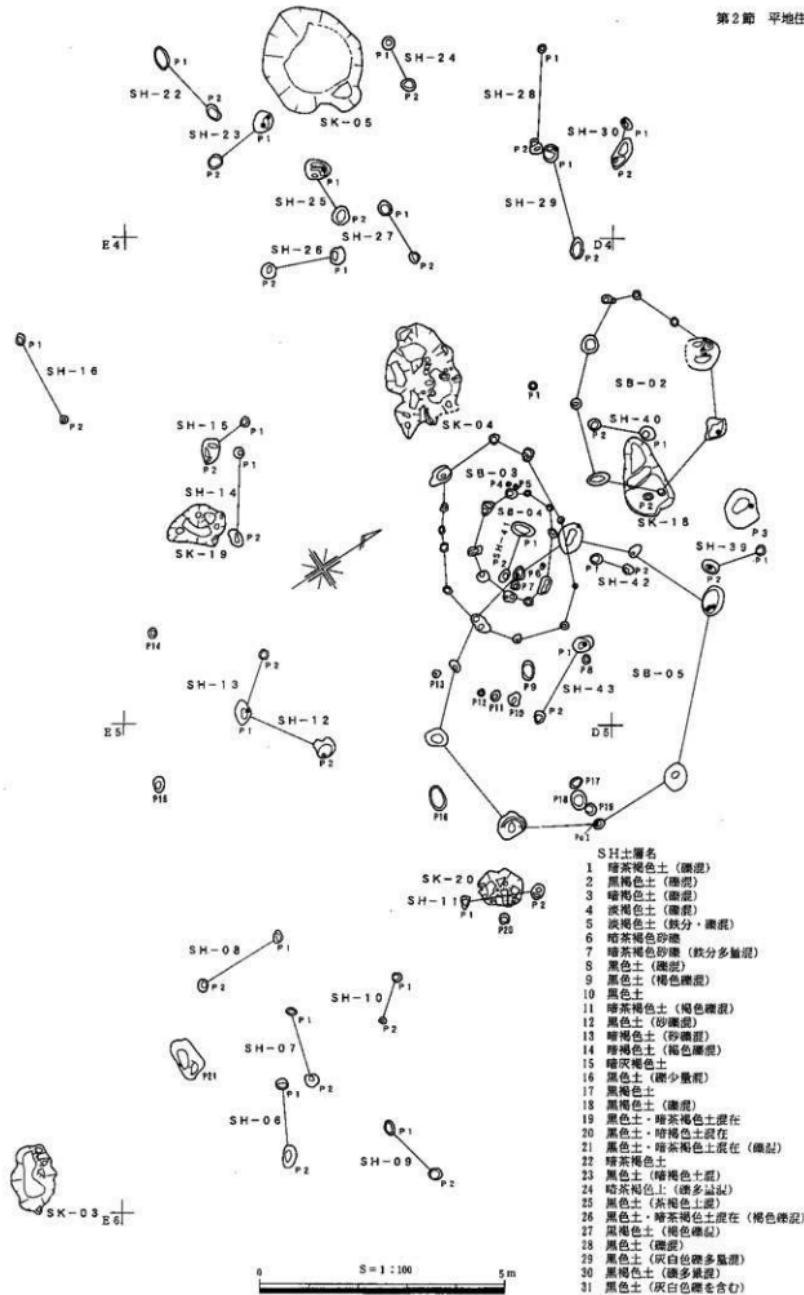
遺物番号 発見場所 図版番号	遺構名	種類	法量 (cm)	形態上の特徴 外観 調査	内面調査	内面色調	外面色調	放上・焼成	底上No.	備考	実測者No.
Po. 2 25 3	SH-45 縄文中期 深鉢	P2	△ 2.2	2段RLの縄文が底面に重なる。 隔壁は5mm程度で薄い。	横方向のナゲ。	にぼい黄褐色 10YR6/3	にぼい褐色 7.5YR5/4	青(1~2mm の石英を含む)・白	1613	船元式 旧番号 P159	清水-187

挿表20 主柱2本型伏屋式平地住居一覧表

SH 番号	新 番号	旧 番号	グリッド名 主軸方向	長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)	上層	遺 物	柱穴距 離	SII-10	新 番号	舊 番号	日 付	グリッド名 主軸方向	長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)	上層	遺 物	柱穴距 離
SH-01	1	55	E-5-3	23	17	13	1		1.48	SII-10	1	89	D-5-4	21	18	17	12			0.95
	2	54	N-71°-W	23	22	9	1				2	88	N-47°-W	13	13	16	10			1.52
SH-02	1	57	E-5-2	29	22	12	2		1.13	SH-11	1	91	D-5-1	28	19	9	12			
	2	56	N-70°-E	44	22	9	1		1.15		2	177	N-17°-K	32	25	10	11			
	3	284		21	△19	12	1				1	96	D-5-2	51	35	18	13	黒曜石		1.83
SH-03	1	64	E-5-1	15	15	14	1		1.4	SII-13	2	98	N-50°-R	43	43	18	14			
	2	63	N-53°-W	21	20	9	1				1	96	D-4-3	51	35	18	13	黒曜石		1.27
SH-04	1	62	E-5-4	28	18	36	3		1.05	SII-14	2	97	N-47°-W	19	19	6	13			
	2	61	N-71°-E	25	22	12	4				1	127	D-4-3	22	20	10	8			1.77
SH-05	1	60	E-5-4	35	30	17	5		1.05	SII-15	2	126	N-63°-W	39	25	21	9			
	2	59	N-61°-E	32	25	9	5				1	128	D-4-2	19	17	7	8			0.79
SH-06	1	85	D-5-3	26	23	14	6		1.45	SII-16	2	70	N-11°-W	54	37	26	8			
	2	84	N-69°-W	45	29	14	7				1	72	E-4-1	25	18	31	16			1.88
SII-07	1	87	D-5-3	23	16	10	8		1.44	SII-17	2	71	N-87°-E	18	17	8	16			
	2	175	N-80°-W	31	27	16	9				1	74	E-3-1	42	33	15	8			1.78
SII-08	1	90	D-5-2	26	19	11	10		1.82	SII-18	2	75	N-67°-E	31	28	13	2			
	2	66	N-7°-W	26	20	13	11				1	83	D-3-2	31	30	17	17			0.96
SH-09	1	86	D-5-4	30	22	8	9		1.32		2	82	N-3°-W	47	39	17	17			
	2	174	N-70°-E	27	24	17	9													

期後半以降で、突帯文土器の時期が中心であると考えられる。造構の時期については不明確ではあるが、上層の黒色土包含層の遺物の割合では突帯文土器が最も多い。弥生時代中期の遺物も出土したが、住居の構造を考えると弥生時代中期は竪穴住居が中心と考えられるため、ここでは縄文時代晩期～弥生時代前期の突帯文土器の時期を中心に考えておきたい。

SH 番号	番号	旧 番号	グリッド名 主軸方向	長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)	土層	遺 物	柱穴間 距離(cm)	S.H 番号	新 番号	旧 番号	グリッド名 主軸方向	長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)	土層	遺 物	柱穴間 距離(cm)
SH-19	1	140	D-3-2	63	58	13	17		1.04	SH-48	1	257	B-5-3	22	△15	11	9		1.41
	2	141	N-78°-E	30	28	49	18				2	255	N-25°-E	29	28	8	8		
SH-20	1	139	D-3-2	47	38	11	20	粗製土器	2.04	SH-49	1	257	B-5-3	25	△21	13	8		1.22
	2	81	N-39°-W	52	44	12	19				2	254	N-3°-E	30	30	12	28		
SH-21	1	77	E-3-1	39	31	7	2		0.43	SH-50	1	256	B-5-3	24	22	12	9		1.01
	2	76	N-84°-W	39	21	13	2				2	253	N-8°-W	33	24	9	28		
SH-22	1	78	D-3-3	47	28	8	20		1.53	SH-51	1	262	B-5-3	27	21	16	22		1.55
	2	80	N-73°-E	37	25	9	20				2	265	N-56°-W	34	30	12	9		
SH-23	1	136	D-3-3	46	39	17	10	粗製土器	1.32	SH-52	1	266	B-5-3	50	30	22	9		1.40
	2	79	N-13°-W	30	30	6	20				2	264	N-43°-W	38	25	15	9		
SH-24	1	138	D-3-4	27	27	15	21		0.95	SH-53	1	263	B-5-4	31	30	19	9		0.60
	2	137	N-89°-E	30	26	8	20				2	262	N-75°-W	26	22	14	9		
SH-25	1	136	D-3-3	52	42	17	20	粗製土器	1.00	SH-54	1	33	G-2-2	31	25	12	29		1.06
	2	133	N-83°-E	40	35	12	6				2	34	N-4°-W	26	25	29	29		
SH-26	1	130	D-4-2	35	29	12	16		1.37	SH-55	1	32	G-2-1	40	28	15	29		1.09
	2	129	N-14°-E	32	29	14	21				2	31	N-43°-W	25	22	16	29		
SH-27	1	134	D-3-4	31	27	10	10		1.17	SH-56	1	30	G-2-1	31	31	20	29		1.25
	2	131	N-84°-E	24	20	7	18				2	29	N-9°-W	28	24	17	29		
SH-28	1	204	D-3-4	17	15	20	22		2.02	SH-57	1	28	G-2-4	27	27	33	29		1.34
	2	203	N-61°-W	31	24	14	22				2	27	N-94°-W	31	27	13	29		
SH-29	1	173	D-3-4	35	31	9	23	粗製土器	2.14	SH-58	1	25	F-2-3	26	22	13	29		1.36
	2	188	N-79°-W	43	25	8	24				2	26	N-22°-W	30	25	13	29		
SH-30	1	248	C-3-3	25	19	5	22	粗製土器	0.76	SH-59	1	24	F-2-3	27	23	17	29		1.28
	2	247	N-51°-W	69	30	14	22				2	22	N-67°-E	33	32	15	29		—
SH-31	1	250	C-3-2	19	18	7	22		0.72	SH-60	1	23	F-2-2	32	26	14	29		1.24
	2	249	N-63°-E	34	26	5	22				2	21	N-52°-E	31	30	16	29		
SH-32	1	168	B-1-3	41	29	18	25		1.29	SH-61	1	14	F-3-1	45	37	12	30		1.84
	2	167	N-80°-E	32	29	11	25				2	13	N-56°-W	30	18	13	30		
SH-33	1	279	B-2-3	31	27	5	26	粗製土器	1.54	SH-62	1	47	F-3-1	45	42	12	30		1.70
	2	278	N-38°-W	50	42	12	26				2	12	N-50°-W	43	31	26	30		
SH-34	1	275	B-4-2	23	15	11	22		1.04	SH-63	1	48	F-3-3	24	22	10	30		2.24
	2	164	N-28°-E	22	21	17	9				2	11	N-9°-E	29	24	17	30		
SH-35	1	281	B-4-4	26	22	8	19		0.81	SH-64	1	10	F-3-3	33	30	21	30		1.20
	2	280	N-61°-W	49	40	31	19	粗製土器			2	19	N-60°-E	29	26	13	30		
SH-36	1	274	B-4-3	18	13	7	22		1.54	SH-65	1	49	F-3-3	27	24	22	30		1.34
	2	273	N-84°-E	15	11	6	22				2	9	N-41°-E	35	33	27	30		
SH-37	1	163	B-4-3	29	21	18	9		1.65	SH-66	1	8	F-3-3	29	20	22	30		1.46
	2	269	N-82°-W	27	16	18	10				2	18	N-79°-E	25	22	15	30		
SH-38	1	237	C-4-3	19	17	19	19		1.63	SH-67	1	50	F-3-3	37	29	13	30		0.94
	2	235	N-43°-E	20	17	8	22				2	7	N-71°-E	35	27	13	30		
SH-39	1	234	C-4-3	21	19	15	22		1.06	SH-68	1	41	G-3-4	33	32	10	31		1.70
	2	231	N-5°-E	37	28	11	9	粗製土器			2	39	N-48°-E	27	19	29	31		
SH-40	1	244	C-4-2	34	29	27	8		1.06	SH-69	1	45	G-3-4	27	23	36	31		1.79
	2	198	N-36°-E	26	25	33	8				2	40	N-14°-E	38	32	10	31		
SH-41	1	189	D-4-4	48	26	10	48		1.03	SH-70	1	38	G-3-4	35	27	22	31		1.39
	2	111	N-45°-W	29	17	26	8				2	37	N-70°-W	28	27	9	31		
SH-42	1	117	C-4-3	24	21	29	2		0.68	SH-71	1	17	F-4-2	29	24	10	30		1.51
	2	232	N-47°-E	21	18	28	11				2	16	N-67°-W	34	28	16	30		
SH-43	1	108	D-4-4	43	33	26	27	粗製土器	1.73	SH-72	1	1	F-4-2	28	22	12	30		1.10
	2	181	N-35°-W	28	22	15	9				2	2	N-49°-E	24	20	13	30		
SH-44	1	206	C-5-3	31	29	8	22		1.76	SH-73	1	6	F-4-2	28	24	20	30		1.57
	2	205	N-76°-W	27	25	14	20				2	4	N-25°-E	28	27	14	30		
SH-45	1	160	C-6-1	60	40	21	9	粗製土器	1.52	SH-74	1	3	F-4-2	25	24	9	30		1.63
	2	159	N-4°-E	49	30	23	9	突帯文			2	20	N-89°-W	20	17	10	30		
SH-46	1	259	C-5-4	16	14	7	9		1.86	SH-75	1	5	F-4-2	30	26	11	30		1.19
	2	258	N-81°-W	15	12	5	10				2	15	N-20°-W	25	24	9	30		
SH-47	1	214	C-5-1	34	21	15	10		1.72										
	2	260	N-81°-W	20	17	14	10												



挿図26 I区第1造構面全体図(1)

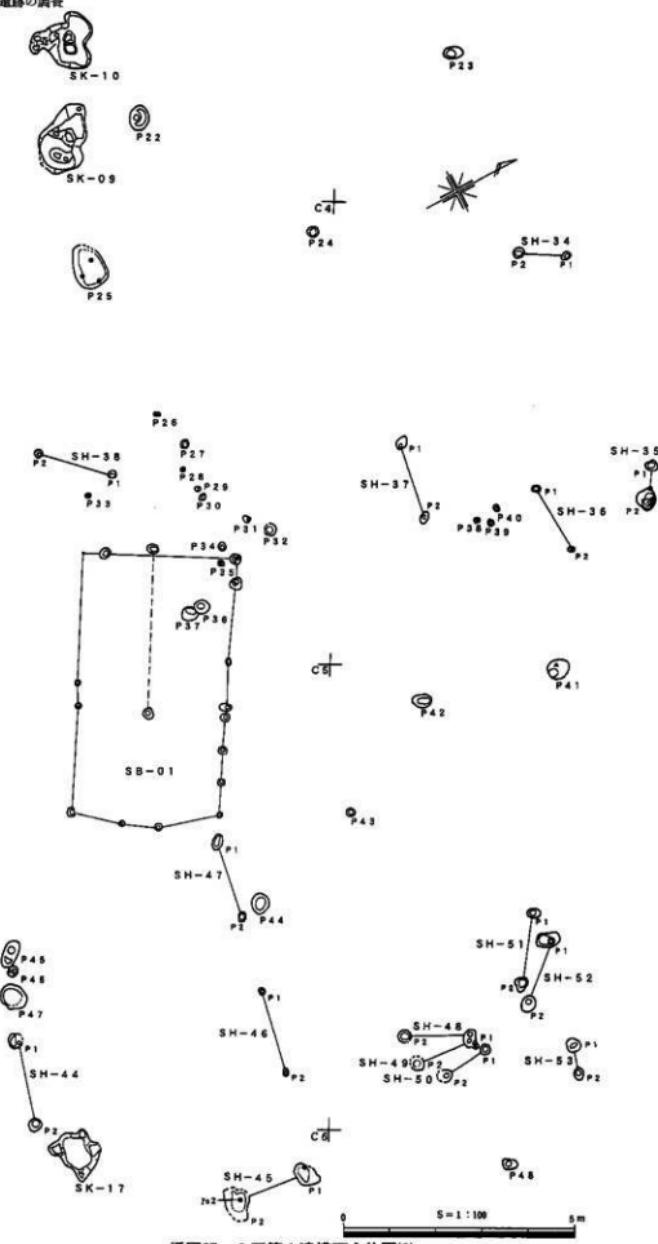


図27 I区第1遺構面全体図(2)

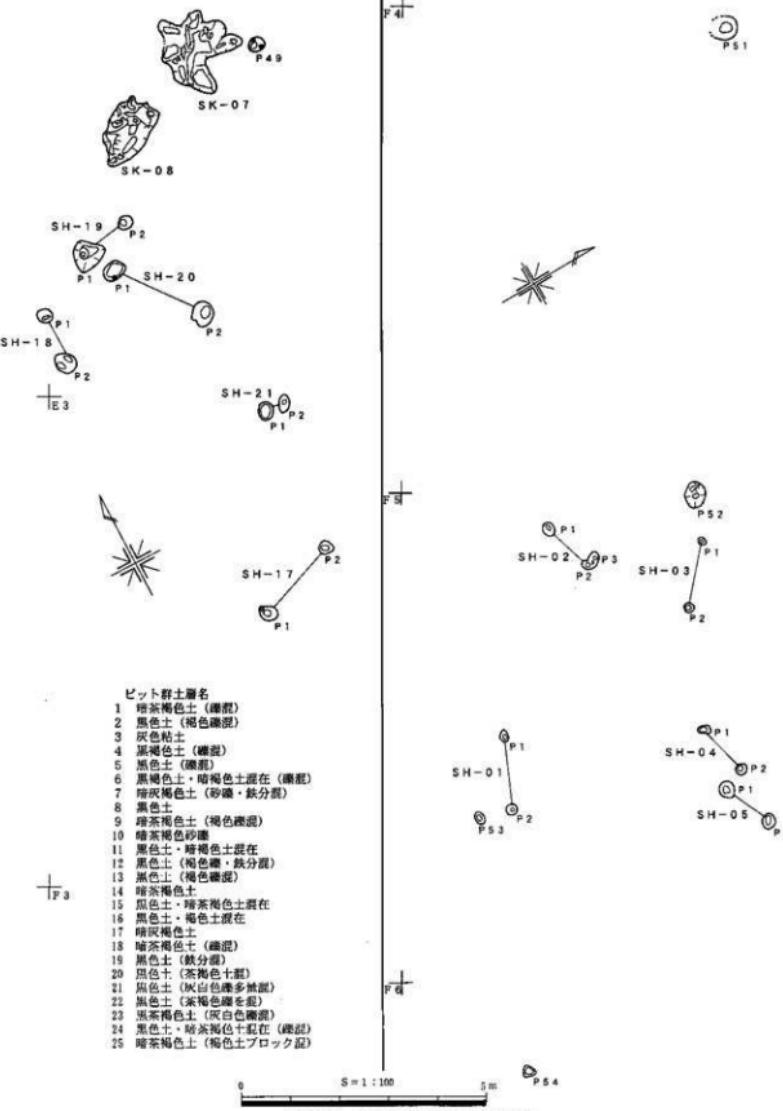
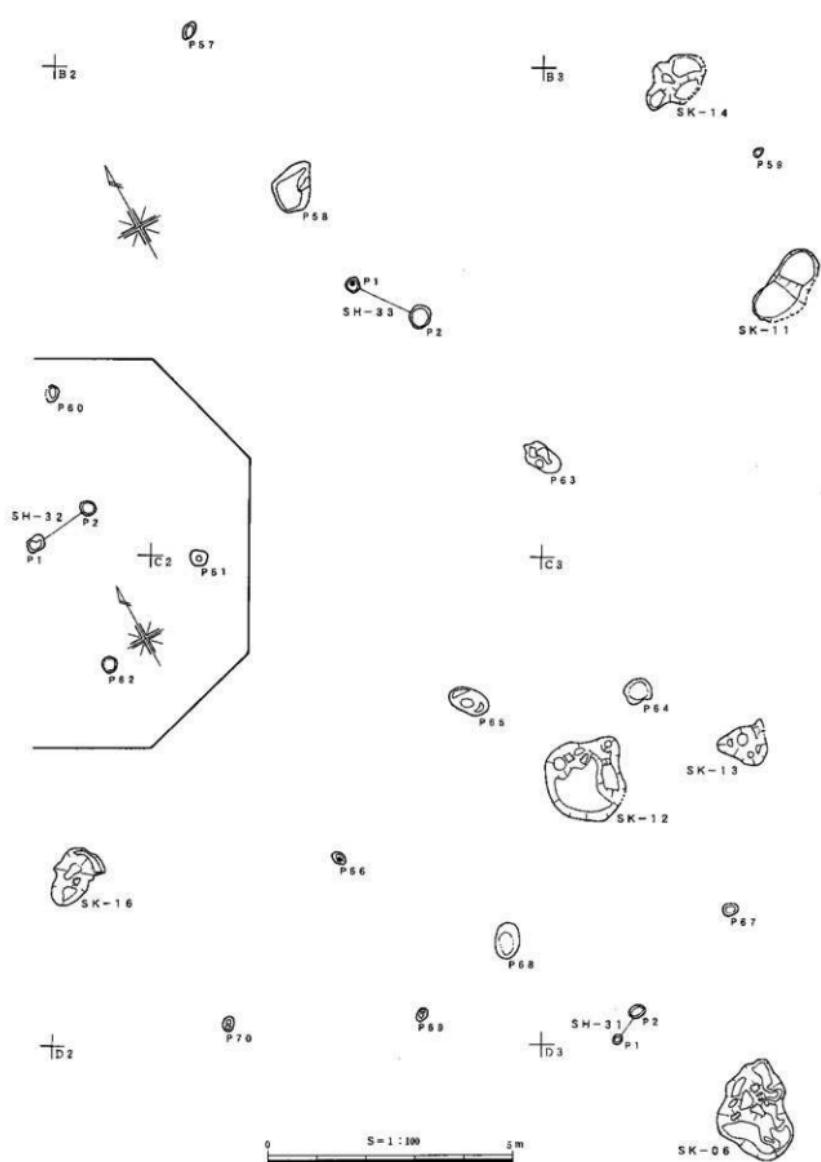


図28 1区第1造構面全体図(3)



第3章 上青垣神原遺跡の調査



插図29 I区第1遺構面全体図(4)

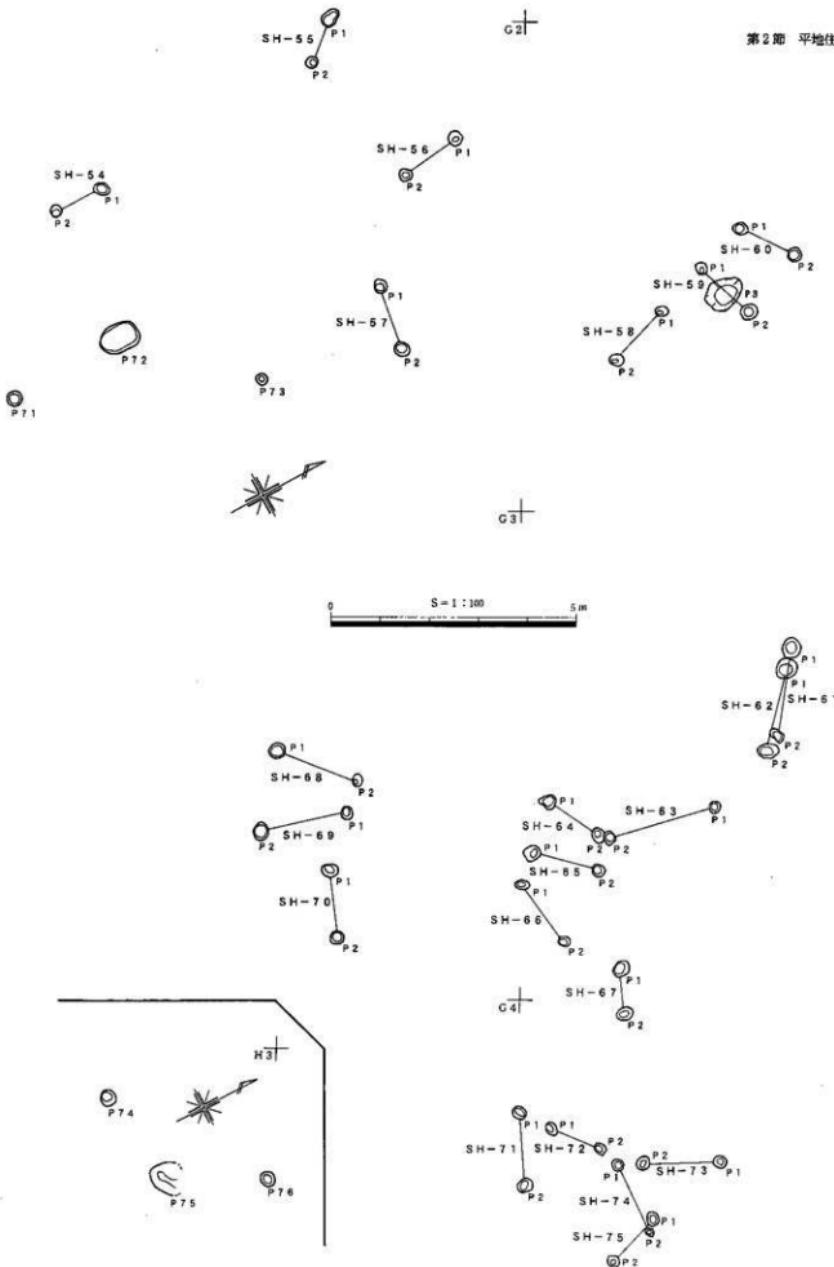
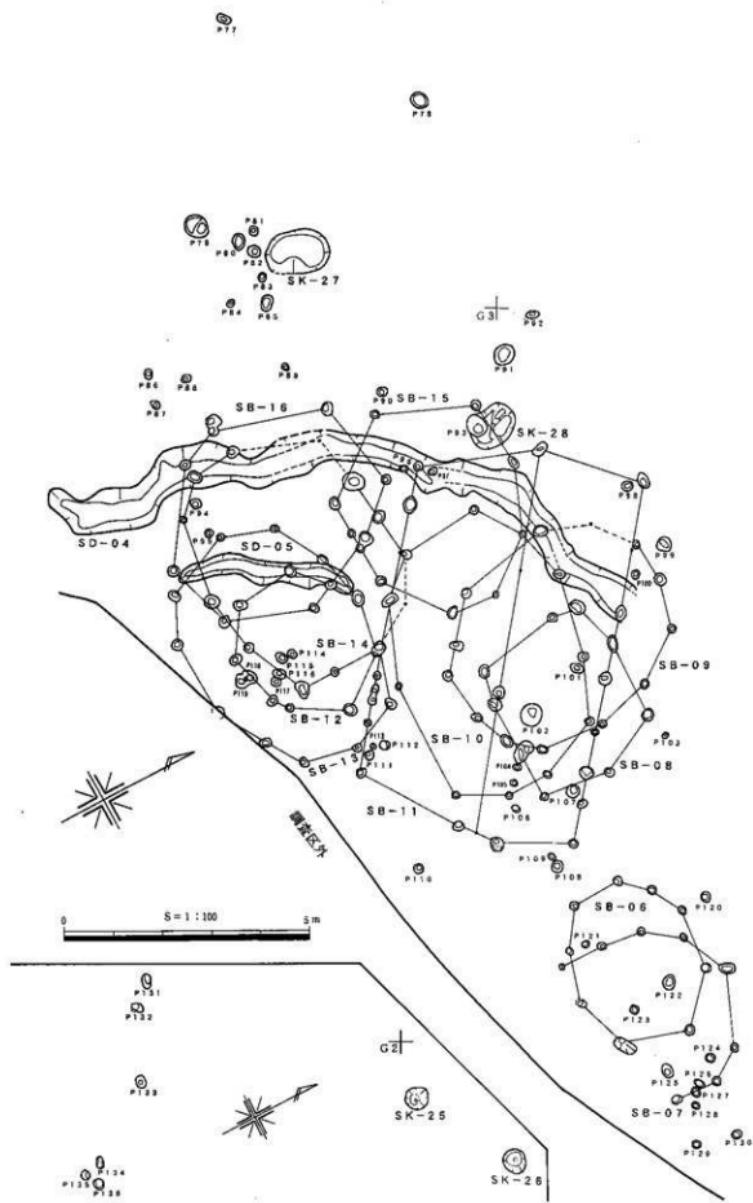


図30 II区第1遺構面全体図



挿図31 II区第2造構面全体図

插表21 ピット群一覧表

新番号	旧番号	区名	グリッド名	長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)	土層	遺物	新番号	旧番号	区名	グリッド名	長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)	土層	遺物
1	200	I区	D-4-1	17	17	23	1		69	156	I区	C-2-3	30	20	11	2	
2	147	I区	C-4-3	20	16	12	2		70	157	I区	C-2-2	29	25	12	2	
3	145	I区	C-4-3	79	64	22	2	粗製土器	71	35	I区	G-2-3	26	25	12	21	
4	194	I区	D-4-4	10	9	9	3		72	36	I区	G-2-3	85	58	18	21	
5	193	I区	D-4-4	11	10	9	3		73	46	I区	G-2-3	25	24	14	21	
6	115	I区	D-4-4	12	9	17	4		74	43	I区	H-3-1	35	32	13	21	
7	113	I区	D-4-4	20	19	22	5		75	51	I区	H-3-1	67	△45	27	22	
8	183	I区	D-4-4	19	17	18	1		76	42	I区	H-3-1	32	31	14	23	
9	182	I区	D-4-4	40	25	22	1		77	451	I区	G-2-1	31	19	16	1	
10	104	I区	D-4-4	29	△16	16	6		78	450	I区	G-2-3	34	32	12	1	
11	103	I区	D-4-4	24	17	12	7		79	449	I区	G-2-3	50	46	16	1	
12	102	I区	D-4-4	13	12	9	8		80	448	I区	G-2-4	35	26	15	24	
13	100	I区	D-4-4	18	16	15	9		81	447	I区	G-2-4	20	18	12	24	
14	66	I区	D-4-3	23	18	12	2		82	446	I区	G-2-4	28	24	13	24	
15	67	I区	D-5-2	31	25	10	10		83	445	I区	G-2-4	19	17	8	24	
16	93	I区	D-5-1	50	32	13	10		84	444	I区	G-2-3	16	15	7	24	
17	95	I区	D-5-1	28	22	12	4		85	443	I区	G-2-4	34	25	10	24	
18	180	I区	D-5-1	46	33	11	8		86	442	I区	G-3-2	21	16	7	24	
19	179	I区	D-5-1	24	23	15	8		87	441	I区	G-3-2	20	17	9	24	
20	92	I区	D-5-1	21	21	11	11		88	440	I区	G-3-2	20	17	15	24	
21	65	I区	D-5-3	82	49	25	12	铁滓	89	439	I区	G-3-1	18	15	12	25	
22	151	I区	C-3-4	52	42	15	2		90	438	I区	G-3-1	23	19	10	24	
23	277	I区	B-3-3	42	25	14	13		91	367	I区	F-3-2	48	39	20	24	
24	276	I区	C-4-1	25	22	21	14		92	366	I区	F-3-2	27	16	8	24	
25	150	I区	C-4-2	96	67	19	2	粗製土器	93	369	I区	G-3-1	43	36	24	24	
26	242	I区	C-4-1	13	8	12	1		94	426	I区	G-3-2	23	21	7	24	
27	241	I区	C-4-4	20	15	18	1		95	425	I区	G-3-2	19	18	9	24	
28	240	I区	C-4-4	9	7	15	15		96	373	I区	G-3-1	21	18	16	24	
29	239	I区	C-4-4	12	11	22	1		97	371	I区	G-3-1	21	15	11	24	
30	238	I区	C-4-4	17	12	10	8		98	360	I区	F-3-2	24	22	28	13	
31	268	I区	C-4-4	18	12	20	13	粗製土器	99	363	I区	F-3-2	33	30	23	24	
32	152	I区	C-4-4	29	27	22	2		100	346	I区	F-3-3	18	17	10	13	
33	236	I区	C-4-3	11	10	14	1		101	339	I区	F-3-3	27	18	5	24	
34	227	I区	C-4-4	15	16	21	13		102	350	I区	F-3-3	48	42	28	24	
35	226	I区	C-4-4	15	12	8	13	粗製土器	103	375	I区	F-3-3	15	11	17	8	
36	146	I区	C-4-4	33	32	5	2		104	324	I区	F-3-3	19	14	11	24	
37	223	I区	C-4-4	32	30	46	13		105	325	I区	F-3-3	15	14	11	24	
38	270	I区	B-4-3	12	12	6	14		106	320	I区	F-4-2	17	14	14	24	
39	271	I区	B-4-3	15	12	9	14		107	329	I区	F-3-3	29	25	7	24	
40	272	I区	B-4-3	15	12	4	14		108	317	I区	F-4-2	26	24	12	24	
41	283	I区	B-5-2	50	43	47	16	黑曜石	109	316	I区	F-4-2	18	14	10	24	
42	267	I区	B-5-2	43	28	14	9		110	313	I区	G-4-1	20	20	18	24	
43	261	I区	B-5-2	18	17	14	8		111	394	I区	G-3-4	21	15	15	1	
44	161	I区	C-5-4	42	37	17	2	粗製土器 黒曜石	112	385	I区	G-3-4	24	19	5	1	
45	209	I区	C-5-3	61	31	25	14		113	395	I区	G-3-4	12	12	10	24	
46	208	I区	C-5-3	23	22	11	14		114	411	I区	G-3-4	20	17	6	24	
47	207	I区	C-5-3	59	50	13	14		115	412	I区	G-3-4	26	20	9	24	
48	252	I区	B-6-2	32	23	19	9		116	413	I区	G-3-4	26	18	10	24	
49	142	I区	D-3-1	35	30	23	17	粗製土器	117	414	I区	G-3-4	21	19	7	24	
50	58	I区	E-3-3	23	23	5	4		118	389	I区	G-3-3	31	△19	24	24	
51	73	I区	E-4-1	△42	51	29	5		119	417	I区	G-3-3	30	△27	12	24	
52	68	I区	E-5-1	53	43	32	18		120	312	I区	F-4-2	22	19	8	26	
53	53	I区	E-5-3	26	19	8	18		121	296	I区	F-4-2	14	13	10	1	
54	52	I区	E-6-2	25	22	10	19		122	298	I区	F-4-2	33	24	12	15	
55	172	I区	A-1-3	30	27	7	2		123	297	I区	F-4-2	18	17	21	24	
56	171	I区	A-1-3	79	49	17	2		124	293	I区	F-4-3	18	9	1	14	
57	230	I区	A-2-2	37	25	16	16		125	308	I区	F-4-3	32	22	12	24	
58	170	I区	B-2-1	110	82	37	2		126	290	I区	F-4-3	22	14	8	24	
59	176	I区	B-2-1	23	17	18	14		127	289	I区	F-4-3	21	17	10	24	
60	169	I区	B-1-3	33	25	18	20		128	288	I区	F-4-3	15	13	7	24	
61	166	I区	C-2-1	37	33	19	2		129	285	I区	F-4-3	17	15	19	1	
62	158	I区	C-1-4	34	30	12	2		130	286	I区	F-4-3	20	17	11	14	
63	155	I区	B-3-2	85	50	22	2		131	457	I区	G-1-3	28	17	26	1	
64	153	I区	C-3-1	57	47	15	2		132	456	I区	G-1-3	25	17	25	1	
65	155	I区	C-2-4	85	50	24	2		133	455	I区	G-2-2	26	22	12	1	
66	251	I区	C-2-3	30	22	22	13	粗製土器	134	453	I区	G-2-2	23	17	15	14	
67	152	I区	C-3-2	33	27	8	2		135	454	I区	G-2-2	20	18	11	14	
68	154	I区	C-2-3	72	50	7	2		136	452	I区	G-2-2	21	23	13	14	

### 第3節 ピット群

I 区の第1遺構面で70基、II区の第1遺構面で6基、第2遺構面で60基、計136基のピットを確認した。このピット群は、壁立式平地住居・梁間1間型平地住居・主柱2本型伏屋式平地住居の柱穴としたピットを除いたもので、仮に全てを単なるピットとしてとらえると、I区第1遺構面では233基、II区第1遺構面で51基、第2遺構面では173基の総数で457基となる。第1遺構面ではI区中央付近に集中し、II区では南東隅を除き全体に散在するが、I～II区の間とI区の南西部では極端に分布密度は希薄になる。第2遺構面ではII区の北東側にピットが集中する傾向にある。

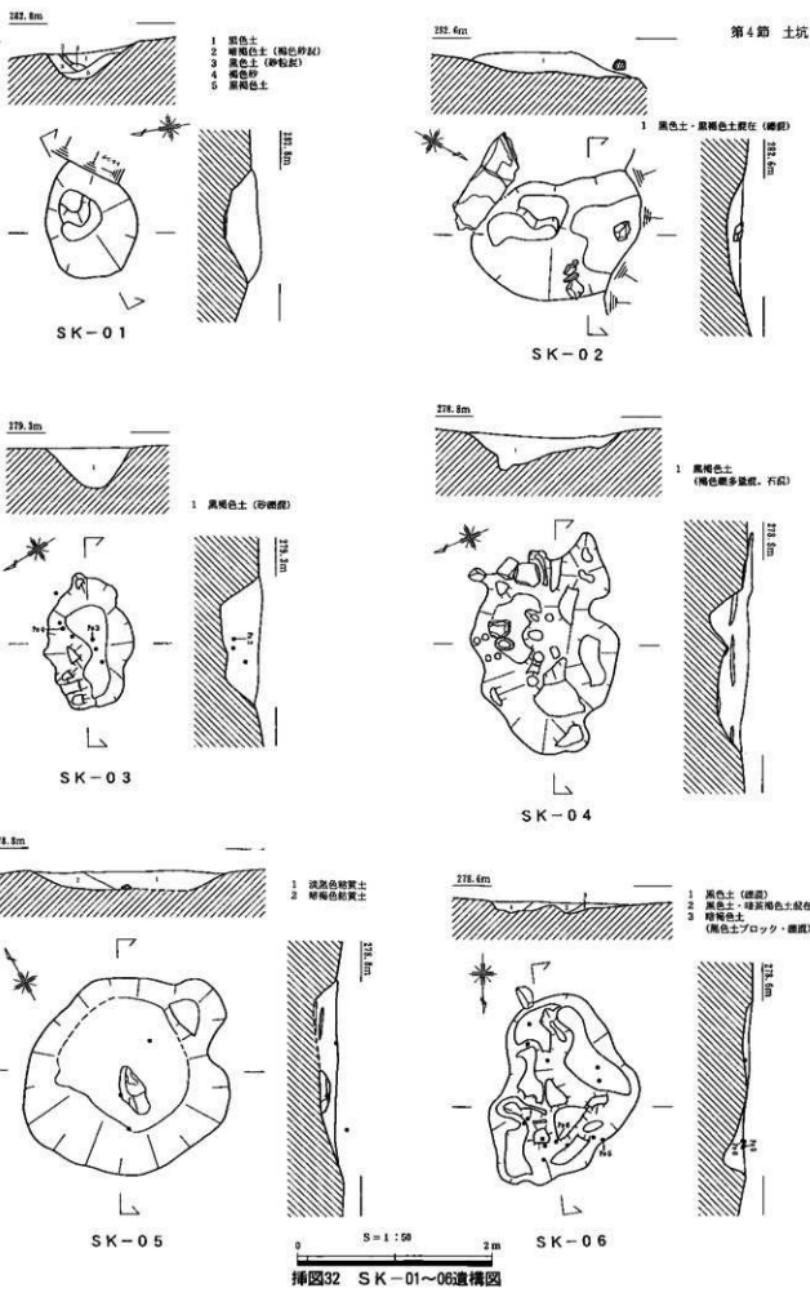
遺物は計9基のピットから粗製土器、鉄滓、黒曜石が出土した。粗製土器は、P3から1点、P25から3点、P31から1点、P35から1点、P44から1点、P49から2点、P66から1点出土した。内外面ともにナデ、粗いナデ、ケズリ状のナデを施す。外面に煤痕が顕著にみられるものもあった。P21からは鉄滓1点が立ち上がりの際で出土した。付近は耕作土除去後に第1・第2遺構面が同一面で確認されており、黒色土包含層からは近世の陶磁器片も出土していることから、P21は近世のものと考えられる。黒曜石剥片は、P41・P44から各1点出土した。

遺物の時期は縄文時代晚期～弥生時代前期を中心としている。黒曜石剥片が出土しているが時期は不明である。遺構の時期についても、遺物からみる限り住居跡と同時期のものと考えられる。これらのピットには建物の一部でありながら復元できなかったものや、他の目的をもっていたものが含まれると推測する。

### 第4節 土坑

挿表22 土坑・落し穴一覧表

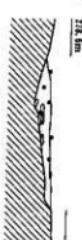
土坑番号	区名	検出面	グリッド名	標高(m)	形態	長軸×短軸×深さ(cm)	出土遺物	時期・備考
SK-01	II区	1面	H-3-2	282.5～282.6	不整な円形	134×96～38		
SK-02	II区	1面	I-3-1	282.2～282.4	不整な楕円形	△171×120～28		
SK-03	I区	1面	E-5-4	279.1	不整な楕円形	140×95～45	Po3黒木2式・Po4馬鹿式併行、黒木2式5点	縄文中期後半
SK-04	I区	1面	D-4-1	278.6	不整な円形	212×143～48		
SK-05	I区	1面	D-3-3	278.5～278.6	不整な円形	242×197～24	粗製土器3点	縄文晚期～弥生前期
SK-06	I区	1面	D-3-1	278.4～278.5	不整な楕円形	205×129～31	Po5鍾錐土器、Po6突帯文深鉢、粗製土器19点	縄文晚期～弥生前期
SK-07	I区	1面	D-3-1	278.4～278.5	不整な形態	163×152～21	弥生前中期、粗製土器19点	弥生前中期
SK-08	I区	1面	D-3-1	278.4	不整な楕円形	147×85～28	粗製土器5点、S1磨製石斧、S2石鏟	縄文晚期～弥生前中期
SK-09	I区	1面	C-3-3	278.2～278.3	不整な楕円形	155×106～28	Po7弥生前中期、粗製土器10点	弥生前中期
SK-10	I区	1面	C-3-3	278.2～278.3	不整な形態	123×118～14	Po8鉈部、突帯文深鉢、粗製土器3点	縄文晚期～弥生前中期
SK-11	I区	1面	B-3-4	278.3	不整な楕円形	170×87～39	Po9繩維土器、繩維土器	縄文晚期か
SK-12	I区	1面	C-3-1	278.0～278.1	不整な円形	177×154～34	突帯文深鉢、粗製土器5点	弥生前中期
SK-13	I区	1面	C-3-1	277.9～278.2	不整な円形	101×85～37	粗製土器、弥生前中期	弥生前中期
SK-14	I区	1面	B-3-1	279.1～279.2	不整な楕円形	140×99～27		
SK-15	I区	1面	D-4-1	278.1～278.2	不整な円形	253×223～43	粗製土器4点、弥生中期縄目縫部、弥生中期13点	弥生中期
SK-16	I区	1面	C-2-2	277.7～277.8	不整な楕円形	125×67～49	Po10突帯文深鉢、粗製土器3点	縄文晚期～弥生前中期
SK-17	I区	1面	C-6-2	278.9～279.0	不整な方形	95×72～39		
SK-18	I区	1面	C-4-2	278.6	不整な楕円形	162×95～13	粗製土器3点	縄文晚期～弥生前中期
SK-19	I区	1面	D-4-3	278.8	不整な楕円形	134×89～20		
SK-20	I区	1面	D-5-1	278.8～278.9	不整な円形	93×73～31		
SK-21	I区	2面	D-3-1	277.8	円形	130×120～102		落し穴
SK-22	I区	2面	E-2-2	277.9	円形状	100×94～90		落し穴
SK-23	I区	2面	E-2-4	278.1	楕円形	114×97～49		落し穴
SK-24	I区	2面	E-5-2	279.4～279.5	不整な楕円形	136×78～18		
SK-25	II区	2面	F-2-2	278.6	円形状	98×91～62		落し穴
SK-26	II区	2面	F-2-2	278.4	円形状	106×92～108		落し穴
SK-27	II区	2面	G-2-4	279.2～279.3	不整な楕円形	129×91～19		
SK-28	II区	2面	G-3-1	278.7～278.8	不整な楕円形	101×75～16		



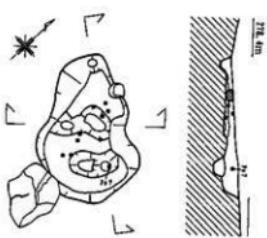
第3章 上晉荒神原遺跡の調査



SK-07



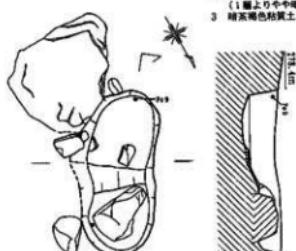
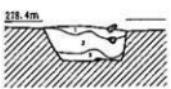
SK-08



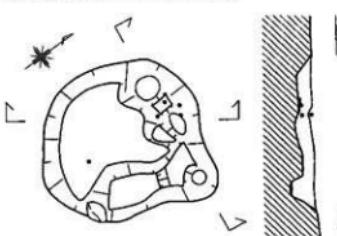
SK-09



SK-10



SK-11



SK-12

挿図33 SK-07~12遺構図

第4節 土坑

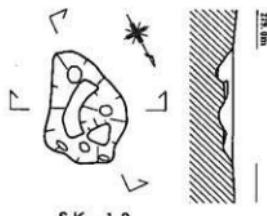
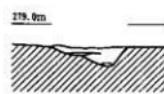
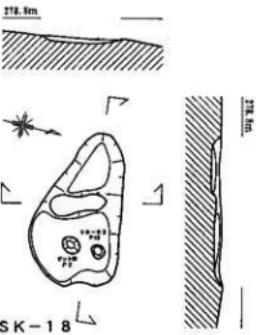
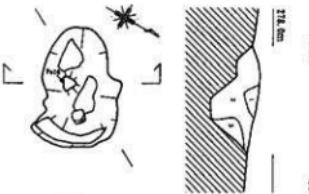
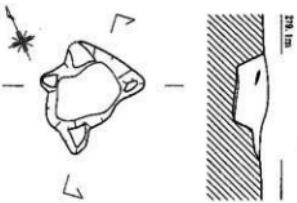
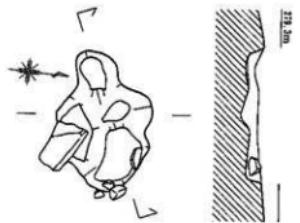
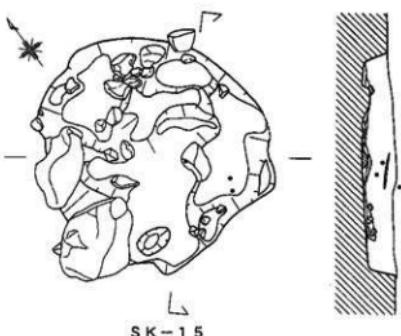
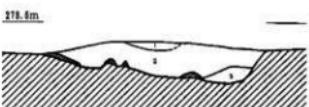
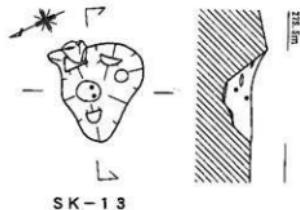


插圖34 SK-13~19遺構図

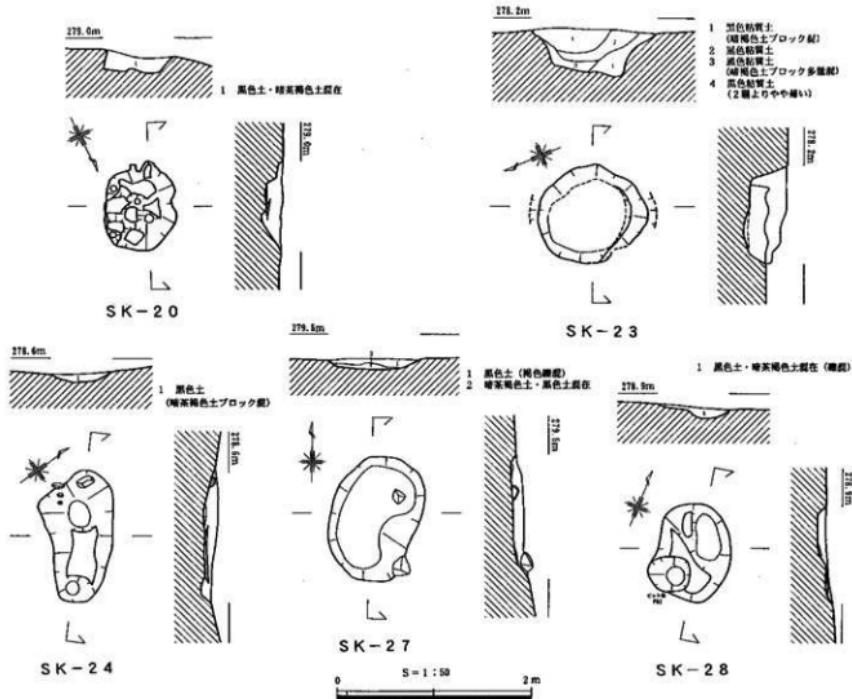
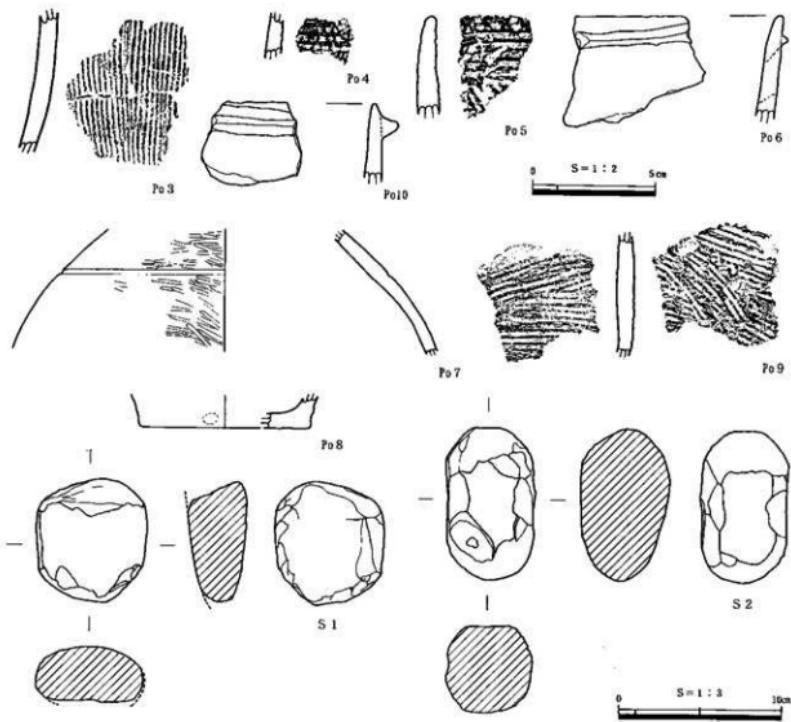


図35 SK-20・23・24・27・28遺構図

表23 土坑出土土器觀察表

遺物名 記載番号	遺物名 記載番号	器 種類	法 量 (cm)	形態の特徴 外 面 調査	内面調査	内表面 外表面調	粘土・焼成	取上 No.	信 考	実測者
Po. 3 36 3	SK-03 鏡文中期 深鉢	① △ 5.8	1段Lの鏡文部を約3mm距離に残す。	横方向のナデ。	褐色 10YR6/1	により黄褐色 10YR7/3	直・良好	1254	清水-107	
Po. 4 36 3	SK-08 鏡文後期 深鉢	① △ 1.8	壁面文様。3条以上の凹縫とわずかに刻み状が残る。	丁寧な横方向のナギ キ。	反褐色 10YR6/2～ 褐灰色5/1	灰褐色 10YR6/2～ 褐灰色5/1	直・良好	1259	馬取式併行か 清水-185	
Po. 5 36 3	SK-06 鏡文草履 深鉢	① △ 4.0	横方向の長い条痕部による縫合線による縫合方向の底文。口縫合部は山川の形の口状に鏡文。	横方向の長い条痕。 口縫合部はナデる。	浅黃褐色 2.5YR7/3	により黄褐色 10YR7/3	直(縫合はそ れほど多くは ない)・良好	1384	織土器 ～前初期 頃か。	清水-85
Po. 6 36 3	SK-04 鏡文 深鉢	① △ 4.2	縫合部は外側に残しない。三角形の小さな無刻み口突きをもつ。以下横方向の凹いナギ。	縫合部付近を縫にナデる。 以下斜め方向の横 方向の凹いナギ。	浅褐色 2.5YR7/3	浅黃色 2.5YR7/3	直(1～3mmの 石突・5mm大 の縫合)・良	1387	日一監 跡土分析 No.27	清水-54
Po. 7 36 3	SK-09 脊生弱目 立	① △ 7.5	横方向のナギキ。背部に1先の横 方向の凹縫を施すが、つながらない。	剥落が著しい。ナデ か。	により黄褐色 10YR7/4	褐色 5YR7/8	直(1mm大の 砂粒を多く含 む)・良好	1448 684 969	達賀川系 跡土分析 No.37	清水-186
Po. 8 36 3	SK-10 底部	① △ 2.0	底面および立ち上がり付近ナギ キ。	立ち上がり付近に指 紋付。	により黄褐色 10YR7/2	により黄褐色 10YR7/2	やや直(2～3 mmの石突を多 く含む)・良	1452		清水-10
Po. 9 36 3	SK-11 H-3-1 深鉢	① △ 7.4	横・斜め方向、やや斜格子状に溝 がある。底に近いか。	横方向の条痕。	浅黄色 2.5YR7/4	褐色 5YR7/6	直(縫合はや や多い)・良 好	1464 1147	織土器	清水-164
Po. 10 36 3	SK-16 夾文 深鉢	① △ 3.2	口縫合は森立しない。縫合部付近に 三角形の大きな無刻み口突きをもつ。 以下比較的丁寧な横方向のナ ギ。	比較的丁寧な横方向 のナギ。	により褐色 7.5YHS/4	により褐色 7.5YRS/4	直・良好	1606	B-D類 跡土分析 No.25	清水-59



插図36 土坑出土遺物実測図

插表24 土坑出土石器観察表

遺物番号	種類番号	回数	遺物名	種類	法 量 (cm)	形 態 上 の 特 徴	重 量	石 材	取 扱 No.	交 換 %
S 1	36	3	SK-08	磨製石斧	⑤△7.5 ⑥ 6.8 ⑦ 3.7	刃部と基部を欠損する太頭始刃石斧か。	△280 g	閃緑岩	1620	清水-120
S 2	36	3	SK-08	石錐	⑤ 9.4 ⑥ 5.3 ⑦ 5.4	橢円形の縁に刃を打ち欠いている有肩石錐。	410 g	石英岩 珪藻土ができている	1631	清水-164

計28基の土坑を検出した。落し穴のように性格の明らかなものもあるが、ほとんどが性格不明である。中には木の痕跡のあるものもみられるが、明らかに風倒木痕であるものは除いている。

出土遺物から時期を考えると、SK-11からはPo 9が出土しており、もう1点の土器も織維土器とみられ、縄文時代早期の土坑の可能性がある。SK-03からは里木2式がPo 3と底面付近からを合わせて6点と馬取式Po 4も出土しているがPo 4はかなり浮いた状態で出土しているため、SK-03は中期後半の土坑と考えられる。SK-06のPo 6とSK-16のPo 10は尖底陶器、SK-09のPo 7と圓化していないがSK-07から頸部に突帯と橢円形の連続する抉りをもつ遠賀川系の壺の頸部、SK-09から段の下側が低まる肩部が出土している。いずれも良好な出土状況ではなく、尖底陶器あるいは粗製土器と遠賀川系土器の共伴関係は不明である。その他、SK-15から弥生時代中期の壺の口縁部が出土している。その他粗製土器が出土しているが時期は不明で、層位的にみてもSK-23・24を除き付近の住居跡やピット群と大きな時期差はないものと考えられる。

## 第5節 落し穴

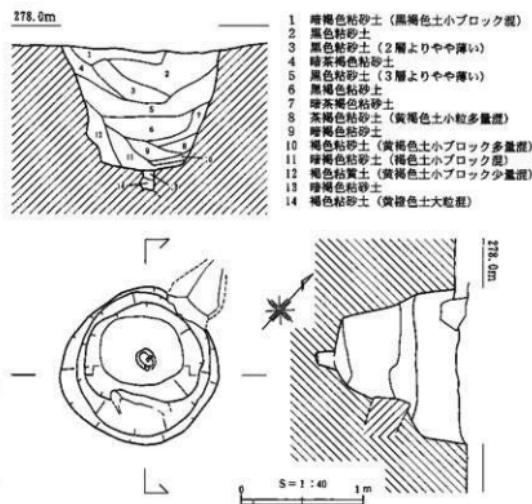
### SK-21 (挿図37 図版2)

D-3グリッドの西側に位置する遺構。第2遺構面の標高277.80m付近から検出した。上面を検出中に若干削平した可能性が強く、元来はもう少し上部から掘り込まれていたと推測される。平面形は検出面・底面形とともに円形を呈し、断面形は逆台形状である。規模は検出面で長軸1.30m×短軸1.20m、底面で長軸0.68m×短軸0.58m、残存する部分での底面までの最大の深さは1.02mを測る。底面の中央部分からピットを検出した。平面形は楕円形で、規模は長軸0.20m×短軸0.15m、深さは最大で0.17mを測る。本遺構は形態から落し穴と考えられるものであるが、上坑掘削中に南側から大きな疊が出土したためそれ以上掘り下げることができず、北側に偏って掘削を継続している。また、底面ピットも下に疊が存在したため、そこで掘削を中止している。埋土は土坑部分が12層、ピット部分が2層に分層出来た。いずれも黒色系の埋土である。自然流入による堆積と推測される。

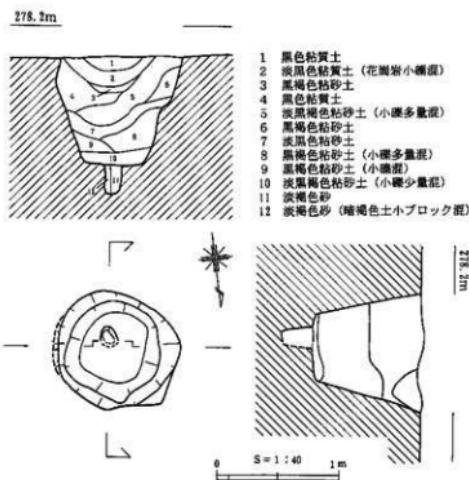
埋土中から小疊が若干出土したが、明確な遺物の出土はない。そのため時期を特定することは出来ないが、上部に存在する包含層との関連から縄文時代晚期終末の突唇文・器皿には下限が押さえられる。

### SK-22 (挿図38)

E-2グリッドの南西側に位置する遺構。第2遺構面の標高277.90m付近から検出した。畠地造成に伴って削平を受けており、元来はより上方から掘り込まれていたと推測される。平面形は検出面・底面形ともに円形状を呈し、断面形は逆台形状である。規模は検出面で長軸1.00m×短軸0.94m、底面で長軸0.59m×短軸0.55m、残存する部分での底面までの最大の深さは0.90mを測る。底面の南寄りからピットを検出した。断面調査を優先したため一部を破壊したが、残存部では平面形は楕円形で、規模は長軸0.16m以上×短軸0.14m、深さは最大で0.26mを測る。本遺構は形態から落し穴と考えら



挿図37 SK-21遺構図



挿図38 SK-22遺構図

れるものである。埋土は土坑部分が10層、ピット部分が2層に分層出来た。このうちの第11層は底面ピットに設置された杭痕を示すものと推測される。自然流入による堆積と考えられる。

埋土中から明確な遺物の出土はない。そのため時期を特定することは出来ないが、上部に存在する包含層との関連から縄文時代晚期終末の突帯文土器期には下限が押さえられる。

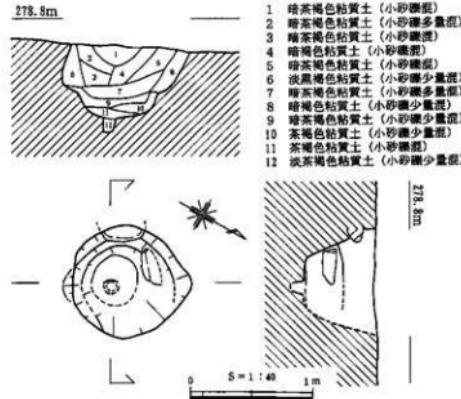
### SK-25 (挿図39)

G-2 グリッドの南西側に位置する遺構。第2造構面の標高278.60m付近から検出した。平面形は検出面・底面ともに円形状を呈し、断面形はいびつな半円形状である。規模は検出面で長軸0.98m×短軸0.91m、底面で長軸約0.41m×短軸0.39m、残存する部分での底面までの最大の深さは0.62mを測る。底面の中央部分からピットを検出した。断面調査を優先したため一部を破壊したが、残存部から判断すると平面形は円形ないし楕円形状で、規模は長軸0.11m以上×短軸0.04m以上、深さは最大で0.12mを測る。本遺構は形態から落し穴と考えられるものである。埋土は土坑部分が11層、ピット部分が1層に分層出来た。埋土は茶色系統の色調を帯びた土が中心であった。自然流入による堆積と推測される。

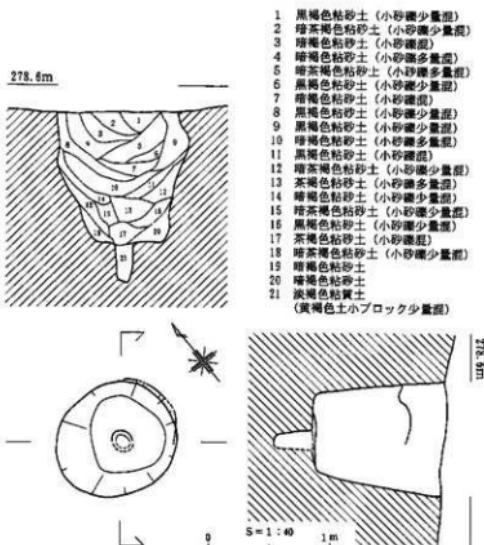
埋土中から明確な遺物の出土はない。そのため時期を特定することは出来ないが、上部に存在する包含層との関連から縄文時代晚期終末の突帯文土器期には下限が押さえられる。

### SK-26 (挿図40 図版2)

F-2 グリッドの中央付近に位置する遺構。第2造構面の標高278.40m付近から検出した。平面形は検出面・底面ともに円形状を呈し、断面形は逆台形状である。規模は検出面で長軸1.06m×短軸0.92m、底面で長軸0.67m×短軸0.64m、残存する部分での底面までの最大の深さは1.08mを測る。底面の中央部分からピットを検出した。断面調査を優先したため一部を破壊したが、残存部から判断すると平面形は円形ないし楕円形状で、規模は長軸0.17m×短軸0.10m以上、深さは最大で0.32mを測る。本遺構は形態から落し穴と考えられるものである。埋土は土坑部分が20層、ピット部分が



挿図39 SK-25遺構図



挿図40 SK-26遺構図

1層に分層出来た。埋土は暗茶色系統の色調を帯びた土が中心であった。自然流入による堆積と推測される。

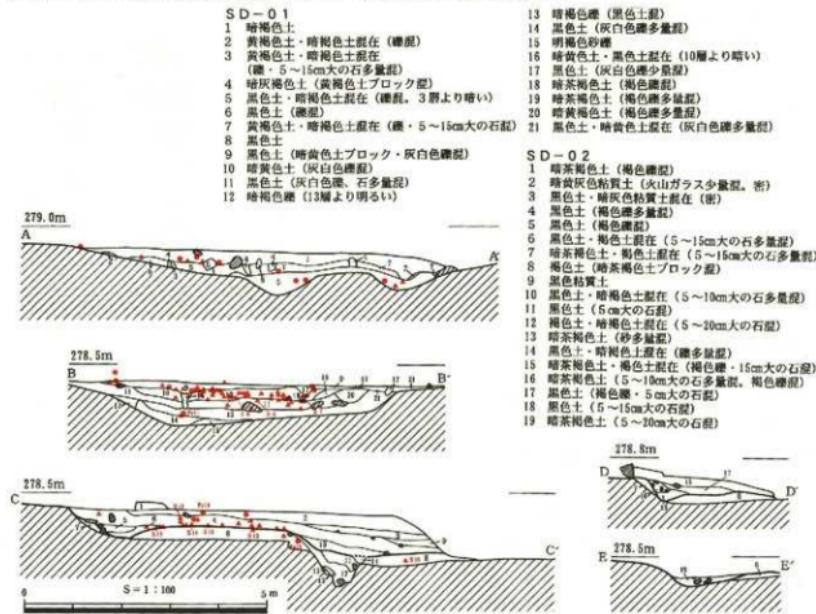
埋土中から明確な遺物の出土はない。そのため時期を特定することは出来ないが、上部に存在する包含層との関連から縄文時代晚期終末の突帯文土器期には下限が押さえられる。

## 第6節 溝状遺構

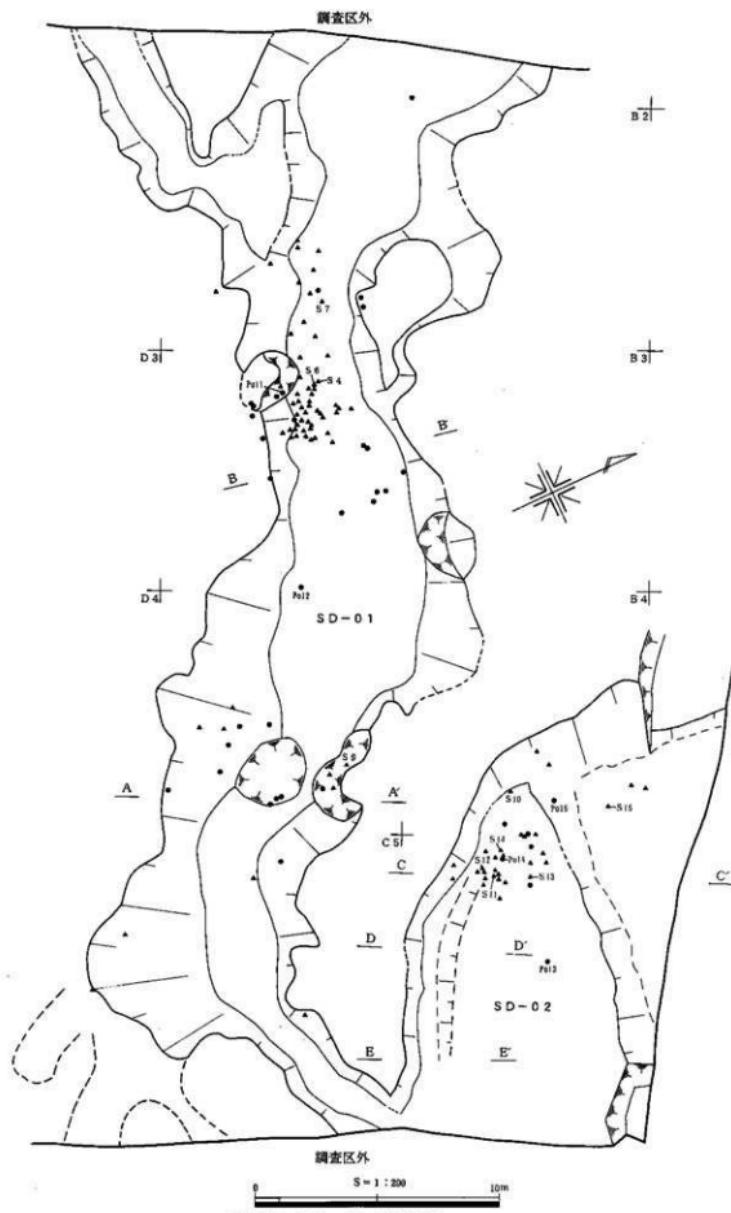
SD-01 (挿図41~43 挿表25・26 図版2・3)

I区第2遺構面、B～D-1～6グリッドにかけて位置する。暗茶褐色土上包含層の下で検出した。調査区を東西方向に横断し調査区外に続いている。東壁付近では4条の小流路が合流するが、西壁付近で再び2条の流路に分分する。一部東端でSD-02と重なるが、切り合い関係は確認できていない。規模は全長約46.6m以上、幅は最も狭いB-B'付近で5.3m、最も広い調査区西壁付近で約19.7mを測る。底面の標高は東壁付近で278.4m、西壁付近では276.7mを測り、約1.7mの高低差をもって東から西方向に下る。走向は中央付近でN-61°-Wを測る。埋土は21層に分層できた。A-A'をみると、黒色土と暗褐色土の混じりの層が底面付近にみられる。B-B'では第14層の黒色土があるが、これは一時流れの幅が狭くなったものとみられる。他はレンズ状の堆積で、この流路はある程度の時間をかけて堆積したものと考えられる。

遺物はPo11・12、S 3～9が出土した。Po11は風倒木痕による擾乱層中にあり、Po12は底面から約30cm浮いているため時期判断の資料としては不十分であるが、いずれも貝殻腹縫による施文をもち、Po11は纖維を含む繊維土器、Po12は纖維は含まず口縁端部を肥厚させる羽鳥下層式に類似している。これらの土器は繊維土器から羽鳥下層式にかけて、縄文時代早期末から前期初頭頃のものと考えられる。石器はS 3～5が黒曜石石鏃、S 6は石核、S 7は敲石、S 8・9は凹石である。黒曜石の多くはC-3グリッド中央西側付近、B-B'より下流で集中している。産地同定の結果、S 3・4・6が隱岐島久見産であった。



挿図41 SD-01・02土層図



挿図42 SD-01・02構造図

黒曜石は掘り下げ巾一括も含め74点出土した。この中には石核2点、母岩からの剥片が4点確認できた。主剥離面が縦方向のものと横方向のものはほぼ同じくらいであるが、1cm角に満たない小剥片も15点ある。剥片の形態は二角形よりも四角形がやや多いが、縦長の剥片も8点ほどみられた。石の質は良いものが多くみられた。いずれもSD-01の底面からは浮いており流れ込みとも考えられるが、層位的にはほぼ一定しており、SD-01が堆積しているある段階に付近で石器製作が行われていたものと推測したい。

土器は掘り下げ中一括も加えると纖維土器が25点出土した。縄文を施すものは、表裏縄文が7点、表が縄文で裏が条痕のもの3点、裏が不明のもの2点であった。縄文は2段R L縄文を主な原体とし、暗茶褐色土包含層出土のPo16~26に類似するものが多いが、中には胎土が異なり乱雜に縄文を施すものもみられた。条痕を施すものは、表裏条痕が6点、表が条痕で裏は条痕後ナデのもの4点、表裏ともに条痕後ナデのもの3点でいずれも横方向の条痕が主体であった。また纖維が確認できないものが6点あり、調整は表がナデまたは条痕後ナデ、裏がナデを主体としていた。器壁の非常に薄いものも2点みられた。それ以外に里木2式1点、弥生時代前期の体部1点が出土したがいずれも風倒木痕からで、この風倒木痕は弥生時代以降と考えられる。遺物の時期は全体

插表25 SD-01土器觀察表

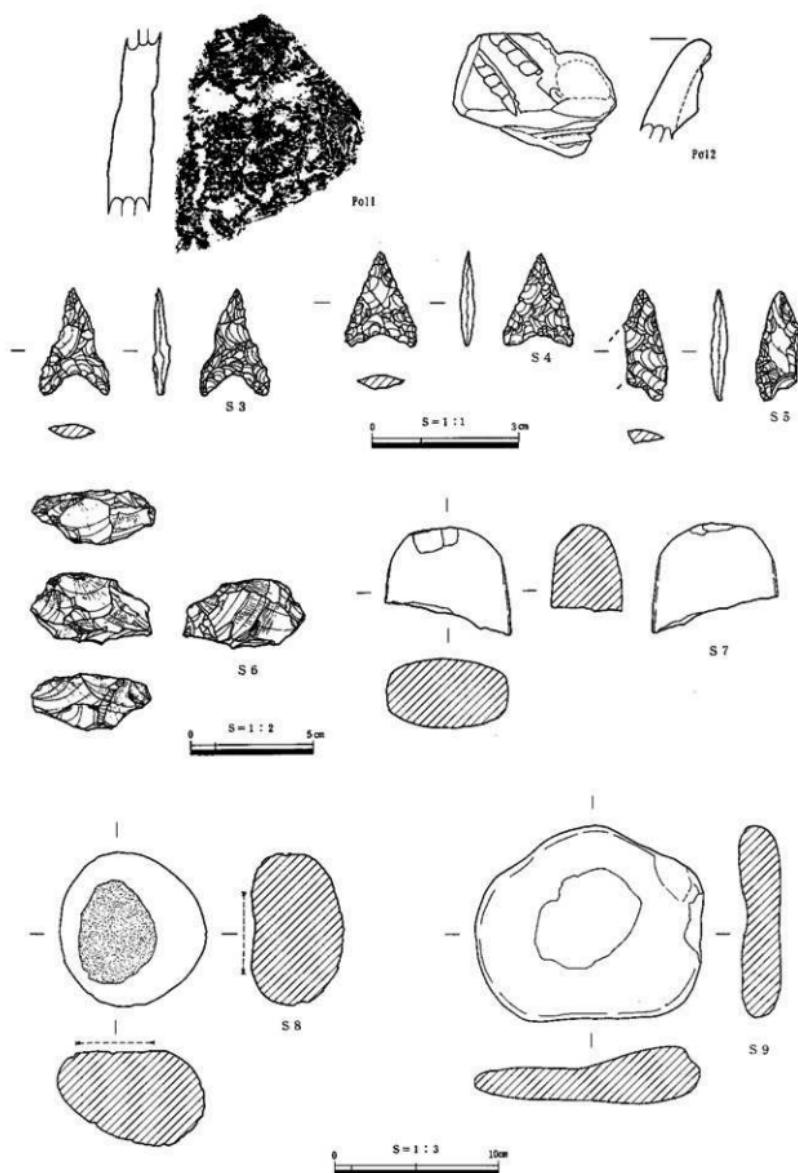
遺物名 区分	通鑑名	種類	縫 縫	法 量 (cm)	形態上の特徴 外 面 調 整	内面調査	内面色調	外面色調	胎土・焼成	取上№	備考	実測者
Po 11 43 3	SD-01	縄文早期 深鉢	①△ 3.7	横方向の条痕に貝殻模様による 縦方向の爪紋式の施文をする。	横方向の条痕。	において黄褐色 10YR7/3	において黄褐色 10YR7/3	青(纖維は比 較的多い)・ 良	2163	纖維土器 一前初期 深鉢	清水-188	
Po 12 43 3	SD-01	縄文前期 深鉢	①△ 2.0	口縁端部から下がった位置を肥厚 させ、縫合部に縫合筋による 縫合方向の施文をする。突起の下 は横方向の条痕。	横方向の条痕後ナデ。	灰褐色 5YR6/2	明赤褐色 5YR5/6	青(2mmの 石片を含む。 縫合は確認で きず)・良	2150	前初期 深鉢	清水-168	

插表26 SD-01石器觀察表

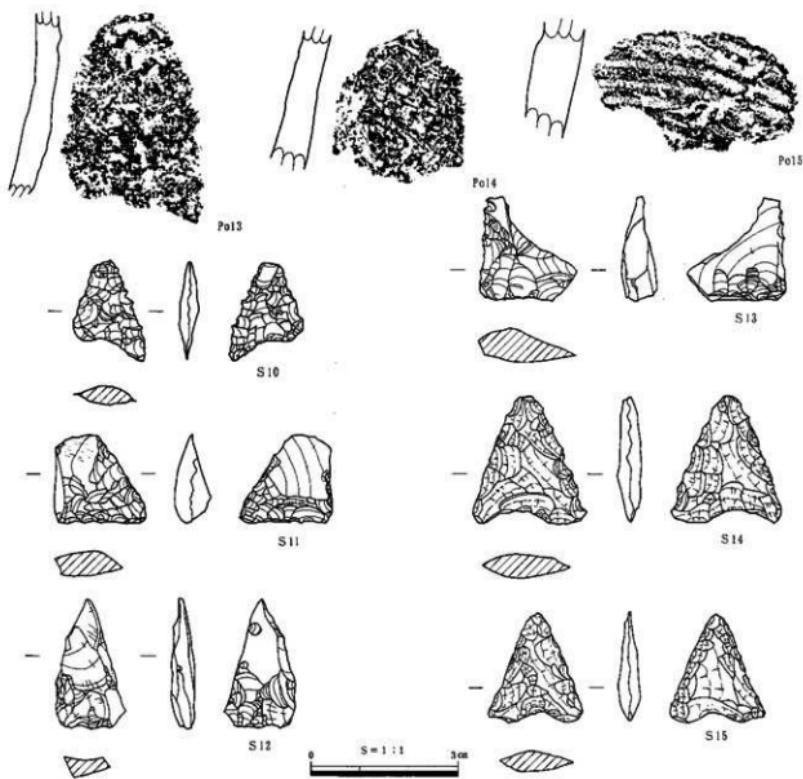
遺物名 区分	採集番号	回収番号	通鑑名	種類	法 量 (cm)	形態上の特徴	重 量	石 材	取上№	実測者
S 3	43	3	SD-01	石核	⑤ 2.2 ⑥ 1.4 ⑦ 0.3	抉り長 2m / 全長22cmで、抉りの深度は0.10、 剥離点間は13cmである。剥離はレンズ状で、剥離 は中央部でおよび、内側部とともに逆運動 の細部調整を施す。	0.56	黑曜石 剥離久見鉢 回定№8	2091	大角-86
S 4	43	3	SD-01	石核	⑤ 2.0 ⑥ 1.5 ⑦ 0.3	抉り長 2m / 全長20cmで、抉りの深度は0.10、 剥離点間は13cmである。剥離はレンズ状で、剥離 は中央部でおよび、内側部とともに逆運動 の細部調整を施す。	0.68	黑曜石 剥離久見鉢 回定№8	2115	大角-85
S 5	43	3	SD-01	石核未製品	⑤△2.3 ⑥△0.9 ⑦△0.3	左面は済度の深い赤褐色の調査、右面は一部連 続する細部調整を施すが、後は粗い調査である。	△ 0.68	黑曜石	2090	大角-87
S 6	43	3	SD-01	石核	⑥ 4.9 ⑦ 2.8 ⑧ 2.3	前面はやや長い三角形で、剥離輪は不規則である。	26.4K	黑曜石 剥離久見鉢 回定№10	2117	西川-6
S 7	43	3	SD-01	磨石	⑥△3.3 ⑦ 7.7 ⑧ 4.3	先端部に大きな底面がある。	△250 K	石英閃长岩	2168	清水-170
S 8	43	3	SD-01	凹石	⑥ 9.5 ⑦ 9.0 ⑧ 5.9	1ヶ所がわずかに露み、磨滅する。	620 S	花崗岩	2153	清水-169
S 9	43	3	SD-01	凹石	⑥ 11.9 ⑦ 13.8 ⑧ 3.4	扁平な盤の中央部が窪む。	760 S	細粒花崗岩	2184	清水-116

插表27 SD-02土器觀察表

遺物名 区分	通鑑名	種類	法 量 (cm)	形態上の特徴 外 面 調 整	内面調査	内面色調	外面色調	胎土・焼成	取上№	備考	実測者
Po 13 44 3	SD-02	縄文早期 深鉢	①△ 3.3	山形の押形を横方向に施す。剥離 が新しいが3段程度は確認できる。 文様の下は深鉢。	横方向の条痕。	褐色 7.5YR4/3	褐色 7.5YR4/3	青(良)	2196	黄土色底 斜面	清水-189
Po 14 44 3	SD-02	縄文早期 深鉢	①△ 2.8	纖維痕およびわずかに縄文の痕。	ナデか。	暗褐色 10YR3/3	暗褐色 10YR3/3	青(1~3 mm の砂粒・繊維 がやや含む)・ 良	2226	纖維土器	清水-190
Po 15 44 3	SD-02	縄文早期 深鉢	①△ 2.3	横方向の低い条痕。底付近か。	横方向の低い条痕。	において褐色 7.5YR5/3	において褐色 7.5YR5/3	青(纖維をや や含む)・良	2220	纖維土器 未製品か	清水-191



挿図43 SD-01遺物実測図



插図44 SD-02遺物実測図

插表28 SD-02石器観察表

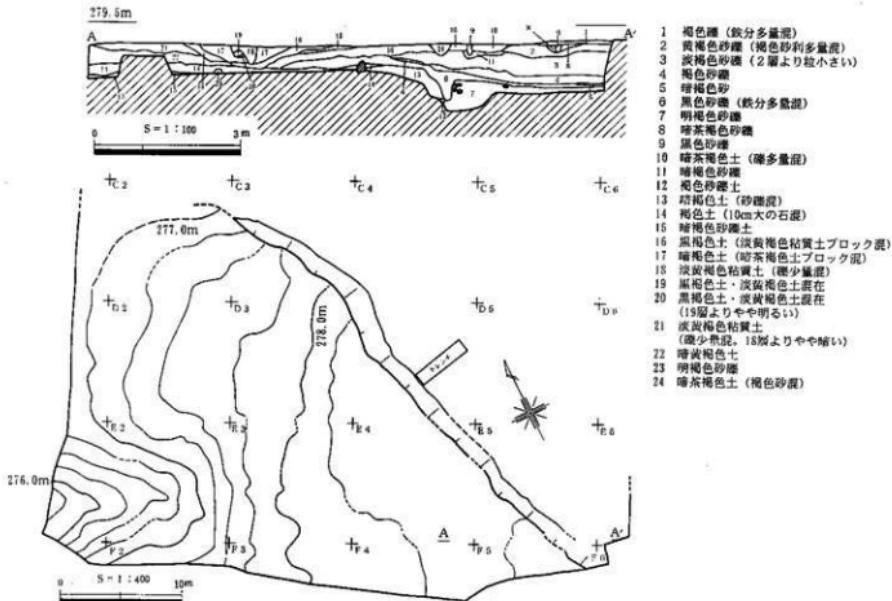
遺物番号	種類番号	形態番号	造営名	種類	法 量 (cm)	形態上の特徴	重 量	石 材	取上 地	実測値
S 10	44	3	SD-02	石鏃	⑤△3.0 ⑥△14 ⑦ 0.4	抉り長4mm/全長20mm以上で、先端部が尖鋒しているが、刃部は粗粒で、表面は中央部より外側に向かって斜面を有する。刃部は正面に調整された。	△ 0.8g	黒曜石	2219	大角-83
S 11	44	3	SD-02	石鏃未製品か	⑤△2.8 ⑥△1.9 ⑦△0.7	前面は非常に厚い。左面は中央部までおよぶ連続する細胞剥離を行なうが、右面は大削離面先端付近をわずかに加工して留まっている。	△ 2.1g	黒曜石	2204	西川10
S 12	44	3	SD-02	加工片	⑤△3.7 ⑥△1.5 ⑦△0.4	わずかに左の下部に二次加工の様子。製點にはならない。	△ 1.4g	黒曜石	2199	大角-88
S 13	44	3	SD-02	石鏃	⑤△2.1 ⑥△2.0 ⑦△0.7	前面は薄い。左面は中央からの剥離を一部残す。先端部は刃にも調整板。右面は一面に調整せずあるのは珍しい。	△ 2.2g	黒曜石	2216	大角-89
S 14	44	3	SD-02	石鏃	⑤ 2.6 ⑥ 2.3 ⑦ 0.5	抉り長2mm/全長10mmで、抉りの深度は0.6mm、剥離面は14mmである。前面はレンズ状で、背面は中央部から縫合部に向かう大削離面連続一帯通過する細胞剥離を施す。	3.7g	安山岩	2206	西川11
S 15	44	3	SD-02	石鏃	⑤ 2.2 ⑥ 1.9 ⑦ 0.4	抉り長3mm/全長9mmで、抉りの深度は0.0mm、剥離面は11mmである。前面はレンズ状で、背面は丁寧で縫合部には通過する細胞剥離を施す。	1.3g	安山岩	2223	西川12

的に混入も少なく時期幅も狭い。遺構の時期は遺構の埋土上層からではあるが織維土器Po11と前期初頭の土器Po12が出土していることから、下限は縄文時代早期末～前期初頭と考えられる。

### SD-02 (挿図41・44 拡表27・28 図版2・3)

I区第2遺構面、A～C-4～6グリッドにかけて位置する。暗茶褐色土包含層の下面で検出した。調査区の西方向から屈曲して北方向に向かい調査区外に続いている。北側はテラス状になり、さらに調査区付近で一段下がる。流路の屈曲部の西側は周囲よりも標高が高く大きな花崗岩の岩石が多くみられ、流路はこれを避けるよう北側に向きを変えたとみられる。またテラス部はある程度流れが止まる状況のために形成されたものと考えたい。規模は全長19.3m以上、幅10.8m以上で、底面の標高は西壁付近で278.3m、屈曲部付近では277.4mで約0.9mの高低差をもち南東から北西方向に向けて傾斜する。走向は概ね東側ではN-57°Wから屈曲してN-8°Eに向きを変える。埋土は19層に分層できた。C-C'をみると、西端付近に第5・6層があり、D-D'、E-E'の断面でもみられることから、SD-01と同様、流れの幅が一時狭くなったことが想定できる。他は緩やかに北に下がる堆積で、特に第2層は暗黄色のきめの細かな層で火山灰に類似していた。岡山理科大学の白石純氏に観察していただいたところ、火山ガラスが含まれているがその量は少なく、層位的にも二次堆積の可能性が高いとの教示を受けた。また北側の一段下がった際付近が黒く溝状に検出できたために掘り下げたが、この層は二日月状にSD-02の底面よりさらに下に続いているため、北側を中心をもつ自然流路の南肩部と判断した。

遺物はPo13～15、S10～15が出土した。Po13はほぼ底面上、Po14は底から20cm以上浮いた状態で出土した。Po13は山形の押型文土器で黄島式の直前と考えられる。Po14・15は織維土器で、Po14は表が乱雑で浅い縄文の痕跡、裏面はナデ、Po15は表裏条痕で器壁が厚く底部付近とみられる。Po13は縄文時代早期中葉頃、Po14・15は織維七器で縄文時代早期末頃と考えられる。S10は黒曜石石鏃、S11～13が使用方法は特定できないが加工痕



挿図45 SD-03遺構図

をもつ剥片でいずれも黒曜石、S14・15は安山岩製の石器であった。安山岩の産地は特定できなかった。

黒曜石は掘り下げ中一括も含め55点が出土した。石核はみられなかったが母岩からの剥片が3点確認できた。石の質が悪く厚い剥片が目立ち、約30点は1cmに満たない小剥片である。これらの剥片はほとんどが北西側の屈曲部付近からの出土で、SD-01と同様埋土上層から出土しており、SD-02が堆積しているある段階に付近で石器を作っていたと考えたい。

土器はPo13は底面上、Po14・15は第2層中でいずれも浮いた状態で出土した。その他5点出土しているが、1点は1段Lの乱雑な撚糸文で里木2式か。他4点は小片のため判断しにくいが内外面ともにナデを基本としており織維は確認していない。いずれも第2層中付近からの出土である。造構の時期は底面付近から押型文土器Po13が出土していることから、縄文時代早期中葉頃と考えられる。

#### SD-03 (挿図45)

I区の南東付近では、第1造構面と第2造構面が同一面で検出されたが、その下から溝状造構SD-03を確認した。F-6グリッドからC-3グリッドに向かい、西側の肩を検出したが東側の肩は確認することができない。掘り下げた範囲では幅9m以上、長さは40.8m以上で、北端は自然流路SD-01の底よりもさらに低い位置で終わる。走向は概ねN-20°-Wを測るが、北端付近でやや西に向かうようである。溝の断面は、A-A'をみると第2~7層まで砂を含む層が堆積し、中でも第5層は粒子の均一な砂で、その下に鉄分が多く含む第6層が堆積している。ただし第5層の上には粗い疊が堆積しており、一般的な堆積とは逆の様相を呈している。鳥取大学名譽教授の赤木三郎氏から、このような状況は逆グレーディング現象と呼ばれ、土石流や洪水時に典型的にみられる堆積との教示をいただいた。造構の上流部は山の際に続いているとみられ、この付近の土砂を押し流したために起こったものと推察する。造構の底についてであるが、第7層から下には明褐色砂礫の層が続いており、トレンチで確認したところ、底面から少なとも1.05m下まで明褐色の砂礫層が続いていた。その他、第15~21層にかけて落ち込みがみられた。

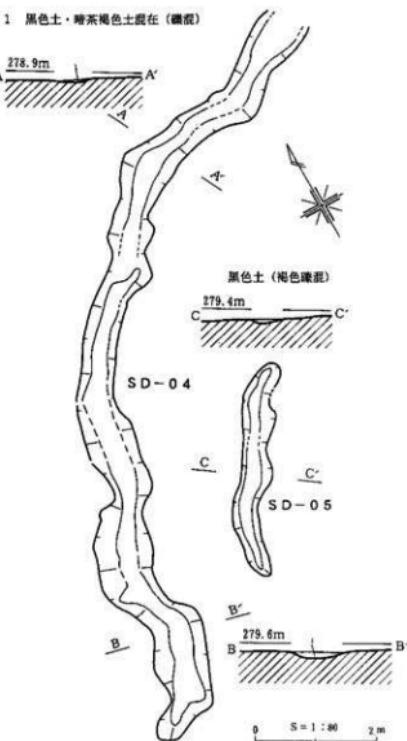
遺物は出土していない。層位的にはSD-01を測るとみられることから下限は縄文時代早期末と考えられる。

#### SD-04 (挿図46)

II区第2造構面、F-3グリッドからG-3グリッドにかけて西側に曲る弧状に検出できた。走向は概ねN-9°~68°-Eを測る。規模は全長12m以上、幅は最大で0.87m、残存する深さは最大で約10cmである。埋土は黒色土と暗茶褐色土が混じる単層である。遺物は出土していない。

#### SD-05 (挿図46)

II区第2造構面、G-3グリッド中央付近で西側に曲る弧状に検出できた。走向は概ねN-20°~45°-Eを測る。規模は全長3.6m、幅は最大で0.6m、残存する深さは最大で6.2cmと浅い。埋土は黒色土の単層であった。遺物は出土していない。



挿図46 SD-04・05造構図

表29 暗茶褐色土包含層出土遺物一覧表

	B2 -1	-2	-3	-4	B3 -2	-3	-4	B4 -2	-3	-4	B5 -1	-2	-3	-4	C1 -1	C2 -1	-2	-3	-4	C3 -1	-2	-3	-4	C4 -1	-2	-3	-4	C5 -1	-2	-3	-4
繩文早期																															
繩文前期																															
繩文中期																															
繩文後期																															
繩文後期																															
突 帯 文																															
繩製土器	1	1	5	1	6	1	2	4	13	5	11	3	2	1	3	9	13	1	22	14	6	13	2	3	1	4					
粗製土器																															
弥生前期																															
弥生中期																															
陶 瓶 器	1																														
黒曜石		2	1																												
安山岩	1																														
石 製 品																															
	D3 -1	-2	-3	-4	D4 -1	-2	-3	D5 -1	-2	-3	合 计																				
繩文早期											1																				
繩文前期												1																			
繩文中期													35																		
繩文後期													1																		
繩文後期													1																		
繩文後期													0.9%																		
突 帯 文													3																		
繩製土器	4	1	2	1	2						1		158																		
粗製土器													11																		
弥生前期													16																		
弥生中期													1																		
陶 瓶 器													309																		
黒曜石													159																		
安山岩		1	1	17	1	12							8																		
石 製 品													3																		
													170																		

## 第7節 暗茶褐色土包含層

黒色土包含層の除去後に暗茶褐色土包含層を検出した。この層には繩文時代早期から弥生時代中期までの遺物を包含している。SD-01が埋没する過程で形成された中央部分の低まりを覆うように西側から張り出しており、厚いところでも30cm程度である。この層を境にして上面は第1造構面、下面是第2造構面で、第2造構面はSD-01・02の上層にある。

繩文時代早期末の土器はPo16～28の繩維土器で、

Po16～26の表裏繩文上器、Po27の表のみ条痕を施すもの、Po28の表裏条痕に分けられる。このうち表裏繩文は、島根県大社町の菱根遺跡に類似があるため菱根式としている。Po16は外傾するU縁部である。繩維土器はB-5-3・C-3-4-C-4-3-C-5-2グリッドからはそれぞれある程度まとまった状況で出土した。表裏繩文の中には内面ナデのものも認められたが、全面に繩文が隙間無く施されているのではなく部分的に消えているまたは消されている部分もあると考えている。条痕をもつものはPo27のように器壁の厚いものとPo28のように薄いものがある。口縁部は圓化していないが表裏繩文と同様外傾してそのままおわる。繩文と条痕の組み合わせは確認していない。繩維の量には若干差が認められ、概して条痕をもつものは器壁に厚薄があり繩維量にも個体差が目立つが、表裏繩文土器は同一個体とみられるためか繩維の量はどれも一様で多くなく、焼きは良好で赤褐色を呈し器面は硬い。

繩文時代前期初頭の土器はPo29の羽島下層2式で、「3」字状の連続する刺突をもち、胎土に繩維は含まない。

繩文時代中期後半の土器としてPo30～38の船元式がある。このうちPo30・38は船元2～3式で、他は太い繩と細い繩が交互に認められ船元4式と考えられる。他に單耳2式も認められたが圓化できなかった。これら中期後半の土器はB-4-4-B-5-1グリッド付近に集中して認められた。

繩文時代後期の北白川上層式とみられる土器が1点出土したが、圓化できなかった。最も点数の多いのは粗製土器で、時期は不明であるが胎土には繩維を含んでいない。調整はほとんどがナデまたは粗いナデで、内面または外面に条痕をもつものも若干みられる。

石製品は黒曜石および安山岩の石器が出土している。黒曜石はいずれも隕石島久見産で、特にC-2グリッドとC-4-3-C-5-1～2グリッドから黒曜石の剥片が集中して出土した。C-2グリッド付近はSD-01の西側の黒曜石出土地点と一致し、1cm以下の小片は14点あり、石核は2点出土した。SD-01のものと同一時期のものと考えられる。C-4-3-C-5-1～2グリッド出土のものは小片が31点、母石からの剥片が13点あり、石核は3点出土した。下の第2造構面との境付近からの出土で、広い範囲に剥片が散乱していた。

播表30 暗茶褐色土包含層土器観察表

遺物番号 測定番号	遺物名	形類	寸 丈 (cm)	形態上の特徴 外 面 圖 案	内部觀察	内面色調	外面色調	指土・焼成	取上地	備 考	実測者名
Po 16 47	H-6-3 縦文早期 深鉢	①△ 4.8	表裏繩文。2段のR.L繩文を口縁部附近は斜め、その下は横方向に施す。	斜め方向に繩文を施す。消えている部分あり。	褐色 7.5YR4/4	褐色 7.5YR4/4	密(繩程はや や多い)・良 好	1691	繩土器 表模式	清水-82	
Po 17 47	B-5-3 縦文中期 深鉢	①△ 7.1	口縁部は外傾する。表裏繩文。2段のR.L繩文を横方向に施す。繩 程程が目立つ。	斜め方向に繩文を施す。消えている部分あり。繩程が目立つ。	にぶい赤褐色 SYR4/3 ~ SYR5/6	暗赤褐色 SYR5/6	暗・良好	1689 1697 1699 1700 1702 1704	繩土器 表模式	清水-135	
Po 18 47	C-4-3 縦文中期 深鉢	①△ 5.3	表裏繩文。2段のR.L繩文を横方 向に施す。消えている部分あり。	斜め方向に繩文を施す。消えている部分あり。	褐色 7.5YR4/6	明赤褐色 7.5YR5/6 ~ 7.5YR6/4	暗・良好	1752 1753	繩土器 表模式	清水-136	
Po 19 47	C-5-1 C-5-2 C-4-3 縦文早期 深鉢	①△ 4.5	表裏繩文。2段のR.L繩文を横方 向に施す。消えている部分あり。	斜め方向に繩文を施す。消えている部分あり。	にぶい褐色 7.5YR5/4	褐色 7.5YR6/6	暗・良好	1707 1711 1715	繩土器 表模式	清水-139	
Po 20 47	C-4-3 縦文中期 深鉢	①△ 6.3	わずかに内腹に留出する体形。 表裏繩文。2段のR.L繩文を横方 向に施す。不定方位の繩程。	曲面部に斜め方 向に繩文を交互に施す。	にぶい赤褐色 SYR5/4	明赤褐色 SYR5/6	密(5 mm大 きの繩程)・良 好	1691 1695	繩土器 表模式	清水-134	
Po 21 47	C-4-3 縦文中期 深鉢	①△ 5.5	表裏繩文。2段のR.L繩文を斜め 方向に施す。表裏とも同じ位置に 斜め方向に施す。	斜め方向に繩文を施す。無より消され る。	にぶい赤褐色 SYR5/4	明赤褐色 SYR5/6	密・良好	1728	繩土器 表模式	清水-133	
Po 22 47	B-5-3 縦文早期 深鉢	①△ 4.8	裏のみ繩程が目立つ。わずかに繩 の痕があるがナゲが多い。	2段のR.L繩文を斜 め方向に施す。	明赤褐色 SYR5/6	明赤褐色 SYR5/6	暗・良好	1691	繩土器 表模式	清水-142	
Po 23 47	C-4-3 縦文早期 深鉢	①△ 5.6	表裏繩文。2段のR.L繩文を斜め または横方向に施す。	横方向に繩文を斜め または横方向に施す。	明赤褐色 SYR5/6	明赤褐色 SYR5/6	暗・良好	1733	繩土器 表模式	清水-137	
Po 24 47	B-5-3 縦文中期 深鉢	①△ 4.1	表裏繩文。2段のR.L繩文を斜め 方向に施す。	斜め方向に繩文を施す。一部消滅の ために不規則。	にぶい赤褐色 SYR5/4	明赤褐色 SYR5/6	暗・良好	1693	繩土器 表模式	清水-143	
Po 25 47	C-5-8 縦文中期 深鉢	①△ 2.9	表裏繩文。2段のR.L繩文を横方 向に施す。	横方向に繩文を交叉 して施す。消えている部分あり。	褐色 7.5YR6/6 ~ 7.5YR6/4	にぶい赤褐色 SYR4/3	暗・良好	1734	繩土器 表模式	清水-141	
Po 26 47	D-5-1 縦文中期 深鉢	①△ 3.1	表裏繩文。2段のR.L繩文を横方 向に施す。	横方向に繩文を施す。 消えている部分あり。	褐色 7.5YR6/6	赤褐色 SYR4/6	暗・良好	1737	繩土器 表模式	清水-140	
Po 27 47	H-6-3 縦文中期 深鉢	①△ 4.8	横または斜め方向の垂直。口縁部 が近か。わずかに化粧付帯。	繩程の削除のため痕 が多い。指圧圧痕か。	にぶい赤褐色 7.5YR5/3	にぶい赤褐色 7.5YR5/6	中(繩程は表 面的近くに多い) ・良	2056 2057	繩土器	清水-145	
Po 28 47	C-3-4 縦文中期 深鉢	①△ 7.5	横もしくは斜め方向の交叉に無い 垂直を施す。痕跡は5~7 mmと薄 い。	横方向の粗い糸程。	にぶい黄褐色 10YR5/6 ~ 10YR5/4	にぶい黄褐色 10YR6/4 ~ 10YR6/1	暗・良	2045	繩土器	清水-160	
Po 29 47	B-3-3 縦文中期 深鉢	①△ 1.7	「3」字状の3連繩文を2段以上 施す。口縁部附近に見られる。器 壁は4~5 mmと薄い。	ナゲかな。	朝赤褐色 10YR7/6	朝灰褐色 10YR4/1	暗・良	1920	羽島下闕 2式	清水-166	
Po 30 48	B-5-1 B-5-2 縦文中期 深鉢	①△ 4.0	口縁部がやや外反する。挽りの粗 い2段のR.L繩文を斜め方向に施す。 口縁部の跡跡が薄い。	口縁部形に斜め面 を施す。無より薄いの繩 を施す。体部痕跡が は斜め方向のナゲ。	にぶい黄褐色 10YR6/4	にぶい黄褐色 10YR6/4	暗(1 mm前後 の砂粒を多く含む) ・良	1648 1651 1677	船元 2 ~ 3式	清水-62	
Po 31 48	H-4-4 縦文中期 深鉢	①△ 2.7	口縁部がやや内凹。キャリヤー型 の2段のR.L繩文を施す。2段のR. L繩文を斜め方向に施す。	口縁部に斜め方 向の繩文。下部に横 横の継ぎと縫合が重なる。	褐色 7.5YR6/6	にぶい黄褐色 10YR6/4	暗(1 ~ 2 mm の砂粒を多く含む) ・良	1661	船元 4式	清水-61	
Po 32 48	B-5-1 縦文中期 深鉢	①△ 6.6	キャリヤー型の脚部附近か。2段 のR.L繩文を斜め方向に施す。	横または斜め方向 のナゲ。	褐色 7.5YR7/6	褐色 7.5YR7/6	暗(1 mm前後 の砂粒を多く含む) ・良	1655	船元 4式	清水-132	
Po 33 48	B-5-1 縦文中期 深鉢	①△ 5.6	キャリヤー型の脚部附近か。2段 のR.L繩文を斜め方向に施す。	横または斜め方向 のナゲ。	褐色 7.5YR7/6	灰黃褐色 10YR5/2	暗(1 mm前後 の砂粒を多く含む) ・良	1664	船元 4式	清水-130	
Po 34 48	B-4-4 縦文中期 深鉢	①△ 3.7	内側する体形。3段のR.L繩文を 施す。一部剥離のために不明瞭。	横または斜め方向 のナゲ。	朝赤褐色 10YR7/6	朝赤褐色 10YH7/6	暗・良	2017	船元 4式	清水-147	
Po 35 48	B-4-4 縦文中期 深鉢	①△ 5.0	わずかに外反する体形。2段のR. L繩文を施す。	横または斜め方向 のナゲ。	褐色 7.5YR7/6	褐色 7.5YR7/6	暗・良	1659	船元 4式	清水-136	
Po 36 48	B-5-1 縦文中期 深鉢	①△ 4.6	内側する体形。2段のR.L繩文を 施す。一部剥離のために不明瞭。	横または斜め方向 のナゲ。	褐色 7.5YR7/6	灰黃褐色 10YR5/2	暗(1 mm前後 の砂粒を多く含む) ・良	1654	船元 4式	清水-131	
Po 37 48	B-4-4 縦文中期 深鉢	①△ 2.6	2段R.Lの繩文が被り方に異なる。	横方向のナゲ。	褐色 7.5YR7/6	褐色 7.5YR7/6	暗(1 mm前後 の砂粒を多く含む) ・良	1644	船元 4式	清水-155	
Po 38 48	B-6-1 縦文中期 深鉢	①△ 3.2	さわめて挽りの粗い2段R.Lの繩 文を施す。	横方向のナゲ後継方 向のナゲ。	黒褐色 2Y3/1	黒褐色 2Y3/2	暗・良好	1777	船元 2 ~ 3式	清水-162	

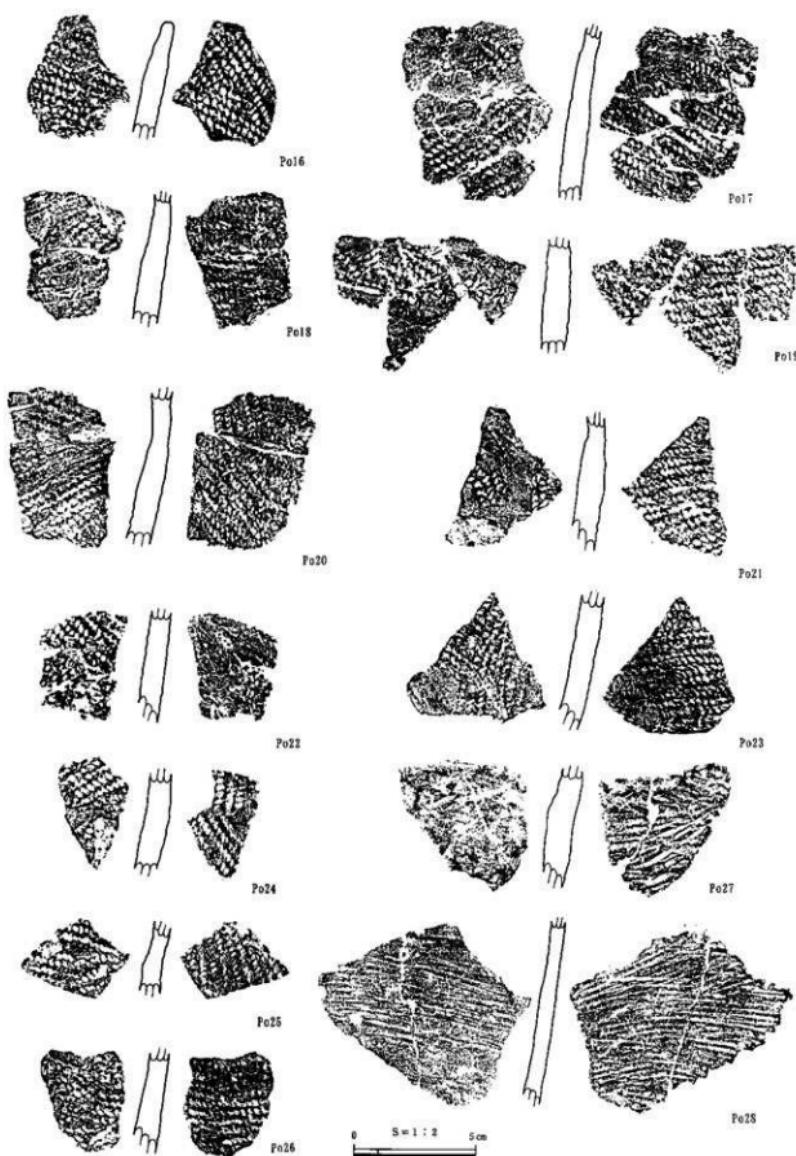


插圖47 暗茶褐色土包含層土器實測圖(1)

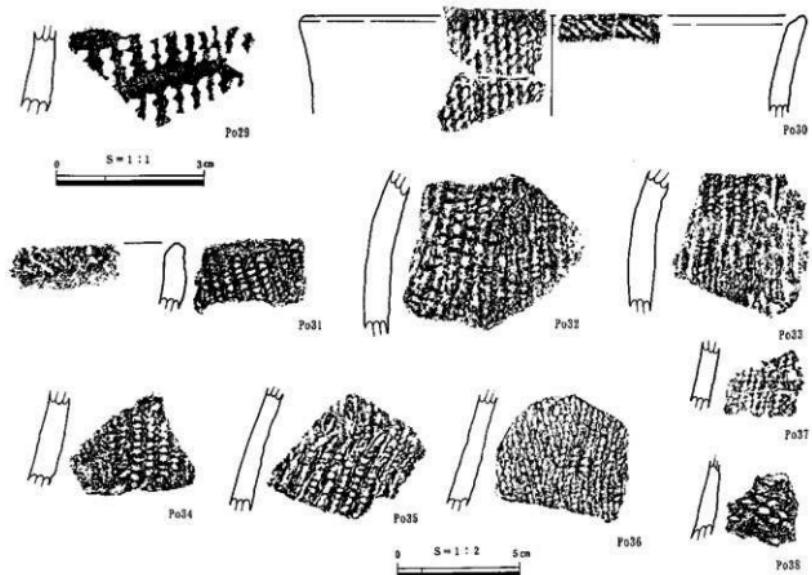


図48 喰茶褐色土包含層土器実測図(2)

表31 喰茶褐色土包含層石器観察表

番号	番号	番号	遺物名	種類	法 (cm)	量	形態上の特徴	重量	石材	取上№	実測番号
S 16	49	5	C-4-4	石縫	⑤ 2.7 ⑥ 1.6 ⑦ 0.4		抉り長3cm／全長10mmで、抉りの間隔は0.22、鋸歯状は4mmである。断面はレンズ状で、調査は非常に丁寧に掌から縫辺部へは連続する。細部調整を施す。	0.9g	黒曜石 四枚久見産 同定№3	1702	大角-84
S 17	49	5	—	石縫	⑤ 1.8 ⑥ 1.5 ⑦ 0.4		抉り長3cm／全長10mmで、抉りの間隔は0.15、鋸歯状は1mmである。断面はレンズ状で、調査はレシス状で、調査は左辺は横刃なのに刃先が右辺は大斜面を生かし縫辺部の間に細部調整を施す。	0.7g	黒曜石 四枚久見産 同定№7	2056	西川-9
S 18	49	5	C-3-1	石縫	⑤△3.7 ⑥△3.5 ⑦△1.4		断面は不整な三角形または菱形で、剥離部は不規則	△ 13.4g	黒曜石 四枚久見産 同定№5	1994	西川-4
S 19	49	6	D-5-4	石縫	⑤△1.3 ⑥ 1.6 ⑦ 0.3		抉り長3cm／全長20mm以上で、鋸歯状は12mmである。断面はレンズ状で、調査は左辺は横刃であるが、右辺は縫辺部に比較的丁寧な細部調整を施す。	△ 0.5g	安山岩 产地不明 同定№4	1782	西川-8
S 20	49	5	C-3-2	石縫	⑤ 2.0 ⑥ 1.5 ⑦ 0.4		抉りはほとんどなく、全長20mmで、鋸歯状は5mmである。断面はレンズ状で、調査は左辺は丁寧な連続する剥離部であるが、右辺は平田端面を生かし縫辺部の間に細部調整を施す。	1.1g	安山岩 产地不明 同定№6	1945	西川-7
S 21	49	5	B-5-2	石縫	⑤ 10.3 ⑥ 4.0 ⑦ 2.2		細長い縫に両面からの打ち欠きにより縫掛け部をつくる。	120g	石英斑岩	1878	大角-80
S 22	49	5	B-4-4	石縫	⑤ 7.4 ⑥ 4.8 ⑦ 2.0		片面からの打ち欠きにより縫掛け部をつくる。	106g	粘晶片岩	1664	清水-175
S 23	49	5	C-4-3	石縫	⑤ 7.3 ⑥ 5.7 ⑦ 1.7		片面あるいは両面からの打ち欠きにより縫掛け部をつくる。	103g	石英斑岩	1812	清水-178
S 24	49	5	—	石縫	⑤ 4.8 ⑥ 3.7 ⑦ 1.1		片面あるいは両面からの打ち欠きにより縫掛け部をつくる。	25g	細粒状斑岩	2055	大角-81

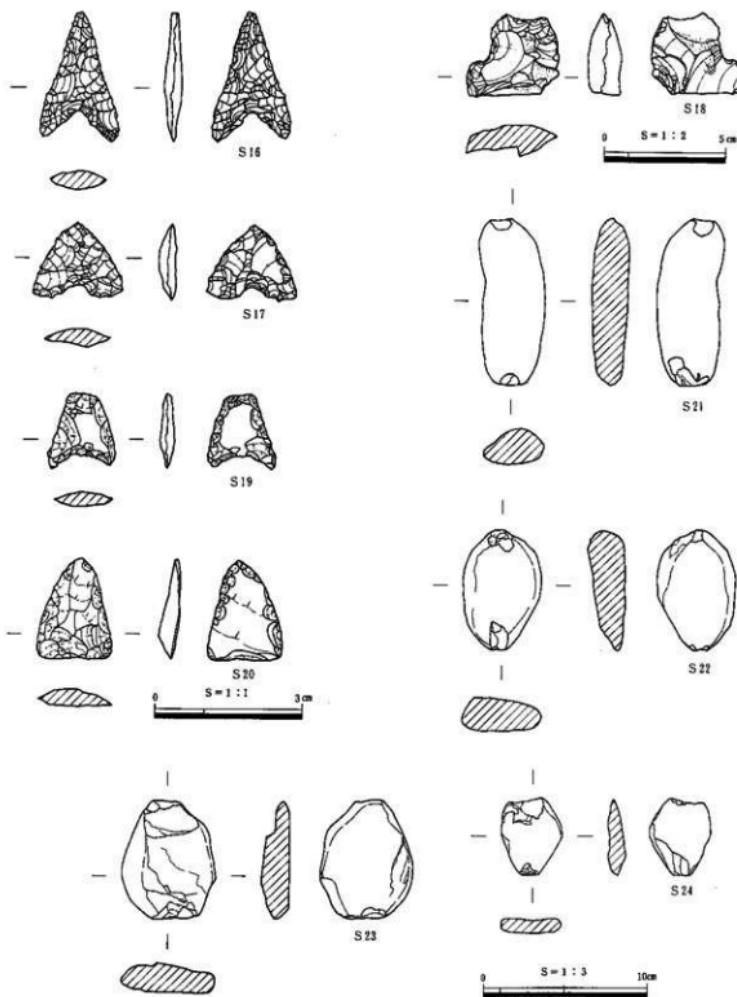
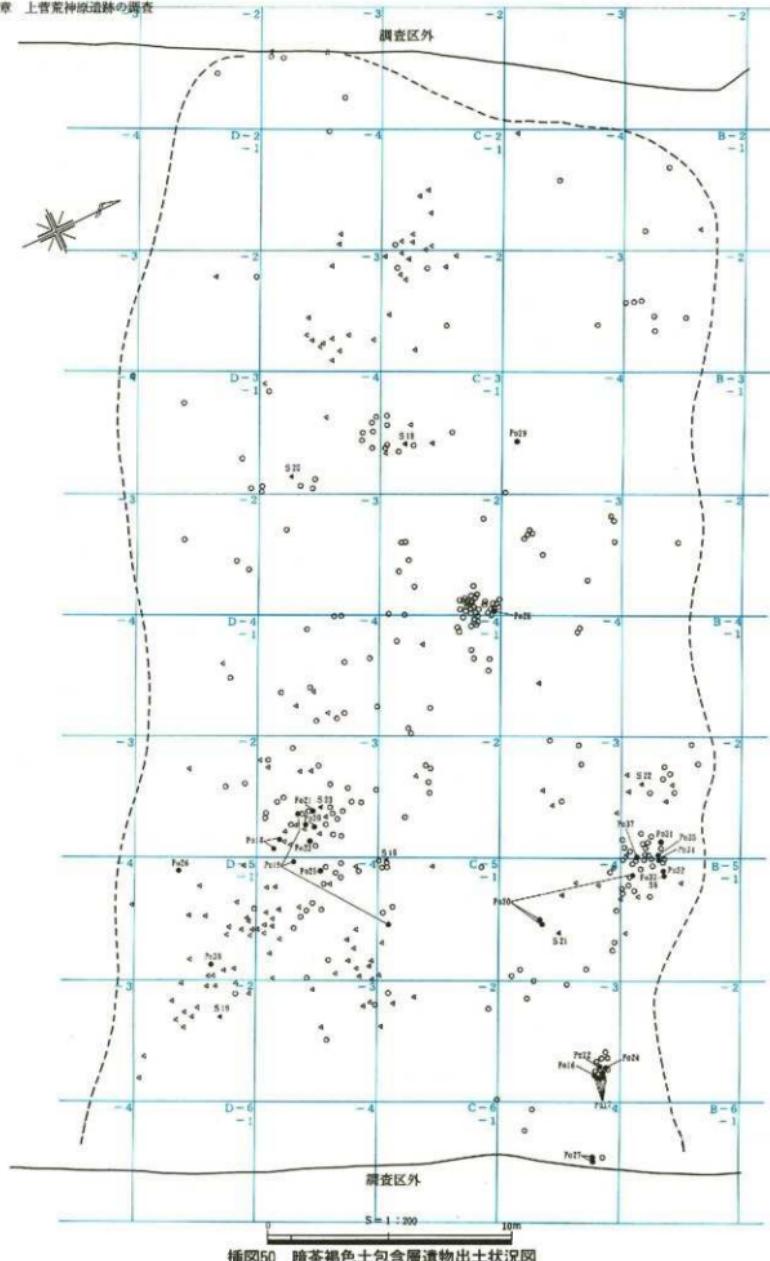


図49 暗茶褐色土包含層石器実測図

SD-01・02と同様に石器製作が行われていたと考えられ、SD-01・02も合わせ、剥片の出土した位置を第2造構面と考えたい。安山岩剥片も出土したが、製品を合わせても8点で集中した傾向はみられない。

弥生時代前期・中期の土器も出土している。B-4-4グリッドから弥生時代中期の土器が集中して出土しているが、これは弥生時代中期の土坑SK-15の付近からの出土である。陶磁器も1点出土しているがこれを含め黒色土包含層の掘り残しとみられる遺物が若干ある。これらのことから暗茶褐色土包含層の時期は概ね縄文時代早期と中期を中心としているといえよう。



挿図50 暗茶褐色土包含層遺物出土状況図

## 第8節 黒色土包含層

表土除去後、東西方向に帯状の黒色土包含層を検出した。基本的には真砂上であるが有機物を多量に含んでいる。断面はレンズ状に堆積しており、暗茶褐色土よりも範囲は広い。縄文時代早期～近代の陶磁器までの幅広い包含層である。

### 1. 縄文時代早期～後期（挿図51・52 挿表32・33 図版5・6）

縄文時代早期末～前期初頭の土器はPo40で、織維をわずかに含み屈曲部には貝殻による文様を施す。

縄文時代中期の土器は船元2～4式、里木2式とあり、暗茶褐色土と同じくB-5グリッド付近から集中して出土している。Po44は地文が撚糸であるが、沈線と貼り付けにより装飾を施す。窓み底Po48もみられる。

縄文時代後期前半の土器としていわゆる縁帶文系の土器が出土している。いずれも破片は大きく残りもよい。Po53～55は布勢式とみられるが、Po55は津雲A式・彦崎K1式の可能性もある。また後半のPo57の宮流式や凹縁文系の土器も出土しているがいずれも小片で点数も少ない。

### 2. 縄文時代晚期～弥生時代前期（挿図51・53～59 挿表32～34 図版6～10）

突帯文土器は黒色土包含層内だけ102点が出土した。突帯文土器を全て弥生時代の土器として理解するならば、当然器種について壺・甕などの分類を行うべきであるが、口縁部が内傾するいわゆる壺形とすべきものにも煤の付着痕があり、調整もナデを中心としてハケ目はみられず、焼成においても遠賀川系土器と区別が可能であるため弥生土器の名称は用いず深鉢として統一した。また出土土器の大半を占める体部片（突帯文土器の体部片の可能性もある）についても同様の理由で粗製土器としておく。

突帯文土器の分類にあたり、本来は器種、形態、手法の順に大分類から小分類を行うところであるが、いくつかの変更点がある。まず器種は口縁端部付近の小片が多数を占めるため、突帯の形状と位置についての分類を優先し、最後に口縁部の傾きによる器形の傾向をること。次に突帯に刻み目をもつか否かは当地における突帯文土器分類の重要な要素ではあるが、これを手法の一つとして解釈し、刻みの有無を割合として理解するという点である。次に具体的な分類基準について記すが、大きな破片を見る限り同一個体内にも口縁部の傾き、突帯の位置・形状・刻み目の間隔や深さなどには部分ごとに差が認められ、あくまでも大まかな傾向を示すに留まる。本遺跡出土の突帯文土器は全て1条突帯で、2条突帯は確認していない。接合方向は全て内傾接合である。なお分類基準の作成にあたり、家根分類（家根1981）と目久美遺跡の分類（濱田1998）を参考にした。また、分類毎の突帯の位置と高さについては考察「上菅荒神原遺跡の遺物と遺構」の図1に示した。

#### 分類

0類 端部付近に接する突帯をもつ。

I類 突帯が口縁端部よりもわずかに下がった位置に付く。口縁部と突帯を別々に成形する。

II類 突帯と口縁端部を同時に成形することにより口縁端部は外反する。突帯の位置は口縁端部に近い。

III類 突帯が口縁端部より大きく下がった位置に付く。突帯と口縁部は別々に成形される。

A類 突帯の断面形が半円状を呈する。口縁端部を押さえるものをA'とする。

B類 断面三角形の突帯。口縁端部を押さえるものをB'とする。

C類 断面下さがりの突帯をもつ。

D類 突帯が大きく突出する。

さらに刻み日の有無と口縁部の傾きにより細分される。刻みにはa工具により深い「V」字状の刻みを施すもの、b工具による切り目状の刻みを施すもの、c貝殻腹縁による刻みを施すものがみられる。刻みをもつものにはある程度傾向があり、I-A類では「V」字状の刻みをもつものが主流で、I-C類では貝殻腹縁による刻みを施すものが1点みられる。II類では無刻み日突帯が多いが、II-D類では少数ではあるが切り目状の刻み日をもつ。III類ではIII-A類に刻みをもつものが多い。

また突帯の形状と口縁端部までの長さにはある程度器種ごとにまとまりがみられる。断面が半円形の突帯A類

は口縁端部を押さえるⅠ類とⅡ類の一部があり刻み目はもたないが、Ⅰ～Ⅲ類には刻み口をもつものが多くみられる。断面三角形のB類はほぼ無刻み目突帯で、口縁部の形態や距離にかかわらずまとまりがあるように見える。下さがり突帯のC類は、口縁端部と突帯を同時に成形するⅡ類が多数を占め無刻み目突帯が多い。突帯が高いD類は少數であるが、切り目状の刻み目をもつものが多い。

以上のことから黒色土包含層内の突帯文土器の傾向をみると、大きな傾向として1. 突帯の位置が下がり、刻み目がV字状から切り目状の刻み目となる。2. 刻み目の有無は時期差よりも突帯文土器の多様性として考えておきたい。

口縁部の傾きは、①内傾するもの、②直立するもの、③外傾するもの、④外反するものがあり、①は体部上半が張り出し、②・③はやや緩やかに張り出すもの、④はそのまま窄まりながら底部に続くとみられるものに分けられるが、小片であるため全体の傾向をとらえることはできなかった。

次にこれを他地域の様相と比較してみると、突帯の位置が下がるのは西日本に一般的にみられる現象で、大まかに流れとしては合致している。Ⅰ類は近畿では長原、九州では夜臼並行の可能性があるが、これがⅠ・Ⅱ類あるいはⅢ類のどちらか、あるいは両方に並行するのかは不明である。また刻み目の有無であるが、刻み目をもつものは外来的な様相が強く、刻み目を持たないものは在地的な様相が強いとみられる。これらは突帯文土器成立期からある程度共存していたことが指摘されている（瀧田1998）。貝殻腹縁による刻み目を施すもの、大きく突出する突帯を貼り付け体部が大きく外側に張り出すもの、底部の接地面が大きく外側に突出しているものについては北部九州的な様相がうかがえよう。

遠賀川系土器には肩部に下側が低まる段をもつ壺の肩部Po174や、口縁端部に刻み目をもつ体部に3本の沈線をもつ壺Po181などがあるが、全体的に在地色が強い。文様としては木葉文・重弧文・斜格子文などがみられ、遠賀川式土器によくみられるモチーフが多く用いられる。これらの時期は概ね弥生時代前期後葉頃とみられ、中葉までは遅らないものと考えられる。したがって遠賀川系土器については時期の幅は少ないものと考えたい。

本遺跡では突帯文土器と遠賀川系土器の良好な一括資料はみられないが、土坑内においては遠賀川系土器と粗製土器としている体部片がともに出土しており、実測可能な口縁部点数をみても分かるようにこの粗製土器としているものの中には突帯文土器の体部片がかなり含まれていることが予想できる。したがって土坑内の資料を積極的に評価すれば、弥生時代に突帯文土器が使用されていたとも考えられる。また突帯文土器と遠賀川系土器の胎土分析を行ったが、どちらも胎土に火山ガラスを含み、在地の材料で焼かれたものという結果が得られている。詳細については考察に「上菅荒神原遺跡出土十器の胎土分析」として掲載されている。

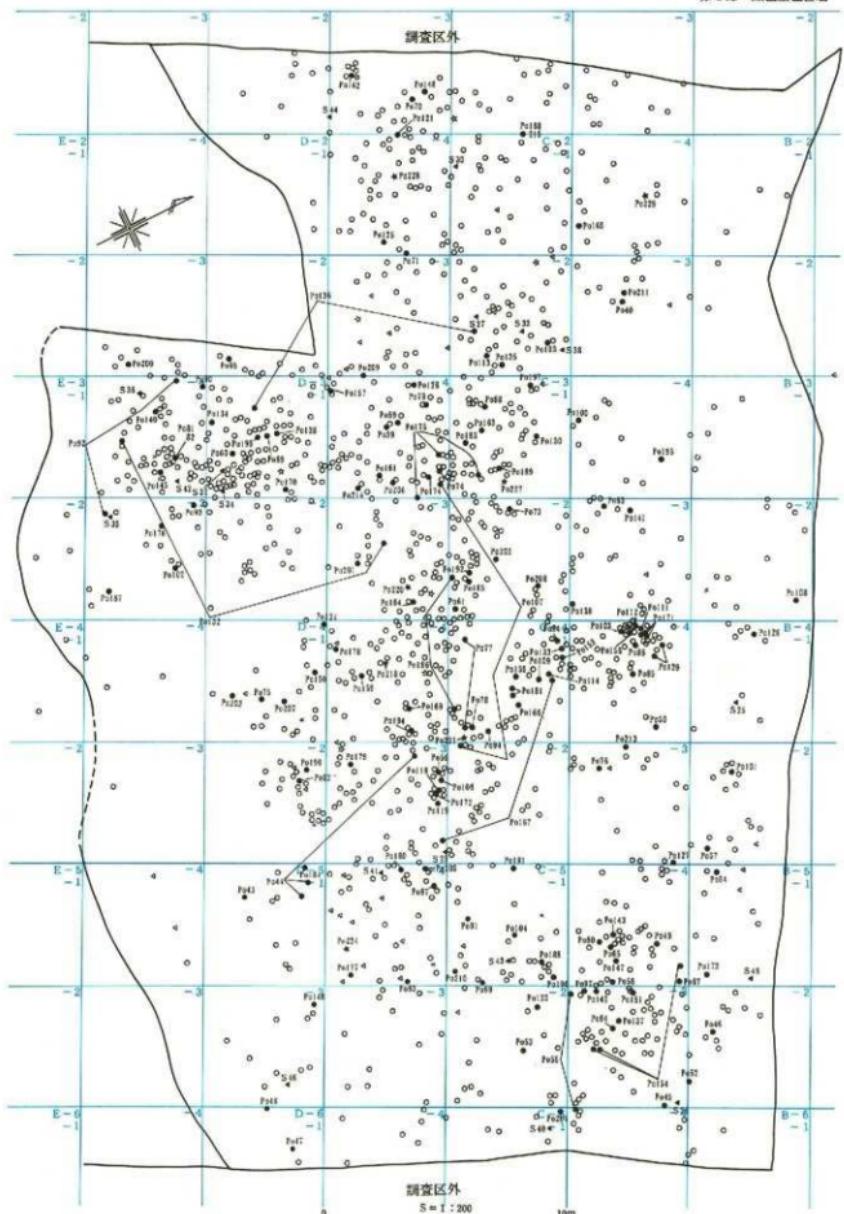
このように本遺跡出土の突帯文土器と遠賀川系土器は形態・手法において分類可能であるもののこれはあくまでも技術的な差に留まり、出土状況をみるとかぎり共伴している可能性が高いとみられる。ただし突帯文土器にはある程度の時期幅が想定されており、新しい様相をもつてみる遠賀川系土器が伴うことが予想される。

まとめると、本遺跡出土の突帯文土器は瀬戸内よりもむしろ北部九州との共通性が見いだされ、在地的な要素の強い突帯文土器から遠賀川系土器にかけてある程度継続的に北部九州の影響を受けていたことが指摘できる。この北部九州からの影響は水系の造り出す平野帯にある程度の傾向が想定され、日野川下流の米子平野地域からの傾向が及んだものと推察したい。

また本遺跡出土の突帯文土器は弥生時代の上器の可能性があるものの、その形態・手法においてはあくまでも繩文土器の延長上にあり、土器としては繩文土器（粗製土器）と突帯文土器の区別はできないが、遠賀川系土器との区別は可能である。したがって弥生時代の上器であるとしても突帯文土器から弥生前期土器の過渡期に相当する、繩文色の強い土器ということができよう。

## 参考文献

- 家根祥多 1981 「近畿地方の土器」『繩文土器の研究』4 雄山閣  
瀧田竜彦ほか 1998 『山久美遺跡V・VI』 財団法人 米子市教育文化事業団



挿図51 黒色土包含層遺物出土状況図

播表32 黒色土包含層土器觀察表

遺物番号 及 文書番号	遺物名	種類	法量 (cm)	形態上の特徴 外・面・裏	内部調整	内面部調	外面部調	地土・焼成	取上№	備考	実測値
Po 39 52 5	C-3-2 縄文早期 深鉢	①△ 4.8	斜め後傾方向に幅広の側溝を施す。 底面のくぼみに焼付を。	傾き方向の側溝ナダ ク。	灰褐色 2.5YR 6/2	に付い黄褐色 10YR 7/3	W(縦縫の量 は多くない)・ 良	1263	播磨上型 変形式か	清水-144	
Po 40 52 5	B-2-3 縄文早期 深鉢	①△ 1.9	口縁部付近の縦曲筋、傾き方向の傾 いた底のくぼみがわざかに残る。 底面には方角の形況文様の施しを とする。	底面部上下ともに粗 い斜め方向のナダ。	褐色 2.5YR 3/2	黄褐色 2.5YR 5/1	青(縦縫の量 は少ない)・ 良	1051	播磨土器 一重脚ト 肩式。	清水-187	
Po 41 52 5	— 縄文中期 深鉢	①△ 5.2 ②第17.5	口縁部がやや外傾する。擦りの粗 いた底のくぼみは焼成時に施す。 器底は比較的厚い。	口縁部内に内傾面を もち、斜め方向の傾 きを施す。体部傾力 のナダ。	に付い黄褐色 10YR 5/4	に付い黄褐色 10YR 5/4	青(1 mm大の 凹凸を含む)・ 良	413	船元4式 3式	清水-49	
Po 42 52 5	— 縄文中期 深鉢	①△ 2.4	比較的細い2段のR.L.縄文を模方 間に施す。底面は8~9 mm厚い。	傾き方向のナダ。	褐色 5YR 6/8	褐色 5YR 6/8	青・良好	61	船元4式	清水-188	
Po 43 52 5	D-5-1 縄文中期 深鉢	①△ 1.8 ②第22.0	口縁部端部はやや内傾する。粗筋L. の縄文を斜め方向に施す。	口縁部端部内面には筋 ではなく、斜め方向の ナダ。	に付い黄褐色 10YR 7/2	に付い黄褐色 10YR 7/2~ 7/3	青・良好	431	船元式併 行か	大角-59	
Po 44 52 6	D-5-1 C-4-3 縄文中期 鉢	①△ 9.0 ②第30.6	1段目は内傾する。傾き方向を 水平へ放散し括り立つ。その上に より付けて平行する。底のくぼ みは水平方向に施される文様である。 底面は経年風化の1段目の無文。 底面下半は斜め方向の無文。	口縁部端部は傾き方 向のナダが施され、傾 き方向のナダ。	赤褐色 5YR 6/6	赤褐色 5YR 6/6	青(1 mm大の 石突を含む)・ 良好	9 61 79 80 428 522	里木2式 併行	清水-198	
Po 45 52 5	B-6-2 縄文中期 深鉢	①△ 3.1	器の粗い1段の無文を模方 間に施す。	傾き方向の粗いナダ。	に付い黄褐色 2.5YR 5/3	灰褐色 2.5YR 4/1	青(1 mm大の 砂粒を多く含む) ・良好	1512	里木2式	清水-154	
Po 46 52 5	B-5-4 縄文中期 深鉢	①△ 3.7	底部附近。1段2の無文が斜 め方向に交互に重なる。	斜め方向のナダ。	に付い黄褐色 10YR 6/4~ 7/3	に付い黄褐色 10YR 6/4~ 7/3	青(1 mm大の 砂粒を多く含む) ・良好	862	里木2式	清水-129	
Po 47 52 5	D-6-1 縄文中期 深鉢	①△ 2.8	底部附近。1段2の無文が基本 で施されるが、一部に砂粒を引きする 現象あり。	斜め方向の比較的丁 寧なナダ。	褐色 5YR 6/6~ 7/3	に付い赤褐色 5YR 5/3	青(1 mm大の 石突を含む)・ 良好	457	里木2式	清水-153	
Po 48 52 5	D-6-1 縄文中期 深鉢	①△ 1.8 ③第 6.6	くぼみ底。底辺まで1段2の無 文を施す。	底面は放射状、立ち 上がりは斜め方向の 丁寧なナダ。	褐色 5YR 6/6	に付い黄褐色 10YR 6/3	青(1 mm大の 砂粒を多く含む) ・良好	1179	里木2式	清水-19	
Po 49 52 5	B-5-2 縄文中期 深鉢	①△ 1.8	器の粗い2段のR.L.縄文を模 方間に施す。	傾き方向のナダ。	明赤褐色 5YR 6/6	赤褐色 5YR 6/6	青(1 mm大の 砂粒を含む)・ 良好	1317	船元4式 3式	清水-187	
Po 50 52 5	H-4-3 縄文中期 深鉢	①△ 2.9	比較的圓潤のまる2段のR.L.縄 文を模方間に施す。	横または斜め方向の ナダ。	褐色 7.5YR 6/6	褐色 7.5YR 6/6	青(1 mm大の 砂粒を多く含む) ・良好	34	船元4式	清水-148	
Po 51 52 5	— 縄文中期 深鉢	①△ 3.0	縦目の詰まる2段のR.L.縄文を模 方間に施す。	横または斜め方向の ナダ。	灰褐色 10YR 6/2~ 7/4	に付い黄褐色 6YR 6/8	青(1 mm大の 砂粒を多く含む) ・良	67	船元式	清水-150	
Po 52 52 6	B-5-4 縄文後期 深鉢	①△ 2.4	焼鉢で火焔、細い無筋Lの無文 を施す。	傾き方向の粗いナダ。	黄褐色 2.5YR 5/3	黄褐色 2.5YR 5/3~ 7.5YR 6/6	青(0.5~1 mm の大砂粒を含む) ・良	809	後期前業 中深式併 行か	清水-154	
Po 53 52 6	C-5-4 縄文後期 深鉢	①△ 7.0	縦文文系の起始部。円状の押り出 しと斜め付近に施す。器底は斜め 方向のくぼみが施される。合併部 下付近には斜め方向のくぼみが ある。	内面はナダ。外面に ついても無文の状態 だけが生じてある。 柱状は一部斜め方向に いく。	褐色 7.5YR 6/6	褐色 7.5YR 6/6	青(0.5~1 mm の大砂粒を多く 含む)・良 好	366	山勢式か	清水-195	
Po 54 52 6	B-5-1 縄文後期 底口土器	①△ 6.8	口縁上部で、下側の複合部付近で 2本の沈縫がみられる。沈縫の下 には横筋の一部が確認できる。傾 き方向のミガキを丁寧に施す。合併 部下付近にこくわざに焼付を。	指標印またはナダ。 焼付が目立つ。	褐色 7.5YR 6/6	褐色 7.5YR 6/6	青(1 mm大の 砂粒を含む) ・良好	1323	布勢式か	清水-197	
Po 55 SE 5	B-5-3 H-6-2 縄文後期 深鉢	①△ 2.1	傾き方向の粗いナダ後傾方向の細 な条痕を施す。	口縫端部からやや下 に付いた焼付に貼り付 けるよう開口があり、 その内側には斜め 凹状のくぼみがある。 口縫端部には斜 め方向をもつ2段R. L.の縄文を施す。	明黄褐色 10YR 7/6	明赤褐色 5YR 6/8	青(2~4 mm の大砂粒を含む) ・良好	847 1385	布勢式	清水-8	
Po 56 52 5	C-4-3 縄文後期 深鉢	①△ 1.9	口縫端部は内傾する。水平に口縫 間に開口のくぼみがあり、その 内側を施す。沈縫より下側に 保付を。	傾き方向のナダ。	に付い黄褐色 10YR 7/4	に付い黄褐色 10YR 7/4	青・良好	1223	縄文後期 か	清水-84	
Po 57 52 5	B-4-4 縄文後期 深鉢	①△ 1.7	凹縫文系。幅約5~6 mmの凹縫が 2段以上認められる。	傾き方向のナダ。	黒褐色 2.5YR 7/1	黒褐色 2.5YR 7/2	青(1~3 mm の大砂粒を含む) ・良	1361	縄文文系 宮崎式	清水-195	

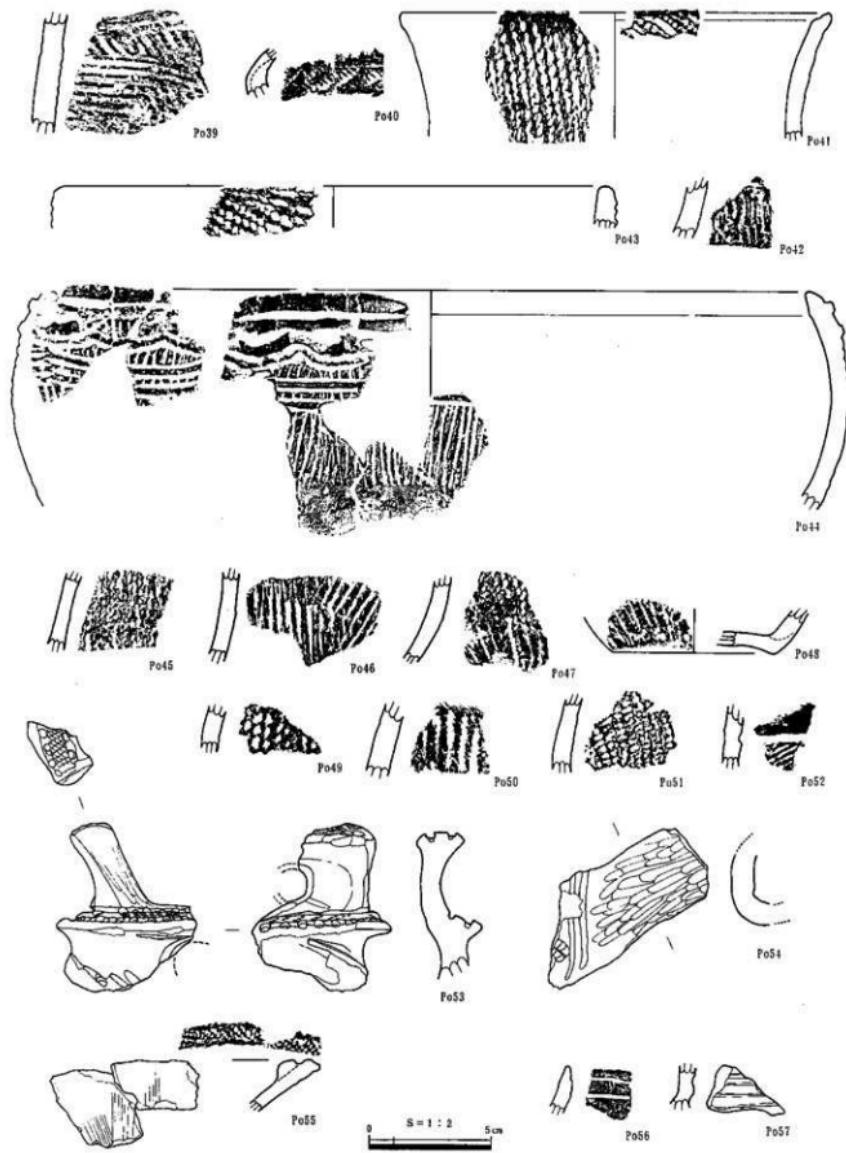
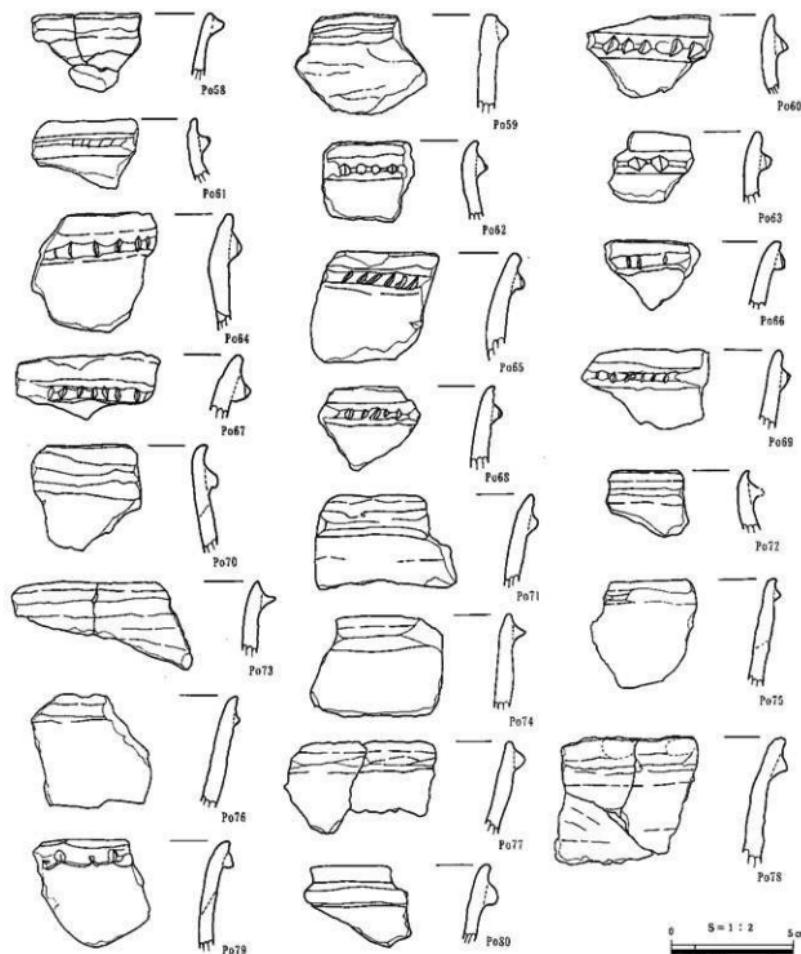


図62 黒色土包含層土器実測図(1)

遺跡名	遺構名	種類	法量 (cm)	形態上の特徴 外面 裂隙	内面調査	内面色調	外面色調	胎土・焼成	取・七七	備考	実測者名
Po 56 53 6	B-5-3	突唇文 深鉢	①△ 2.5	L型縫隙部は外側し押さええる。端部に接する半円形の無割み口突をもつ。	横・斜め方向のナデ。	明黄褐色 10YR5/6	にぶい黄褐色 10YR7/4	赤・良	844	O-A類 胎土分析 No.4	大角-52
Po 59 53 6	C-3-2	突唇文 深鉢	①△ 3.8	L型縫隙部は外側し押さええる。端部に接する半円形の無割み口突をもつ。以下横方向のナデ。	横・斜め方向の比較的直いナデ。	にぶい黄褐色 10YR5/3	明褐色 7.5YR5/6	赤(2~5mm の石英を含む) ・良	717	O-A類 胎土分析 No.4	大角-40
Po 60 53 6	D-3-1	突唇文 深鉢	①△ 3.2	L型縫隙部は外側し尖る。半円形の無割み口突をもつ。以下横方向のナデ。	横方向の直いナデ。 あるいは垂直か。	橙色 7.5YR7/6	にぶい黄褐色 10YR7/4	赤(6mm大 の砂粒を含む) ・良好	1243	I-A類 清水-42	
Po 61 53 6	C-3-4	突唇文 深鉢	①△ 2.4	L型縫隙部は外側し尖る。半円形の突唇にごく直い切り込み状の目を施す。以下横方向のナデ。	横方向のナデ。	にぶい黄褐色 10YR5/4	にぶい黄褐色 10YR5/4	赤・良	1560	I-A類 清水-87	
Po 62 53 6	D-4-4	突唇文 深鉢	①△ 3.1	L型縫隙部は外側し面取り気味に尖る。半円形の突唇に直いV字形の目を施す。以下横方向のナデ。	横方向のナデを輪郭 4~5mmの帶状に施す。	明赤褐色 2.5YR5/6	橙色 7.5YR5/6~ 2.5YR	赤(1~3mm の砂粒を含む) ・良好	424	I-A類 清水-70	
Po 63 53 6	B-3-3	突唇文 深鉢	①△ 2.9	L型縫隙部は外側し尖る。半円形の突唇にごく直い切り込み状の目を施す。以下斜め方向のナデ。	横方向の比較的直い ナデ。	明黄褐色 10YR7/6	明褐色 5YR5/6	赤(1~3mm の石英を含む) ・良	1155	I-A類 胎土分析 No.2	清水-71
Po 64 53 6	B-5-3	突唇文 深鉢	①△ 4.8	L型縫隙部は外側し尖りやすい。やや波状の突唇に直いV字形の目を施す。以下横方向のナデ。	横方向の比較的直い ナデ。	褐色 7.5YR6/6	明褐色 10YR6/6	赤・良好	871	I-A類 胎土分析 No.6	大角-22
Po 65 53 6	B-6-2	突唇文 深鉢	①△ 4.1	L型縫隙部は外側し尖る。半円形の突唇にごく直い切り込み状の目を施す。以下横方向のナデ。	斜め方向の比較的丁寧なナデ。	にぶい赤褐色 5YR6/6	にぶい赤褐色 5YR6/6	赤(1~2mm の砂粒を多く 含む)・良	829	I-A類 胎土分析 No.8	清水-41
Po 66 53 6	—	突唇文 深鉢	①△ 2.7	L型縫隙部は外側し尖る。半円形の突唇にごく直い切り込み状の目を施す。以下横方向のナデ。	横方向のナデ。	にぶい黄褐色 10YR5/4	にぶい黄褐色 10YR6/4	赤・良好	413	I-A類 大角-43	
Po 67 53 6	B-5-3	突唇文 深鉢	①△ 2.6	L型縫隙部は外側し尖る。半円形の突唇にごく直いV字形の目を施す。以下横方向のナデ。	横方向の比較的直い ナデ。	にぶい褐色 7.5YR6/6	にぶい褐色 7.5YR6/4	赤・良好	841	I-A類 大角-24	
Po 68 53 6	—	突唇文 深鉢	①△ 3.3	L型縫隙部は外側し尖る。半円形の突唇にごく直い切り込み状の目を施す。以下横方向のナデ。	横方向の比較的直い ナデ。	にぶい黄褐色 10YR7/3	にぶい黄褐色 10YR7/3	赤(1~3mm の石英を多く 含む)・良	271	I-A類 清水-67	
Po 69 53 6	—	突唇文 深鉢	①△ 3.2	L型縫隙部は外側し尖る。やや直上がるの突唇に直いV字形の目を施す。以下横方向のナデ。	横または斜め方向の 比較的丁寧なナデ。	にぶい黄褐色 10YR7/3	にぶい黄褐色 10YR7/3~ 2.5YR7/6	赤(1~2mm の石英を多く 含む)・良	271	I-A類 清水-69	
Po 70 53 6	C-1-3	突唇文 深鉢	①△ 4.4	L型縫隙部は外側し尖る。半円形状の無割み口突をもつ。以下横方向のナデ。	横方向の直いナデ。 内傾融合合あり。	にぶい黄色 2.5YR 4~ 5YR7/8	褐色 7.5YR7/6	赤(1~2mm の石英を含む) ・良	763	I-A類 清水-36	
Po 71 53 6	C-2-3	突唇文 深鉢	①△ 3.7	L型縫隙部は外側し尖る。半円形状の無割み口突をもつ。以下横方向のナデ。	横方向の比較的直い ナデ。	明赤褐色 2.5YR6/6	明褐色 5YR5/6	赤(1~2mm の石英を含む) ・良	741	I-A類 清水-44	
Po 72 53 6	—	突唇文 深鉢	①△ 2.5	L型縫隙部は外側し尖る。三角形状の無割み口突をもつ。以下横方向のナデ。	横方向のナデ。	浅黄色 2.5YR7/3	明褐色 10YR7/6	赤・良	271	I-B類 大角-36	
Po 73 53 6	C-3-4	突唇文 深鉢	①△ 3.0	L型縫隙部は外側し尖る。端部近くに三角形の直い無割み口突をもつ。以下横方向のナデ。	横方向の丁寧なナデ。	にぶい黄褐色 10YR7/4	にぶい黄褐色 10YR7/2	赤・良好	1190	I-B類 もししくは O-B類	大角-34
Po 74 53 6	C-3-2	突唇文 深鉢	①△ 3.8	L型縫隙部は直立し尖る。端部近くに三角形の直い無割み口突をもつ。以下横方向のナデ。	横方向のナデ。	にぶい黄褐色 10YR6/3	灰褐色 2.5YR 1~ 2.5YR4	赤(1~2mm の砂粒を含む) ・良好	709	I-B類 もししくは O-B類 胎土分析 No.24	清水-86
Po 75 53 6	D-4-1	突唇文 深鉢	①△ 4.4	L型縫隙部は外側し尖る。三角形の小さな無割み口突をもつ。以下横方向のナデ。	横方向のナデ。	にぶい黄褐色 10YR7/4	にぶい黄褐色 10YR7/4	赤(1~2mm の砂粒を含む) ・良好	95	I-B類 清水-66	
Po 76 53 6	B-4-3	突唇文 深鉢	①△ 4.6	L型縫隙部は外側し尖る。三角形の小さな無割み口突をもつ。以下横方向のナデ。	剥落のため不明。	浅黄色 2.5YR7/3	浅黄色 2.5YR7/3	赤(2~5mm の砂粒を含む) ・良好	906	I-B類 人井-33	人井-33
Po 77 53 6	C-4-1	突唇文 深鉢	①△ 3.7	L型縫隙部は直立し尖る。端部近くに三角形の直い無割み口突をもつ。以下横方向のナデ。	横方向の比較的直い ナデ。	明褐色 5YR6/6	褐色 7.5YR6/6	赤(2~3mm の石英を含む) ・良好	941	I-B類 あるいは O-B類	人井-25
Po 78 53 6	C-4-1	突唇文 深鉢	①△ 5.2	L型縫隙部は直立し尖る。二角形の無割み口突をもつ。以下横方向のナデ。	横方向の直いナデ。	明褐色 5YR6/6~ 褐色 5YR6/1	褐色 7.5YR6/1	赤(2~3mm の石英を含む) ・良好	943	I-B'類 大角-26	



插図53 黒色土包含層土器実測図(2)

遺物番号 測定番号	遺物名	縦 幅 cm	横 幅 cm	形態上の特徴 外 面 内 面 側	内面調整	内面色調	外面部調	胎土・焼成	取上地	備 考	実測値 %
Po 79 53 6	C-3-2 実際文 深鉢	① △ 4.3		口縁部は外反し丸い。下さがりの突起に凹痕状による割込みを施す。以下横方向のナメ。	横または斜め方向のナメ。	黒褐色 10YR6/6	褐色 7.5YR6/6	密・良	1938	I-C級 胎土分析 No.23	清水-55 胎土分析 No.23
Po 80 53 7	B-5-2 実際文 深鉢	① △ 3.1		口縁部は外反し丸い。半円形状の無割込み凹痕をもつ。以下横方向のナメ。	横または斜め方向のナメ。	褐色 SYR6/8	明褐色 10YR7/6~ 10YR7/8	密(1~3 mm の大粒の石英を含む)・良	826	II-A級	清水-55

遺跡番号	遺跡名	基準	法量 (cm)	形態上の特徴 外面 裂 痕	内面調査	内面色調	外面色調	土色・焼成	上色:	備考	実測値
Po 81 54 ?	D-3-2	突唇文 溝跡	①△ 4.2 ③第34.	口縫端部は直立し外側に尖る。半円形の無割み目突窓をもつ。以下横方向のナデ。	端部付近を強く横にナデる。以下横方向の無割み目突窓をもつ。以下横方向のナデ。	明赤褐色 10YR7/6	褐色 5YH6/6~ 6/8	赤(1~2 mm の石英を含む)・良好	14 413	Ⅱ-A類 粘土分析 No.14	清水-35
Po 82 54	D-3-2	突唇文 溝跡	①△ 2.3	口縫端部は直立し外側に尖る。半円形の無割み目突窓をもつ。	端部付近を強く横にナデる。以下横方向のナデ。	明赤褐色 7SYR5/6	褐色 7SYR5/6	赤・良好	14	Ⅱ-A類	清水-57
Po 83 54 ?	C-5-3	突唇文 溝跡	①△ 6.0	口縫端部は直立し尖る。半円形の無割み目突窓をもつ。以下横方向のナデ。	横方向の比較的丁寧なナデ。	褐色 7SYR4/1~ 6/6	褐色 6YH6/6	赤(2~4 mm の石英を含む) ・良好	466	Ⅱ-A類	大舟-32
Po 84 54 ?	C-4-1	突唇文 溝跡	①△ 2.7	口縫端部は外反し厚える。半円形の無割み目突窓をもつ。以下横方向のナデ。	横方向の粗いナデ。	明赤褐色 5YR5/6	褐色 5YR5/6	赤(1~2 mm の石英を含む) 一部4 mmの 網目)・良好	974	Ⅱ-A'類 粘土分析 No.15	清水-48
Po 85 54 ?	B-4-2	突唇文 溝跡	①△ 2.8	口縫端部は直立し押さえる。半円形の無割み目突窓をもつ。以下横方向のナデ。	横方向の筋状のナデ。	褐色 5YR8/6	褐色 5YR4/1~ 6/4	赤・良好	987	Ⅱ-A'類 粘土分析 No.16	大舟-27
Po 86 54 ?	B-4-2	突唇文 溝跡	①△ 2.3	口縫端部は直立し厚える。半円形の無割み目突窓をもつ。	横方向のナデ。	黒褐色 5YR3/1~ 4/4	黒褐色 5YR3/1~ 4/4	赤(1~2 mm の砂粒を含む) ・良好	963	Ⅱ-A'類	清水-47
Po 87 54	C-5-2	突唇文 溝跡	①△ 5.0	口縫端部はやや内傾し尖る。三角形の無割み目突窓をもつ。以下横方向の比較的粗いナデ。	端部付近を横にナデる。突窓の裏側が残る。端部に粗い網目くびれがある。	褐色 7SYR6/6	に赤褐色 7SYR5/4	赤(1 mm前後 の砂粒を含む) ・良好	485	Ⅱ-B類 粘土分析 No.13	清水-39
Po 88 54 ?	C-3-1	突唇文 溝跡	①△ 5.3	口縫端部はやや内傾し尖る。三角形の無割み目突窓をもつ。	端部付近を横にナデる。以下横方向の無割み目突窓。	に赤褐色 10YR6/3~ 7/3	に赤褐色 10YR6/3~ 7/3	赤(1 mm前後 の砂粒を含む) ・良好	1085	Ⅱ-B類 粘土分析 No.13	清水-30
Po 89 54 ?	D-3-1	突唇文 溝跡	①△ 3.9	口縫端部はやや内傾し外側に尖る。三角形の無割み目突窓をもつ。以下横方向のナデ。	端部付近を横にナデる。以下横方向の比較的粗いナデ。	に赤褐色 7SYR6/4	に赤褐色 7SYR6/4	赤(2~4 mm の石英を含む) ・良好	641	Ⅱ-B類	清水-33
Po 90 54 ?	D-3-2	突唇文 溝跡	①△ 3.4	口縫端部は外反し尖る。三角形の無割み目突窓をもつ。以下横方向の比較的粗いナデ。	端部付近を横にナデる。以下横方向の比較的粗いナデ。	に赤褐色 5YR4/4	に赤褐色 7SYR6/8	赤・良好	646	Ⅱ-B類	大舟-37
Po 91 54 ?	C-5-1	突唇文 溝跡	①△ 2.7	口縫端部は外反し外側に尖る。三角形の無割み目突窓をもつ。以下横方向のナデ。	端部付近を横に強くナデする。以下横方向の無割み目突窓。	褐色 2.5YR6/8	褐色 2.5YR6/8	赤・良好	811	Ⅱ-B類 粘土分析 No.11	清水-56
Po 92 54 ?	D-3-3	突唇文 溝跡	①△ 6.7	口縫端部は直立し尖る。三角形の無割み目突窓をもつ。	端部付近を横にナデする。以下横方向のナデ。	褐色 7SYR5/6	褐色 7SYR5/6	赤(1~2 mm の大粒の石英を含む) ・良好	581 882 No.10	Ⅱ-B類 粘土分析 No.10	清水-50
Po 93 54 ?	D-3-3	突唇文 溝跡	①△ 6.9	口縫端部は直立し尖る。三角形の無割み目突窓をもつ。以下横方向のナデ。	端部付近を横にナデする。以下横方向のナデ。	褐色 7SYR6/6	褐色 7SYR6/6	赤・良好	575	Ⅱ-B類 粘土分析 No.12	大舟-28
Po 94 54 ?	C-4-1	突唇文 溝跡	①△ 3.0	口縫端部は外反し尖る。三角形の無割み目突窓をもつ。以下横方向のナデを強め。	横方向の比較的丁寧なナデ。	オラリエ褐色 7SYR3/1	に赤褐色 10YR6/4	赤・良	936	Ⅱ-B類	清水-62
Po 95 54 ?	D-2-4	突唇文 溝跡	①△ 2.8	口縫端部は直立し外側に尖る。三角形の無割み目突窓をもつ。以下横方向のナデ。	端部付近を横にナデする。以下横方向の筋状のナデ。	灰褐色 7SYR4/2	褐色 10YR4/1	赤・良好	666	Ⅱ-B類	大舟-28
Po 96 54 ?	-	突唇文 溝跡	①△ 2.3	口縫端部は直立し尖る。三角形の無割み目突窓をもつ。	横方向の比較的粗いナデ。	明赤褐色 5YH6/6	褐色 5YH5/1~ 5/6	赤・良好	67	Ⅱ-B類	清水-60
Po 97 54	B-5-3	突唇文 溝跡	①△ 2.7	口縫端部は直立し尖る。三角形の無割み目突窓をもつ。	斜め方向の丁寧なナデ。	褐色 7SYR7/6	褐色 7SYR7/6	赤・良	846	Ⅱ-B類	大舟-51
Po 98 54 ?	-	突唇文 溝跡	①△ 3.3	口縫端部はやや内傾し尖る。三角形の無割み目突窓をもつ。	横または斜め方向の丁寧なナデ。	に赤褐色 7SYR6/3	灰褐色 7SYR6/2	赤・良好	69	Ⅱ-B類	大舟-39
Po 99 54 ?	C-5-4	突唇文 溝跡	①△ 4.5	口縫端部は直立し尖る。下さり唇の裏側に大きな無割み目突窓をもつ。端部は薄い。実唇および体部には薄く保有。	横または斜め方向の丁寧なナデ。	褐色 7SYR7/6	褐色 7SYR7/6	赤・良好	796	Ⅱ-B類	大舟-38
Po 100 54 ?	H-3-2	突唇文 溝跡	①△ 4.5	口縫端部は直立し外側にわざわざに記述する。下さり唇の裏側に大きな無割み目突窓をもつ。端部は薄い。実唇および体部には薄く保有。	端部付近を横にナデする。以下横方向の筋状のナデ。	に赤褐色 10YR7/4	に赤褐色 SYR6/4	赤・良好	1143	Ⅱ-C類 粘土分析 No.21	大舟-21
Po 101 54 ?	B-4-4	突唇文 溝跡	①△ 4.0	口縫端部は直立し尖る。下さり唇の裏側に大切な無割み目突窓をもつ。端部は薄い。実唇および体部には薄く保有。	端部付近を横にナデする。以下横方向の筋状のナデ。	に赤褐色 10YR7/4	褐色 7SYR6/6	赤(1~2 mm の砂粒を多く 含む)・良好	898	Ⅱ-C類	大舟-45
Po 102 54 ?	D-3-3	突唇文 溝跡	①△ 3.8	口縫端部は直立し尖る。下さり唇の裏側に大切な無割み目突窓をもつ。以下横方向のナデ。	端部付近を横にナデする。以下横方向のナデ。	に赤褐色 10YR7/3	に赤褐色 10YR7/3	赤・良	966	Ⅱ-C類	清水-63

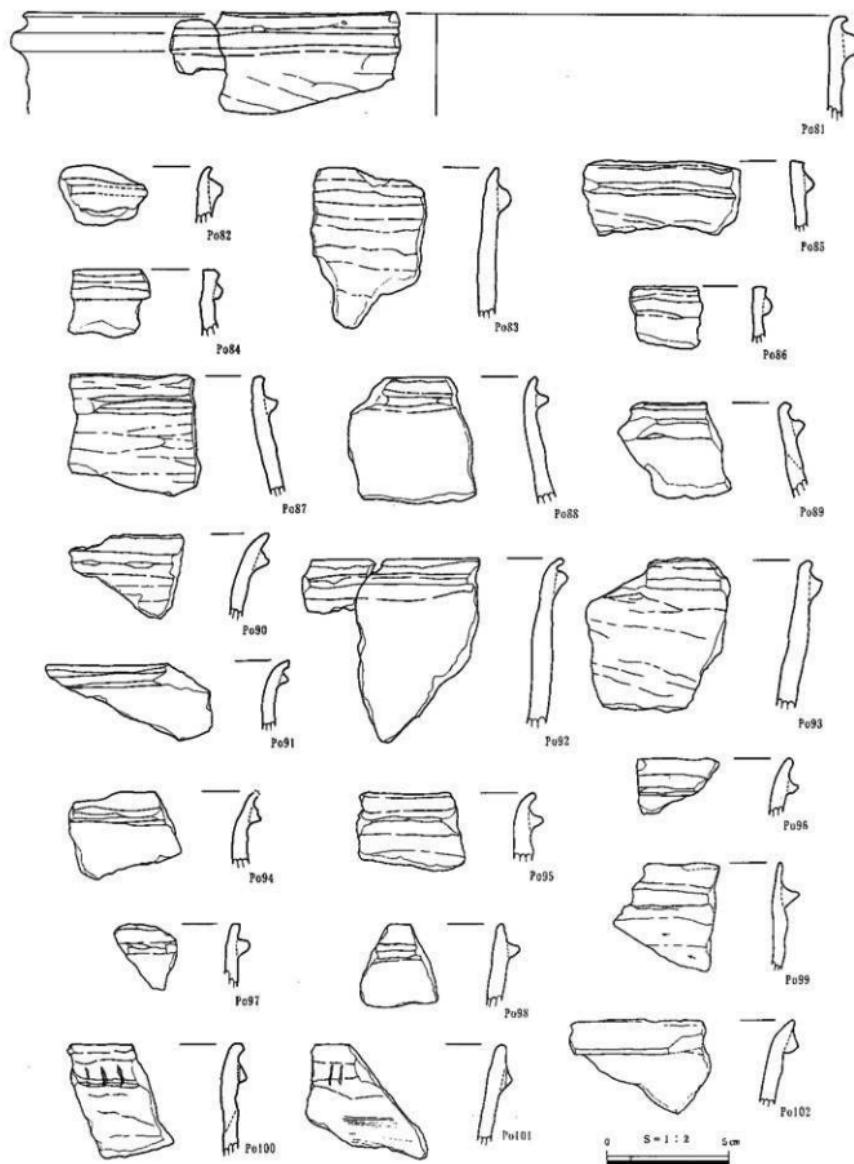


插图54 黑色土包含磨土器实测图(3)

插表33 黒色土包含層出土遺物一覧表

	A3 -2	B1 -3	B2 -1	B3 -2	B4 -3	B5 -4	B6 -5	C1 -6	C2 -7	C3 -8
	-3	-1	-2	-3	-4	-1	-2	-3	-4	-3
織文早期										
織文中期		1				1	1	4	2	1
織文後期		1				3	1	1	1	
織文後期										1
突 布 文				1	3	1	1	7	1	1
精 製 器						1		3	6	1
粗 製 器	1	8	2	11	7	2	3	6	22	14
弧形前縫器							9	48	9	11
弧形後縫器	1	1	3				8	33	49	10
弧形中期							1	1	3	1
弧形後期	1	1	2	4			1	4		
須 恵 器							2	7	19	17
陶 器							26	40	17	34
							6	3	1	8
							1	2	1	4
							1	2	1	11
							1	2	1	3
							1	2	1	10
							1	2	1	2
黒 磷	1						1	1	1	1
石 製 品							1	1	1	1
鐵 関 係							5	3	2	1
							1	1	1	1
							1	1	1	1

	C4 -1	C5 -2	C6 -3	D1 -4	D2 -5	D3 -6	D4 -7	D5 -8	D6 -9	E3 -10	E4 -11	合計
	-2	-3	-4	-1	-2	-3	-4	-1	-2	-3	-4	
織文早期												2
織文中期												0.1%
織文中期												1
織文後期		1	3									0.1%
織文後期		1										21
織文後期												1.4%
織文後期												12
織文後期												0.5%
突 布 文												0.0%
精 製 器												0.5%
粗 製 器	7	1	3	3	3	4	1	3				103
粗 製 器	1											4
弧形前縫器	44	53	58	31	16	25	10	11	6	7	6	72.0%
弧形前縫器	14	9	5	5	5	1	1	1	7	2	2	118
弧形中期	4	10	2	5	11	3	1	1	2	1	2	144
弧形中期												9.4%
弧形後期												3
須 恵 器	3	1	1	1								2
陶 器												0.1%
												19
												1529
												100.0%
黒 磷	2	1	1	9	2	1						42
石 製 品		1	1	1								14
鐵 関 係			2	1								5
												62

插表34 黒色土包含層土器・陶磁器觀察表

地點番号	遺物名	種類	法 量 (cm)	形態上の特徴 外観 調 査	内面調整	内面色調	外面色調	胎土・焼成	取上No.	備 考	実測No.
Po 103 55 7	B-4-2 突 布 文 深鉢	①△ 65 ②△ 21.6	口縫端部は成立し丸い。口縫端部附近に下さがりの無刻目突窓をもつ。以下斜め方向のケスリのナダ。	端部附近を横にナダ。以下下縫方向のナダ。	において黄褐色 10YR6/3	において黄褐色 10YR7/4	胎(1 ~ 3 mm の砂粒を含む 5 mmの大粒) ・良好	1182	H-C類 もしくは O-C類 胎土分析 No.19	清水-35	
Po 104 55 7	C-5-1 突 布 文 深鉢	①△ 6.5 ②△ 21.6	口縫端部はやや外傾しない。口縫端部附近に下さがりの無刻目突窓をもつ。以下腰方向のナダ。	腰方向の比較的粗い ナダ。	褐色 5YR6/6	褐色 5YR6/6	胎・良好	779	H-C類 もしくは O-C類 胎土分析 No.18	大角-20	
Po 105 55 7	- 突 布 文 深鉢	①△ 2.5	口縫端部は成立し丸い。下さがりの無刻目突窓をもつ。	腰方向のナダ。	において黄褐色 10YR6/4	褐色 10YR4/1	胎(1 ~ 3 mm の砂粒を少し 含む)・やや 不良	1617	H-C類	清水-79	
Po 106 55 7	C-4-3 突 布 文 深鉢	①△ 15.3 ②△ 37.8	口縫端部は外反し丸い。下さがりの無刻目突窓をもつ。以下腰または斜め方向のナダ。	端部附近を横にナダ。以下腰方向の粗い ナダ。	において黄褐色 10YR7/4	において黄褐色 10YR7/4	胎(1 ~ 3 mm の大粒を多く 含む)・良	1333	H-C類 胎土分析 No.17	清水-36	
Po 107 55 7	C-3-2 C-4-4 突 布 文 深鉢	①△ 6.5 ②△ 23.5	口縫端部は直立し丸い。下さがりの無刻目突窓をもつ。以下腰方向のナダ。	腰にナダする。内縫合値あり。	浅黄色 2.5Y7/3	浅黄色 2.5Y7/3	胎・良好	708 940	E-C類 胎土分析 No.7	大角-19	
Po 108 55 7	B-3-4 突 布 文 深鉢	①△ 3.9 ②△ 23.5	口縫端部は山型して直立し丸い。大きく突出する突起部にさわめて浅く入り込み状の突起をもつ。以下腰方向のナダ。	斜め方向の比較的丁寧なナダ。	均質な褐色 10YR7/6	均質な褐色 5YR5/2	ナリーパ・褐色 胎・良好	1910	B-D類	大角-39	
Po 109 55 7	C-4-1 突 布 文 深鉢	①△ 4.0	口縫端部は直立し外側にやや突出。大きく突出する突起部にさわめて浅く入り込み状の突起をもつ。以下腰方向のナダ。	端部附近を強く横にナダする。以下腰方向の丁寧なナダ。	褐色 7.5YR6/6	褐色 7.5YR6/5	胎(1 ~ 2 mm の砂粒を含む) ・良好	954	H-D類 胎土分析 No.7	清水-32	
Po 110 55 7	- 突 布 文 深鉢	①△ 2.0	口縫端部は直立し外側にやや突出。大きく突出する突起部にさわめて浅く入り込み状の突起をもつ。	端部附近を強く横にナダする。以下腰方向の丁寧なナダ。	明赤褐色 SYH5/8	明赤褐色 SYR5/6	胎(1 ~ 2 mm の砂粒を含む) ・良好	96	H-D類	清水-73	

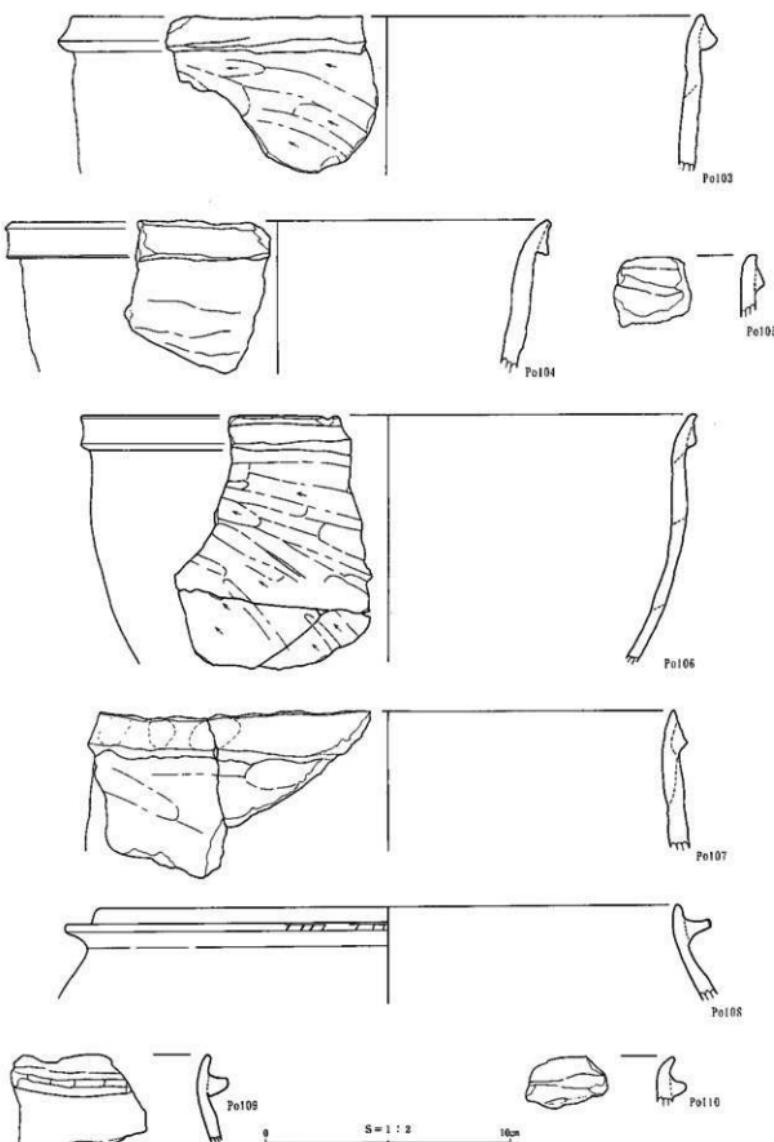


插圖55 黑色土包含層土器實測圖(4)

## 3. 弥生土器（中期以降）（挿図51・59・60 挿表33・34 図版10）

壺Po183・184、壺Po185～196が出土した。壺は大きく外反しや下垂する端面に格子状の文様をもつ。壺はいわゆる逆L字状の口縁部である。これらは概ね弥生時代中期後半のものと考えられる。また後期の土器Po198も出土している。後期はわずかであるが、中期の土器は全体の9.4%にのぼる。C-3-1-4、C-4-2、C-5-1 グリッドから多く出土しているが、付近から弥生時代の遺構は検出できなかった。その他、工具による連續刺突文をもつものや赤彩を施すもの、体部片に穿孔した紡錘車の可能性があるものなどが出上している。

## 4. その他の土器（挿図51・61 挿表33・34 図版12）

須恵器が2点出土している。いずれも体部片で外面はタタキ、内面には當て具痕が残る。一括出土を加えても3点のみである。古墳時代の土師器類は出土していない。また古代から中世・近世前半まで遺物は全く出土していない。

近世後半以降の土器陶磁器は19点出土した。この中にはPo216・217のような近世土師器の灯明皿も含んでいる。灯明皿はこの他Po218のような施釉陶器のものも出土した。中央に重ね焼きの砂が付着する。

この他の陶器は、胎土が灰色で陶器質のPo222・223が肥前18世紀頃。Po219は産地不明。Po220・221はいず

遺物番号 (出土地名)	種類名	器形	法 量 (cm)	形態上の特徴 (外・内・縁)	内面彫刻	内面色調	外面色調	胎土・焼成	取上地	備考	実測値
Po111 56 8	F-4-2 (BPC) B-4-2	実帶文 壺鉢	①△ 5.5 ③△ 29.4	口縁部はやや外反しない。わずかに波打つ。半円形の突起部に斜めにV字状の割込み目をもつ。以下横方向のナデ。	端部付近に横にナデ。以下横方向のナデ。指吹き痕あり。	において褐色 7.5H6/4	において褐色 7.5H6/4	密(1mm前後 の石英を含む) ・良好	56 1214	Ⅲ-A類	清水-34
Po112 56 8	B-4-2	実帶文 壺鉢	①△ 8.5 ③△ 32.8	口縁部は直立しやややゆる。半円形の突起部に斜めにV字状の割込み目をもつ。以下横方向のナデ。	横模様または斜め方向のナデ。	において黄褐色 10YR5/3~ 8YR4/6	において黄褐色 10YR5/4	密(1~2mm の石英を多く 含む)・良好	1185 1213 1617 No.22	Ⅲ-A類 胎土分析 No.22	清水-23
Po113 56 8	C-2-4	実帶文 壺鉢	①△ 3.8	口縁部は直立しない。半円形の突起部に斜めにV字状の割込み目をもつ。表面の上部は指吹き痕と墨書きにみられる。以下横方向のナデ。	横方向の粗いナデ。	において褐色 7.5H6/4	において褐色 7.5H6/4	密(1~2mm の石英を多く 含む)・良好	1070	Ⅲ-A類	清水-64
Po114 56 8	C-4-1	実帶文 壺鉢	①△ 3.2	口縁部は直立しややく。半円形の突起部に斜めにV字状の割込み目をもつ。やや波打つ。表面に墨書き。以下横方向のナデ。	横方向の粗いナデ。	において青褐色 5YR4/4	において青褐色 5YR4/3	密(1mm前後 の砂粒を多く含む)・良好	955	Ⅲ-A類 胎土分析 No.1	清水-37
Po115 56 8	-	火帶文 壺鉢	①△ 3.5	口縁部は外傾しややく。半円形の突起部に斜めにV字状の割込み目をもつ。表面に墨書き。以下横方向のナデ。	横方向の条痕。	灰褐色 7.5YH4/2	において赤褐色 8YR5/4~ 7.5YR4/2	密(1mm前後 の砂粒を含む) ・良好	215	Ⅲ-A類	清水-81
Po116 56 8	-	実帶文 壺鉢	①△ 3.2	口縁部は直立しややゆる。半円形の突起部に斜めにV字状の割込み目をもつ。	端部付近に横にナデ。以下横方向のナデ。	において褐色 10YR7/4	において黄褐色 10YR6/4	密(1~2mm の石英を多く 含む)・良好	1618	Ⅲ-A類	清水-80
Po117 56 8	-	実帶文 壺鉢	①△ 2.9	口縁部は直立しややゆる。半円形の突起部に斜めにV字状の割込み目をもつ。	横方向の条痕。	明褐色 10YR7/7	明黄色 10YR7/7	密(1~2mm の石英を多く 含む)・良好	67	Ⅲ-A類	清水-68
Po118 56 8	C-4-3	実帶文 壺鉢	①△ 7.7	口縁部は直立しややゆる。半円形の突起部に斜めにV字状の割込み目をもつ。以下横方向の粗いナデ。	端部付近を強く横に ナデする。以下横方向 の粗いナデ。	において褐色 10YR6/4	において黄褐色 10YR6/4	密・良好	598	Ⅲ-A類	清水-66
Po119 56 8	C-4-3	実帶文 壺鉢	①△ 5.8	口縁部はやや外反しややゆる。半円形の突起部に斜めにV字状の割込み目をもつ。以下横方向の粗いナデ。	端部付近を強く横に ナデする。以下横方向 の粗いナデ。	において褐色 10YR7/4	において黄褐色 10YR7/4	密(1~2mm の石英を多く 含む)・良好	20	Ⅲ-A類	清水-31
Po120 56 8	C-5-4	実帶文 壺鉢	①△ 3.1	口縁部は外傾しややく。三角形の突起部に斜めにV字状の割込み目をもつ。以下横方向の粗いナデ。	端部付近を横にナデ する。以下横方向のナ デ。	明褐色 10YR7/6	明黄色 10YR7/6	密・良好	797	Ⅲ-B類	大角-46
Po121 56 8	C-2-2	火帶文 壺鉢	①△ 6.7	口縁部は直立しややゆる。三角形の突起部に斜めにV字状の割込み目をもつ。以下横模様または斜め方向の粗いナデ。	横方向の条痕。	淡黃褐色 10YH6/3~ 8/4	淡黃褐色 10YH6/3~ 8/4	密(1mm前後 の石英を含む) ・良好	1596	Ⅲ-B類 胎土分析 No.3	清水-39
Po122 56	-	実帶文 壺鉢	①△ 3.8	口縁部は直立しややゆる。三角形のやや粗い無凹口突部をもつ。表面は5mm程度で薄い。密突下倒れ以下に縦筋付。	横方向の条痕。	褐色 7.5YR7/6	において黄褐色 10YR7/4	密(1~4mm の石英を含む) ・良好	413	Ⅲ-B類	大角-35
Po123 56 8	-	実帶文 壺鉢	①△ 2.7	口縁部は外傾しややゆる。三角形の無凹口突部をもつ。表面は5mm程度で薄い。密突下倒れ以下に縦筋付。	横方向の粗いナデ。	褐色 10YH7/8	において黄褐色 10YH6/4	密(1mm前後 の石英を含む) ・良好	413	Ⅲ-B類	清水-75
Po124 56 8	D-4-1	火帶文 壺鉢	①△ 6.6 ③△ 32.8	口縁部は外傾しややゆる。三角形の無凹口突部をもつ。以下横方向の比較的丁寧なナデ。	端部付近を強く横に ナデする。以下横方向 の比較的丁寧なナ デ。	灰褐色 10YH8/2	において黄褐色 10YH7/4	密・良好	1555	Ⅲ-B類	大角-18

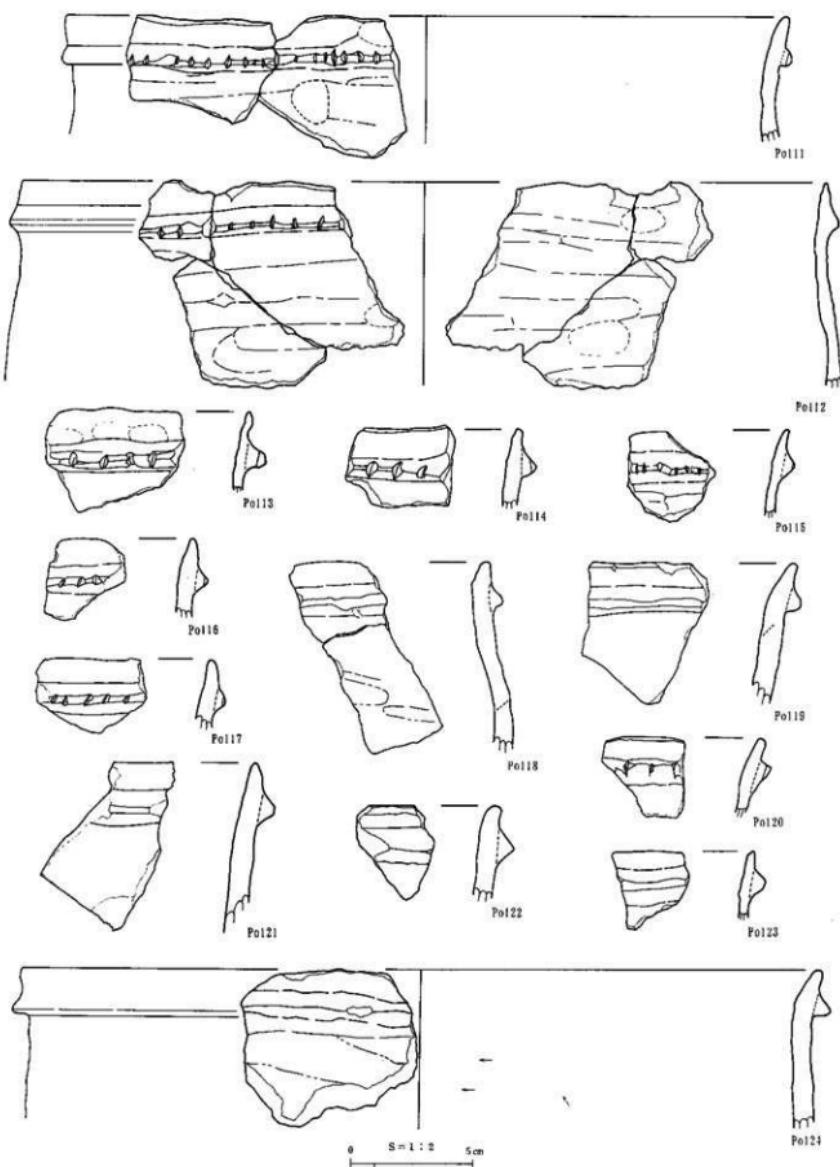


插圖56 黑色土包含層土器實測圖(5)

地名等 測量番号	遺構名	種類	法 蓋 (cm)	形態上の特徴 外 面 製 畫	内面調査	内面色調	外面色調	埴土・焼成	取上No.	備 考	実測値m
Po 125 57 8	C-2-2	尖突文 漆跡	①△ 3.9	口縁端部はやや外傾し直い。三角形の輪郭と目安符をもつ。以下横方向のナデ。	端部付近を横にナデする。以下横方向のナデ。	明黄褐色 10YR7/6	明黄褐色 10YR7/6	密(1~2mm の石英を含む)・良好	743	Ⅲ-C類 埴土分析 No.9	清水-51
Po 126 57 8	C-3-2	尖突文 漆跡	①△ 8.9 ②底30.6	口縁端部は外傾し直い。下さがりへ三角形の輪郭に切り込み状の輪郭と目安符をもつ。以下横方向のナデ。	端部付近を横にナデする。以下横方向のナデ。指痕压痕あり。	暗褐色 10YH8/6	灰表面色 10YH4/2	密(1~2mm の石英を多く含む)・良好	724	Ⅲ-C類 埴土分析 No.20	清水-28
Po 127 57 8	B-5-2	尖突文 漆跡	①△ 3.3	口縁端部は外傾し直い。下さがりへ三角形の輪郭に切り込み状の輪郭と目安符をもつ。以下横方向のナデ。	端部付近を横にナデする。以下横方向のナデ。	浅黄色 2.5Y7/4	浅黄色 2.5Y7/4	密(1~2mm の石英を含む)・良好	889	Ⅲ-C類	清水-34
Po 128 57 8	H-4-1	尖突文 漆跡	①△ 7.0 ②底30.0	口縁端部は外傾し直い。やや尖突。大きめの突起部の端部に目安符をもつ。以下横方向のナデ。体側へ口縁端部に撫付點をもつ。	横方向にケズリ状のナデを交叉にする。	明黄褐色 8YR6/6	において赤褐色 8YH4/4	密・良好	39	Ⅲ-D類	清水-22
Po 129 57 8	B-4-2	尖突文 漆跡	①△ 3.4	口縁端部は外傾し直い。下さがりへ尖突する突起部の端部に目安符をもつ。以下横方向のナデ。	横方向の条痕。	暗褐色 7.5YH6/6	褐色 7.5YB6/6	密(1~2mm の石英を多く含む)・良好	405 1333	Ⅲ-D類	清水-43
Po 130 57 8	C-3-1	尖突文 漆跡	①△ 4.3	口縁端部は外傾し直い。やや尖突。平行の突起部にV字形の刻み目をもつ。突起部を側面に貼り付ける際には下横方向のナデ。	横方向の条痕。	暗褐色 7.5YH6/6	褐色 7.5YB6/6	密(1~2mm の石英を多く含む)・良好	1095 No.30	埴土分析	清水-46
Po 131 57 8	-	尖突文の 漆跡跡	①△ 3.3	三角形の突起部にV字形の刻み目をもつ。突起部を側面に貼り付ける際には下横方向のナデ。	横方向の条痕。	暗褐色 10YR4/2	において赤褐色 10YR5/4~ 黑褐色 3/1	密(1~2mm の砂粒を多く含む)・良好	215	-	清水-193
Po 132 57 8	C-3-3 D-3-2	精製漆跡 もじこは 波状波紋 の漆跡	①△ 3.5 ②底18.3	口縁端部は外傾し直い。3本の波状波紋を表す。次いでいる部分が波状。	横方向の条痕。	暗褐色 10YR4/2	において赤褐色 10YR5/4~ 黑褐色 3/1	密(1~2mm の砂粒を多く含む)・良好	677 1451	-	清水-90
Po 133 57 8	C-4-1	精製漆跡	①△ 8.3	圓曲狀。丁寧な横方向のミガキまたはナデ。	横方向のミガキ。	暗褐色 7.5YR6/6	褐色 7.5YB6/6	密・良好	971	-	清水-127
Po 134 57 8	D-3-1	精製漆跡	①△ 8.6	圓曲狀上と下とも丁寧な横方向のナデ。	横方向の比較的無いナデ。	明黄褐色 2.5Y7/6	明黄褐色 10YR7/6	密・良好	669	-	清水-128
Po 135 57 8	C-2-4	粗製漆跡 漆跡	①△ 8.2	横方向の比較的丁寧な条痕で外側から凹孔を穿つ。粗製孔か。	横方向の条痕。	明褐色 7.5YR5/6~ 黑褐色 2.5Y3/1	褐色 2.5Y2/1	密(1~2mm の砂粒を多く含む)・良好	1072	-	清水-108
Po 136 57 8	C-3-4 D-3-1	粗製漆跡 もじこは 波状波紋 の漆跡	①△ 3.2	口縁端部は外傾し直い。横または斜め方向の条痕後一部ナデ。塗付跡。	横方向の比較的無いナデ。	明褐色 7.5YR5/6~ 深褐色 7.5YR7/6	褐色 2.5YR7/6~ 深褐色 7.5YR8/6	密(1~2mm の砂粒を含む)・良好	345 642 No.28	埴土分析	清水-93
Po 137 57 8	B-5-3	粗製漆跡	①△ 8.5	口縁端部は外傾し直い。横または斜め方向の条痕後一部ナデ。塗付跡。	横方向の粗いナデ塗付跡。	明褐色 7.5YR5/6~ 深褐色 7.5YR7/6	褐色 2.5YR7/6~ 深褐色 7.5YR8/6	密(3~6mm の石英を少く含む)・良好	870 No.29	埴土分析	清水-40
Po 138 57 8	D-3-1	粗製漆跡	①△ 3.1	口縁端部は外傾しやや尖突。横方向のナデ。因縁は約5mmで薄い。	横方向のやや粗いナデ。	褐色 7.5YR6/6	褐色 7.5YR6/6	密(1mm前後 の石英を含む)・良好	630	-	清水-76
Po 139 58 8	-	粗製漆跡	①△ 3.0	口縁端部は直立し直い。横方向のナデ。	横方向のナデ。	明褐色 10YR6/4	明褐色 2.5YR6/8~ 7.5YR7/6	密(3~3mm の砂粒を含む)・良好	64	-	清水-74
Po 140 58 8	D-3-3	粗製漆跡	①△ 2.7	口縁端部はわずかに内斂し直い。横方向のナデ。	剥落のため不明。	褐色 7.5YR5/6	明褐色 7.5YR6/6	密・良好	652	-	清水-77
Po 141 58 8	H-3-3	粗製漆跡	①△ 3.1	口縁端部は直立し直い。横方向のナデ。	剥落または横方向のナデ。	明褐色 10YR6/4	明褐色 10YR5/4	密(1~2mm の砂粒を含む)・良好	278	-	大角-44
Po 142 58 8	B-5-3	粗製漆跡	①△ 2.3	口縁端部は直立し直い。ごくわずかに波状。横方向のナデ。一部に剥落。	横方向のナデ。	褐色 7.5YR6/6	褐色 7.5YR6/6	密(1~2mm の砂粒を含む)・良好	384	-	清水-78
Po 143 58 8	H-5-2	粗製漆跡	①△ 3.2	口縁端部は直立し直い。横方向の波状波紋と横方向のナデ。指痕压痕あり。保存性。	横方向のナデ。	褐色 7.5YR6/6	褐色 7.5YR6/6	密(1~2mm の砂粒を含む)・良好	824	-	清水-38
Po 144 58 8	-	粗製漆跡	①△ 2.0	口縁端部はわずかに内斂し直い。横方向のナデ。	剥落のため不明。	明褐色 10YR7/4	明褐色 10YR6/4	密(1~2mm の砂粒を含む)・良好	413	-	大角-42
Po 145 58 8	D-3-2	粗製漆跡	①△ 3.1	口縁端部は直立し直い。横方向の比較的無いナデ。	剥落または横方向のナデ。	明褐色 7.5YH5/4	明褐色 7.5YH5/4	密(1~2mm の砂粒を含む)・良好	589	-	大角-41
Po 146 58 8	C-1-3	粗製漆跡	①△ 2.6	口縁端部はわずかに外傾し直い。横方向のナデ。	横方向のナデ。	明褐色 10YH7/4~ 6/3	褐色 7.5YR6/6~ 6/3	密(1~3mm の石英、5mmの大砂粒)・良好	320	-	清水-45
Po 147 58 8	B-5-2	粗製漆跡	①△ 2.9	口縁端部はわずかに内斂し直い。横方向のナデ。	横方向の粗いナデ。	灰褐色 2.5Y7/2	灰褐色 2.5Y7/2	密(1~2mm の砂粒を多く含む)・良好	1374	-	清水-83
Po 148 58 8	D-5-4	粗製漆跡	①△ 2.9	口縁端部はわずかに外傾し直い。横方向のナデ後横方向のナデ。	端部付近面取り状にナデする。以下横方向のナデ。	灰褐色 2.5Y4/1~ 深褐色 7/3	褐色 7.5YR7/6	密(1mm前後 の砂粒を多く含む)・良好	438	-	清水-72

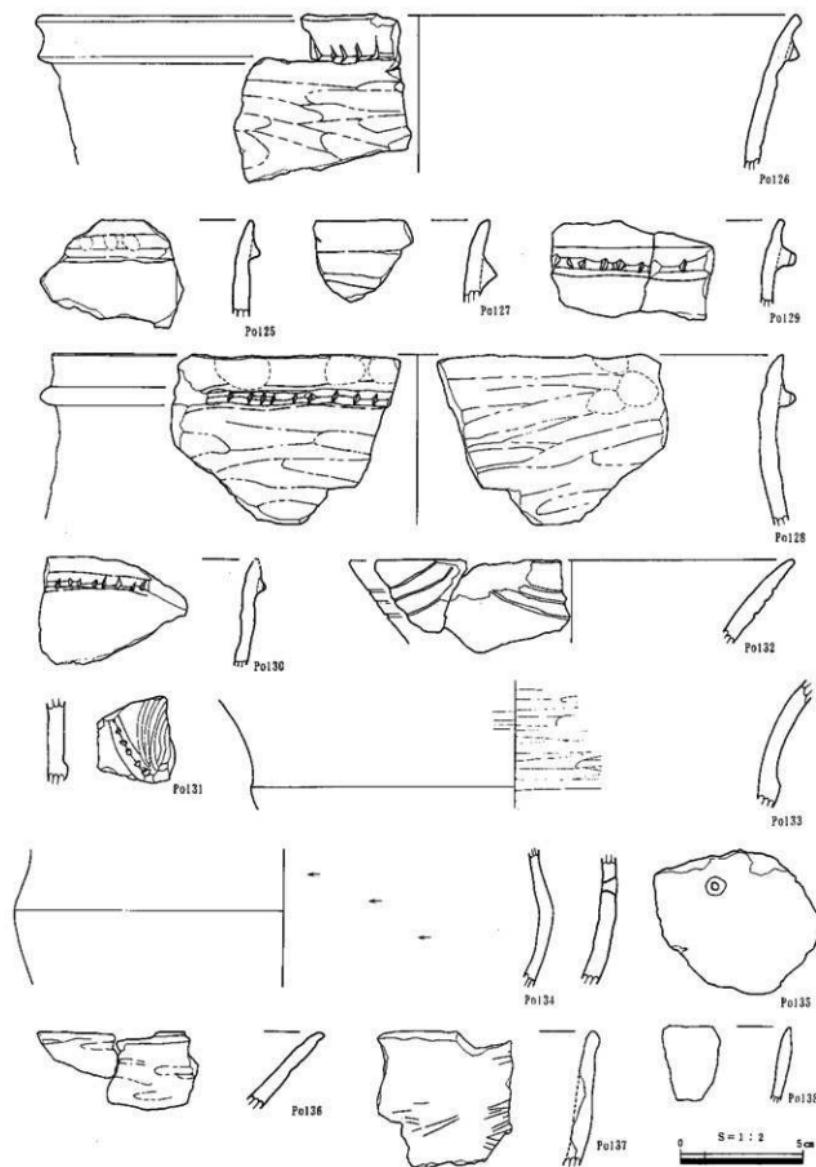
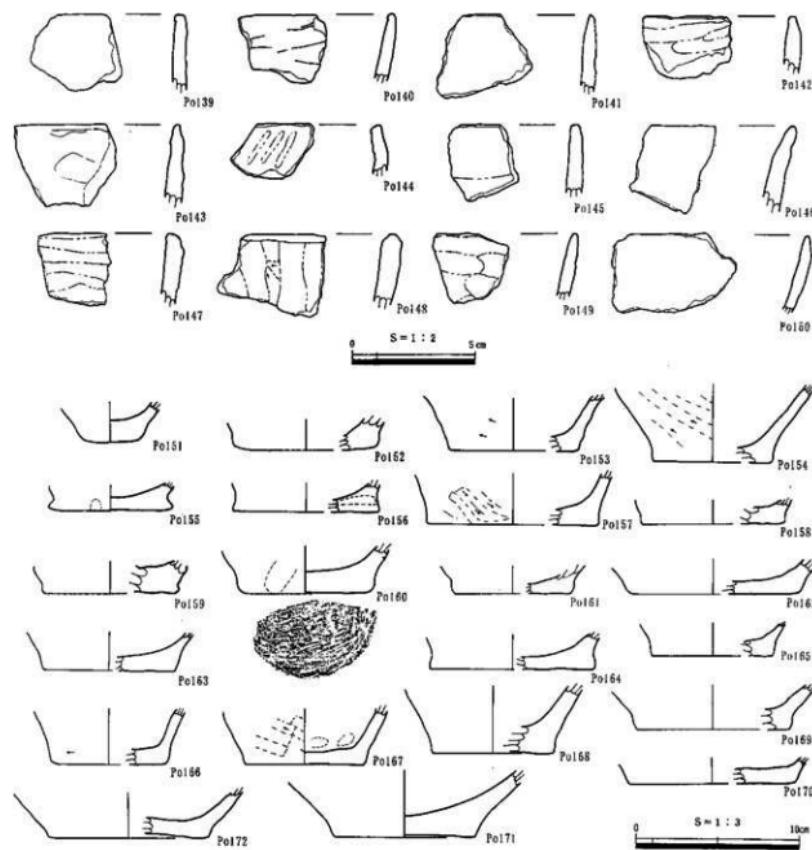


插图57 黑色土包含层器物实测图(6)

遺跡名 地図位置 番号	遺傳名	推 定 年 代	法 量 (cm)	形態上の特徴 外 面 圖 案	内面調整	内面色調	外面部色	胎土・焼成	取上№	備 考	実測№
Po 149 58 8	—	粗製陶体	① △ 2.6	口縁部はわずかに外彎し丸い。 横方向の比較的低いナデ。	斜め方向のナデ。	に赤い褐色 7.5YR5/4	に赤い褐色 7.5YR5/4	密・良好	365	大角-49	
Po 150 58 8	D-4-1	粗製鉢	① △ 3.2	口縁部はわずかに内彎し丸い。 底または横方向の丁寧なナデ。	斜めまたは横方向のナデ。 口縁部には少量化物付。	に赤い褐色 7.5YR5/3	に赤い褐色 7.5YR5/3	密・良好	416	大角-47	
Po 151 58 9	B-5-3	鉢	① △ 2.5 ② ■ 3.2	接地面付近がひらくむ不定平底。 立ち上がり付近は斜め方向のナデ。	立ち上がりは強め。	灰オリーブ色 5YR6/2	に赤い褐色 2.5YR6/3	密(1~2 mm の石英を含む) ・良	850	清水-31	
Po 152 58 9	—	底部	① △ 1.9 ② ■ 7.4	接地面付近がひらくむ不定平底。 立上がり付近は斜め方向のナデ。	剥落のため不明。	灰黄褐色 10YR6/2	淡色 5YR6/6	密・良好	8	粘土分析 No42	大角-17
Po 153 58 9	C-4-1	底部	① △ 3.4 ② ■ 8.0	接地面付近がひらくむ外方向に張り出す平底。 立ち上がりは斜め方向のナデ。 底面に立ち上がりに焼付物。	底面は1方向。立ち 上がりは斜め方向の 弱いナデ。	褐色 7.5YR7/6	褐色 7.5YR7/6	密(1 mm前後 の石英を多く含む) ・良	970	清水-12	
Po 154 58 9	B-5-2	底部	① △ 4.8 ② ■ 7.2	接地面付近がひらくむ強張り出す平底。 立ち上がりは横または斜め方向のナデ。	立ち上がりは強め または斜め方向の 弱いナデ。	褐色 7.5YR6/3	明赤褐色 5YR5/6	密(1~3 mm の大石英を多 く含む)・良	838 873 874	清水-3	
Po 155 58 9	C-4-1	底部	① △ 1.7 ② ■ 7.8	接地面付近が大きめに張り出す平底。 底面は不定方向のナデ。	底面は不定方向のナ デ。	に赤い褐色 10YR6/3	に赤い褐色 10YR6/3	密・良好	28	大角-9	
Po 156 58 9	B-4-2	底部	① △ 1.8 ② ■ 9.0	接地面付近が大きめに張り出す平底。 底面は不定方向のナデ。	底面は不定方向のナ デ。	褐色 7.5YR5/1	淡色 5YR7/6	密・良好	1161 1162	清水-15	
Po 157 58 9	C-3-2	底部	① △ 3.2 ② ■ 10.6	接地面付近がやや外側に張り出す平底。 底面は不定方向のナデ。立ち 上がりは斜め方向のナデ。	底面は不定方向。 立ち 上がりは斜め方向 のナデ。立ち 上がりに焼付物付。	明赤褐色 5YR5/6	明赤褐色 5YR5/6	密(2~3 mm の大石英をわ ずかに含む) ・良	31	清水-17	
Po 158 58 9	B-3-3	底部	① △ 1.5 ② ■ 8.6	接地面付近がやや外側に張り出す平底。 底面は不定方向のナデ。	剥落のため不明。	に赤い褐色 10YR7/4	褐色 7.5YR7/6	密・良好	1176	大角-13	
Po 159 58 9	C-4-2	底部	① △ 2.0 ② ■ 8.2	接地面付近が外に張り出す平底。 底面は不定方向。立ち上がりは横 方向のナデ。	此面は斜め方向のナ デ。	に赤い褐色 7.5YR6/3	明黄褐色 10YR7/6	密・良好	1188	大角-12	
Po 160 58 9	—	底部	① △ 2.9 ② ■ 7.7	接地面付近が底が直する平底。 底面は1方向の力強く横の強 めのナデ。立ち上がりは横 方向のナデ。	底面は1方向。立ち 上がりは横方向の強 いナデ。	に赤い褐色 7.5YR7/4	に赤い褐色 7.5YR7/4	密(石英、輝 石を含む) ・良	16	粘土分析 No45	清水-3
Po 161 58 9	C-3-2	底部	① △ 1.7 ② ■ 7.2	接地面付近が張り出す平底。 底面は不定方向。立ち上がりは横 方向のナデ。	底面は不定方向のナ デ。	褐色 5YR7/6	褐色 5YR7/6	密・良好	702	粘土分析 No40	大角-5
Po 162 58	C-1-3	底部	① △ 2.2 ② ■ 10.2	接地面付近がわずかに張り出す平底。 底面は不定方向のナデ。立ち 上がりは斜め方向のナデ。	底面～立ち 上がりに かけて不定方向のナ デ。	褐色 2.5YR7/6	淡色 2.5YR7/6	密(1~3 mm の石英を含む) ・良	768	清水-20	
Po 163 58	C-3-1	底部	① △ 2.4 ② ■ 8.0	接地面付近が外側する平底。 底面は不定方向のナデ。立ち 上がりは斜め方向のナデ。	底面～立ち 上がりに かけて1方向のナ デ。	に赤い褐色 7.5YR6/3	赤褐色がかった 明黄褐色 10YR7/6	密・良好	1092	大角-7	
Po 164 58 9	C-3-3	底部	① △ 2.2 ② ■ 10.0	接地面付近がやや外側する平底。 底面は不定方向のナデ。立ち 上がりは斜めまたは横方向のナ デ。	底面～立ち 上がりに 1方向のナデ。	褐色 7.5YR7/6	褐色 7.5YR7/6	密・良好	180	大角-4	
Po 165 58	B-2-2	底部	① △ 2.1 ② ■ 7.4	接地面付近がほぼ直立する平底。 底面は1方向の強めのナデ。立ち 上がりは斜め方向のナデ。	剥落のため不明。	に赤い褐色 10YR7/4	に赤い褐色 10YR7/4	密・良好	238	大角-16	
Po 166 58 9	C-4-1	底部	① △ 3.5 ② ■ 7.8	接地面付近が外側する平底。 底面は不定方向のナデ。立ち 上がりは斜め方向のナデ。	底面は不定方向。 立ち 上がりは斜め方向 の弱いナデ。	褐色 2.5YR7/6	褐色 2.5YR7/6	密(1~2 mm の石英を含む) ・良	950	清水-9	
Po 167 58 9	C-4-1 C-4-3	底部	① △ 3.5 ② ■ 7.2	接地面付近がほぼ直立する平底。 底面は1方向のナデ。立ち 上がりは斜め方向のナデ。	底面は不定方向。 立ち 上がりは斜め方向 のナデ。	褐色 2.5YR8/6	褐色 2.5YR8/6	密(1 mm前後 の砂粒を多く含む) ・良	27 496	粘土分析 No43	清水-4
Po 168 58 9	C-3-1	底部	① △ 4.2 ② ■ 7.2	接地面付近がほぼ直立する平底。 底面は1方向のナデ。立ち 上がりは斜め方向のナデ。	立ち上がりは横方向 のナデ。	淡黄色 2.5YR8/3	淡黄色 2.5YR8/3	密(3 mm前後 の石英を多く含む) ・良	1018 1022	粘土分析 No44	清水-6
Po 169 58	C-4-2	底部	① △ 2.8 ② ■ 8.3	接地面付近がわずかに突出する平 底。立ち上がりは斜め方向のナデ。	立ち 上がりは強め または斜め方向 のナデ。	に赤い褐色 10YR7/2	に赤い褐色 10YR7/2	密(1~2 mm の石英を多く含む 3 mmの 雲母片)・良	529	清水-16	
Po 170 58 9	D-3-1	底部	① △ 1.7 ② ■ 10.2	接地面付近が外側する平底。 立ち 上がりは横方向のナデ。	底面は不定方向のナ デ。	褐色 5YR6/8	明黄褐色 10YR7/6	密(1~2 mm の石英を含む) ・良	620	清水-13	

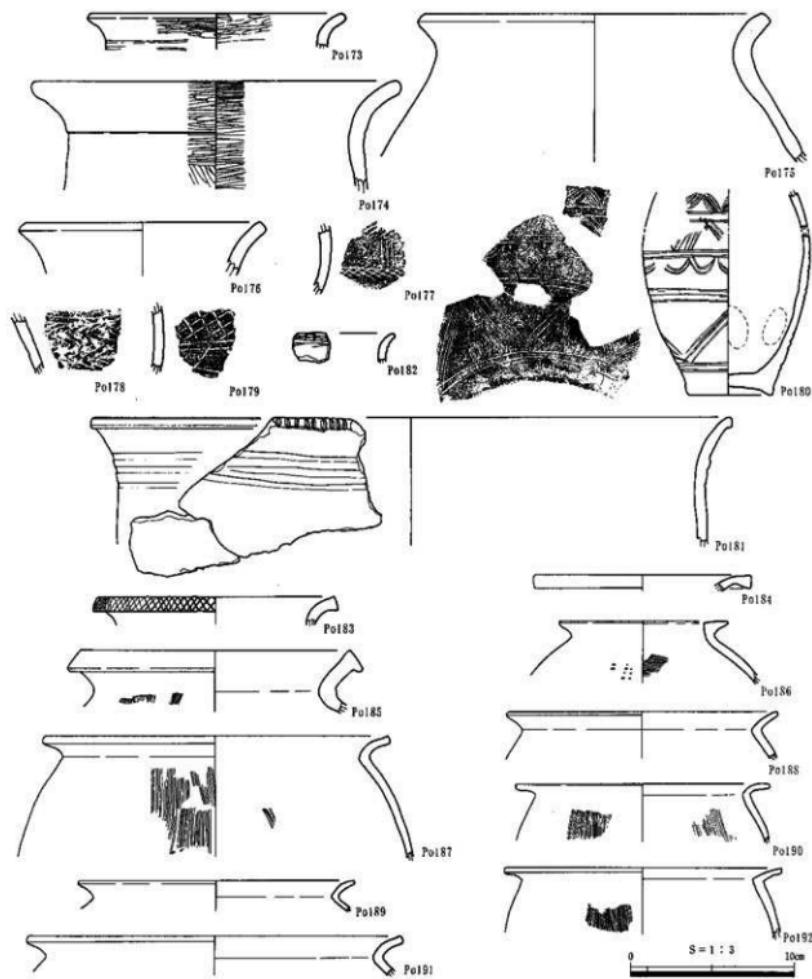


插図58 黒色土包含層土器実測図(7)

遺物番号 測量用番号	遺物名	種類	量	法量 (cm)	形態上の特徴 外面 調査	内面調整	内面色調	外面色調	胎土・焼成	取上地	備考	高さ(cm)	
Po 171 58 3	B-4-2	底盤	①△ 4.1 ③△ 8.4		接地面附近が外傾する平底。円盤状の断面に腰を上げる。立ち上がりは緩やかである。底盤は不定方向のナガ。無腹片底。立ち上がりは腰方向のナガまたは腰方向のミガ。	底面へ立ち上がりにかけて不定方向のナガ。	褐色 7.5YR6/6	褐色 7.5YR6/6	褐(1~4mmの石英を多く含む)・良	993 1517 1519		清水-2	
Po 172 58	C-4-3	底盤	①△ 2.8 ③△ 9.8		接地面附近がやわらかく剥り出される。立ち上がりは緩やかである。底盤は不定方向のナガ。指面底。立ち上がりは腰方向のナガ。	底面へ立ち上がりにかけて不定方向のナガ。	明黄褐色 10YH7/6	明黄褐色 10YH7/6	やや褐(2~3mmの石英を多く含む)・良	809 胎土分析 No.61		清水-3	

れも肥前とみられる。Po220の内底には菱形の軸切れがあり、重ね焼きの台の痕跡と考えられる。磁器はいずれも染め付けで、Po224は胎土は良いが発色が青黒い。絵付けも大まかである。Po225・226はいずれも肥前で18~

遺跡名 登録番号	遺構名	種類器	法 量 (cm)	形態上の特徴 外面 装 置	内面調査	内面色調	外面色調	施土・焼成	取上No.	備考	実測者No.
Po 173 59 9	B-5-1	生牛前頭 蓋	①△ 2.2 ②△ 15.2	口縫部は外反し大きい。口縫部に横方向の模様を2本以上する横方向の沈縫を施す。	横方向の密なガキ。	明赤褐色 7.5YR5/8	褐色 7.5YR6/8～ ない青褐色 10YR7.4/4	密(1～2mm の砂粒を含む) ・良好	840	遠賀川系 粘土分析 No.33	清水-81
Po 174 59 9	C-3-2	生牛前頭 蓋	①△ 6.7 ②△ 22.0	口縫部は外反し大きい。縫部にミガキによる横方向の低い段をもつ。横方向の低いガキ。	横方向の比較的低い ガキ。	褐色 7.5YR6/6～ 暗灰色 4/1	褐色 7.5YR6/6～ 暗灰色 4/1	密・良好	707	遠賀川系 粘土分析 No.33	大角-31
Po 175 59 9	C-3-3 C-3-1 C-3-2	生牛前頭 蓋	①△ 9.2 ②△ 6.5	口縫部は外反し角張る。縫部に段はもたない。口縫部、縫部に斜め方向のナヶ。	ナヶ。剥落のため 不明。	褐色 7.5YR7/6	明赤褐色 5YR5/6	密(1mm の砂粒を多く含む) ・良好	694 1113 1099 No.33	遠賀川系 粘土分析 No.33	清水-92
Po 176 59	D-3-3	生牛前頭 蓋	①△ 2.3 ②△ 14.4	口縫部は外反しや角張る。横方向のナヶ。	横方向のミガキ。	ない青色 7.5YR6/4	ない青色 7.5YR6/4	密・良好	870	遠賀川系 粘土分析 No.33	人角-30
Po 177 59 9	C-5-2	生牛前頭 底体部	①△ 4.1	横方向のナヶ。縫・横方向の沈縫と斜格子文を施す。	横方向のナヶ。	褐色 7.5YR6/6	褐色 7.5YR6/6	密(1～2mm の大石英を含む) ・良好	450	遠賀川系	清水-110
Po 178 59 9	C-4-2	生牛前頭 底体部	①△ 3.5	2本以上の沈縫の下に斜縫文を施す。	斜め方向のナヶ。	褐色 5YR6/6	褐色 5YR6/6	密(1mm の石英を含む) ・良好	1341	遠賀川系	清水-103
Po 179 59 9	C-4-3	生牛前頭 蓋	①△ 3.1	2本以上の沈縫の下に斜格子文、さらに上に1本以上の沈縫あり。間に斜めの縫が入る。	横方向のナヶ。	褐色 5YR6/8	褐色 5YR6/8	密・良	512	遠賀川系	清水-154
Po 180 59 10	C-5-2	生牛前頭 蓋	①△ 12.5 ③ 8.0	接縫面付近はわざかに張り出す。上げて、体部は掌など1本、上部は2本、2層、1段の4段階で構成される。縫部は横方向の連続する正五邊、3本前の横縫状文などと幅広く、その沈縫上部には有輪の木本文を描く。	不定方向のナヶ。体 部下には指痕直痕 が確認されている。	ない青褐色 10YR6/4	明赤褐色 10YR6/6～ 褐色 7.5YR6/8～ 黑色 5Y2/1	密(1mm の砂粒を含む) ・良	271 364	遠賀川系 粘土分析 No.31	清水-192
Po 181 59 9	C-4-1	生牛前頭 蓋	①△ 7.9 ②△ 35.8	口縫部はわざかに外反し、面もつ。縫には絞縫による斜格子文を施す。横方向に施す縫の沈縫は3本施す。縫縫はナヶ。外側面に斜縫文。	不定方向のナヶ。指 痕直痕あり。縫部 付近に厚付帯。	褐色 7.5YR6/6	明赤褐色 5YR3/4	密(1～2mm の砂粒を多く含む) ・良好	851 853	遠賀川系 粘土分析 No.32	清水-27
Po 182 59 9	-	生牛前頭 蓋	①△ 1.8	口縫部はわざかに外反し丸くおわる。縫部は狭いV字形の斜め目を施す。以下横方向のナヶ。	横方向のナヶ。	ない青色 7.5YR5/4	ない青色 7.5YR6/4	密(1mm の大石英を含む) ・良好	68	遠賀川系	清水-105
Po 183 59 10	C-3-1	生牛中頭 蓋	①△ 1.7 ②△ 14.4	口縫部が大きく外反し面をもつ。縫には単縫による斜格子文を施す。縫縫は横方向のナヶ。	I型縫縫方向、縫部 横方向のナヶ。	浅黄色 2.5Y7/4	浅黄色 2.5Y7/4	密・良	1103		清水-97
Po 184 59 10	D-5-1	生牛中頭 蓋	①△ 1.0 ②△ 13.4	口縫部が大きく外反し面をもつ。縫には単縫による斜格子文を施す。縫縫は横方向のナヶ。	口縫縫横方向のナヶ。	浅黃褐色 10YR8/4	浅黃褐色 10YR8/4	密・良好	427		清水-102
Po 185 59 10	C-3-4	生牛中頭 蓋	①△ 3.8 ②△ 16.4	口縫部は外側に倒曲し縫部は弧形する。口縫部は横方向のナヶ、縫部にはハケ目がある。	口縫部横方向のナヶ。縫部由来でトゲリ。	褐色 7.5YR7/6	褐色 7.5YR7/6	密・良好	1137		清水-83
Po 186 59 10	C-4-1 C-3-4	生牛中頭 蓋	①△ 3.8 ②△ 19.0	縫部から倒曲し水が方向に面をもつ。縫部は縫縫方向のナヶ。	L型縫縫・縫縫横方向 のナヶ。以下横方向 のナヶ。	褐色 10YH3/1	ない青褐色 10YR6/3	密・良好	946 1138		大角-29
Po 187 59 10	D-3-3	生牛中頭 蓋	①△ 7.5 ②△ 21.5	縫部は逆L字形に倒曲し、縫縫はやや平行目もある。縫縫横方向のナヶ。縫縫部以下縫縫方向のハケ目か。底大径上にわざかに斜文。	口縫部横・縫縫以下縫縫横 方向のナヶ。縫縫部以下縫縫方向のナヶ。	黃褐色 10YH4/8	黃褐色 10YR6/6	密・良	12 60		清水-88
Po 188 59	C-5-1	生牛中頭 蓋	①△ 2.9 ②△ 16.4	口縫部は逆L字形に倒曲し、ねじれる。口縫縫横方向のナヶ。縫縫部以下縫縫方向のハケ目か。	口縫部横以下縫縫横 方向のナヶ。	ない青褐色 10YH6/4～ 7/4	ない青褐色 10YR6/4～ 7/4	密・良好	783		清水-100
Po 189 59	C-3-1	生牛中頭 蓋	①△ 3.6 ②△ 16.4	口縫部は逆L字形に倒曲し、ねじれる。口縫縫横以下縫縫横方向のナヶ。	口縫部横以下縫縫横 方向のナヶ。	明赤褐色 10YR7/6	明赤褐色 10YR7/6	密・良好	1117		清水-98
Po 190 59	C-3-1	生牛中頭 蓋	①△ 3.6 ②△ 16.4	口縫部は逆L字形に倒曲し、ねじれる。口縫縫横以下縫縫横方向のナヶ。	口縫部横以下縫縫横 方向のナヶ。	ない青褐色 10YH7/4	ない青褐色 10YH7/4	密・良好	1088		大角-53
Po 191 59 10	C-5-1	生牛中頭 蓋	①△ 2.4 ②△ 22.6	口縫部は逆L字形に倒曲し、縫縫部はやや平行目もある。口縫部は横方向のナヶ。	口縫部横以下縫縫横 方向のナヶ。	褐色 7.5YR7/6	褐色 7.5YR7/6	密・良好	776		清水-95
Po 192 59 10	C-3-4	生牛中頭 蓋	①△ 4.2 ②△ 17.0	口縫部は逆L字形に倒曲し、縫縫部はやや平行目もある。口縫部は横方向のナヶ。	口縫部横以下縫縫横 方向のナヶ。	褐褐色 10YR3/1	褐褐色 10YH5/1	密(1mm の砂粒を含む) ・良好	1135		大角-54



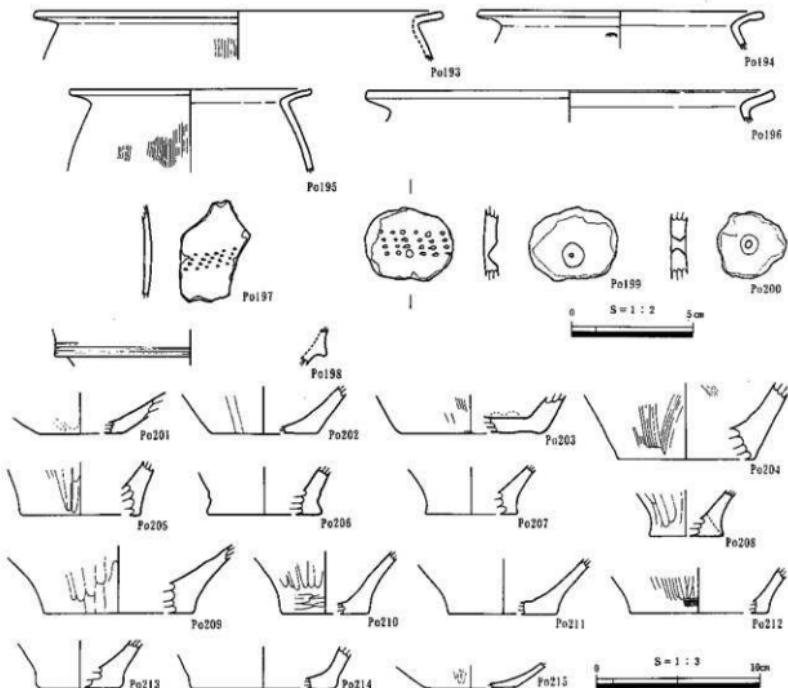
挿図59 黒色土包含層土器実測図(8)

19世紀頃と考えられる。またPo228は陶器摺鉢で石見付近産の可能性がある。遺構外遺物と合わせてみても概ね18世紀頃のものが最も多くみられる。また摺鉢類は棚田の盛土の下から出土していることから18~19世紀頃に付近の棚田は開発されたことが予想できる。

鉄製品は鉄釘が出土しているが銹化できなかった。その他鐵滓も若干含まれ、分析の結果たたら生産による可能性が高いとの結果を得た。結果については考察に「上菅原神原遺跡鐵滓分析」として掲載されている。たたらがいつ開始されたかは明らかではないが、陶磁器類は18~19世紀のものがわずかではあるがみられることから、棚田の開発とともにたたら生産が近世後半から付近の主な産業として発展したのであろう。

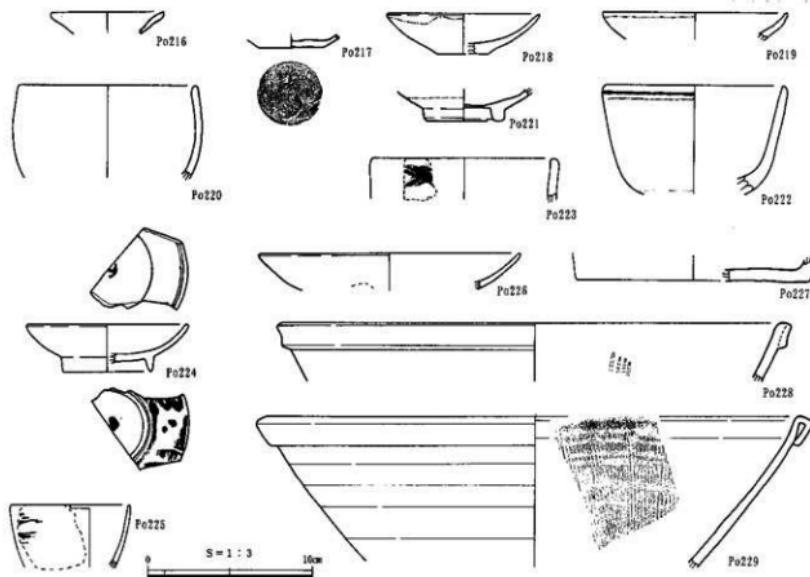
第3章 上吉荒神原遺跡の調査

遺物番号 測定番号	遺構名	種 類	注 量 (cm)	形態上の特徴 外観 調査	内面調整	内面色調	外面色調	地土・焼成	取上№	備 考	実測値
Po 193 60	C-2-4	発生中筋 裏	①△ 2.4 ②△ 34.6	口縫部は逆S字形に屈曲し、瘤状 に面有り。口縫複数方向のナデ。 屈曲部以下複数方向のケイ目。	口縫部構造方向のナデ。 屈曲部以下表面のた め不規則。	褐色 7.5YR7/6	褐色 7.5YH6/6	赤・やや不良	50		清水-104
Po 194 60 10	C-2-4	発生中筋 裏	①△ 2.3 ②△ 17.2	口縫部は逆S字形に屈曲しやや丸 く把頭。口縫複数方向のナデ。側 曲部以下複数方向のナデ。	口縫部～屈曲部以下 構造方向のナデ。	淡褐色 2.5Y7/3	褐色 7.5YH7/6	密・良	527		清水-99
Po 195 60 10	B-3-2	発生中筋 裏	①△ 5.1 ②△ 14.8	口縫部は逆S字形に屈曲しやや丸 く把頭。口縫複数方向のナデ。 側曲部以下複数方向のナデ。	口縫部～屈曲部以下 構造方向のナデ。	明黄褐色 10YR7/6	利青褐色 10YR7/6	密・良好	1149		清水-96
Po 196 60 10	C-5-1	発生中筋 裏	①△ 1.8 ②△ 24.6	口縫部は逆S字形に屈曲しやや丸 く把頭。口縫複数方向のナデ。	口縫部～屈曲部以下 構造方向のナデ。	明黄褐色 10YR7/6	利青褐色 10YR7/6	密・良好	787		清水-94
Po 197 60	C-3-1	発生体部	①△ 5.7	構方向のナデの上から4個ノボリ の刺突又は体部に対し斜に施す。	岐方向のハケ目後ナ ダ。	にぶい褐色 7.5YR6/4	にぶい黄褐色 10YR6/4	赤・良	1078		大角-48
Po 198 60 10	—	寄生後筋 裏	①△ 2.3	複合口縫に4段以上の平行筋を施 す。突出部以下は横方向のナデ。	剥落のため不明。	にぶい黃褐色 10YH5/4	褐色 7.5YR3/3	密(1mm前 の粒粒を含む) ・良好	315		清水-101
Po 199 60 10	D-3-1	発生体部	①△ 2.9 ②△ 3.7	後方向のナデ後4箇1組の刺突又 は体部に対し斜に施す。中央付 近に4箇孔を試した。	ナデ。	明黄褐色 10YR6/6	利青褐色 10YR6/6	密・良	119		清水-105
Po 200 60 10	D-3-3	筋跡車か ら	①△ 2.7	比較的円滑に無い。兩側から穿孔 するが、中央付近やさずれている。	構方向のハケ目か。	明黄褐色 10YR7/6	利青褐色 10YR7/6	密・良	857		清水-109
Po 201 60 10	C-3-3	寄生底筋	①△ 2.5 ②△ 5.6	立ち上がりは縦方向のミガキ後ナ ダ。筋跡痕あり。	底面～立ち上がりに かけ不定方向のナデか。	黒色 5Y5/1	深・浅黄褐色 5Y6/1～ 10YH5/3	密・良好	671		大角-15
Po 202 60 10	C-3-4	寄生底筋	①△ 2.9 ③△ 6.9	底面～テ。立ち上がりは縦方向の ミガキ後ナデ。	底面～立ち上がりに かけ無力感のナデか。	暗灰黃色 2.5Y5/2	暗灰黃色 2.5Y5/2	密・良	1131		清水-1
Po 203 60 10	D-4-1	寄生底筋	①△ 2.3 ③△ 10.0	底面～テ。立ち上がりは縦方向の ハケ目後ナデ。	底面～立ち上がりに かけ指痕跡の頗濃。	浅黄色 2.5Y7/3	浅黄色 2.5Y7/3	密(1～4mmの 石粒を含む) ・良	420		清水-11
Po 204 60 10	C-6-1	寄生底筋	①△ 4.7 ③△ 8.4	底面ナデ。立ち上がりは縦方向の ハケ目。	立ち上がりに縦方向 のハケ目。	褐色 7.5YR7/6	褐色 7.5YR7/6	密(1～2mm大 の石粒を含む) ・良	1387		清水-7
Po 205 60 10	C-5-2	寄生底筋	①△ 3.3 ③△ 7.2	底面ナデ。立ち上がりは軽度の擦 ミガキ。	立ち上がりは構方向 のナデ。	褐擦色 10YR4/6	褐擦色 10YR4/1	密・良好	485		大角-1
Po 206 60 10	C-3-2	底筋	①△ 2.9 ③△ 7.2	接地面附近が凹凸で削かれている。 立ち上がりは構方向のナデ。	立ち上がりは構方向 のナデ。	褐擦色 5YR5/1	褐擦色 5YR5/1	密・良好	703		大角-6
Po 207 60 10	D-4-1	寄生底筋	①△ 3.0 ③△ 5.6	接地面附近が凹凸で削かれている。 立ち上がりは構方向のナデ。	立ち上がりは構方向 のナデ。	褐擦色 5YR5/1	にぶい褐色 7.5YR7/6	密(0.5～1mm の石粒を含む) ・良好	97		清水-14
Po 208 60 10	C-3-4	寄生底筋	①△ 2.8 ③△ 4.6	接地面附近が凹凸で削かれてい る。立ち上がりは構成の構方向のナ デ。	立ち上がりは削れ方 向のナデ。	褐擦色 10YR5/1	褐擦色 10YR5/3	密(1～4mmの 石粒を含む) ・良	1177		清水-18
Po 209 60 10	C-3-2	寄生底筋	①△ 4.2 ③△ 8.0	底面～テ。立ち上がりは軽度の擦 ミガキ。	武満のため不明。	褐擦色 10YR6/1～ 10YH6/3	褐擦色 10YH6/6	密・良好	1478		大角-3
Po 210 60 10	C-5-1	寄生底筋	①△ 3.8 ③△ 5.2	立ち上がりは軽度の擦 ミガキ。接 地面附近は皆は横方向のミガキ。	立ち上がりは縦方向 のハケ目後半ナ ダ。	にぶい黄褐色 10YR7/3	にぶい黄褐色 10YR7/4	密・良好	795		大角-2
Po 211 60 10	B-2-3	寄生底筋	①△ 3.4 ③△ 6.6	底面ナデ。立ち上がりは縦方向の ミガキ後横方向のナデ。	立ち上がりは縦方向 のナデ。	褐擦色 10YR4/1	にぶい黄褐色 10YR7/2～ 褐擦色5/1	密・良好	1062		大角-8
Po 212 60 10	—	寄生底筋	①△ 2.7 ③△ 4.2	縦方向のミガキ後接地面附近後横 方向のハケ目。	立ち上がりは削れ方 向のナデ。	褐擦色 7.5YR4/1	褐擦色 7.5YR5/1	密・良好	68		大角-11
Po 213 60 10	B-4-3	寄生底筋	①△ 3.0 ③△ 5.0	やや不安定な平底。立ち上がりは 削れのナデ。	立ち上がりは横方向 のナデ。	褐擦色 5YR5/1	褐色 7.5YR7/6	密・良好	905		大角-14
Po 214 60 10	C-3-2	寄生底筋	①△ 2.6 ③△ 4.3	底面附近がわずかに削り出す平 底。立ち上がりは横方向のナデ。	底面は小定方向のナ デ。	褐色 5YR6/6	褐色 5YR6/6	密・良好	310		大角-10
Po 215 60 10	C-2-1	寄生底筋	①△ 1.6 ③△ 5.6	底面ナデ。立ち上がりは削れのミ ガキ。基盤は4～6mmで薄い。	立ち上がりは横方向 のナデ。	明赤褐色 5YR6/6	利青褐色 5YR6/6	南・良好	1602		清水-112
Po 216 61 12	—	土器輪 灯明皿	①△ 1.4 ③△ 6.8	口縫部はやや外側で開く。回転 輪明皿。厚く保有者。	回転ナデ。厚く保有者。	明黄褐色 10YR7/6	明黄褐色 10YR7/6	密・良好	1391	各地	大角-77
Po 217 61 12	C-3-4	土器輪 灯明皿	①△ 0.8 ③△ 3.9	底面は回転切り。2ヶ所削れ。底 部は回転ナデ。2ヶ所削れ。	底色は回転ナデ。2 ヶ所削れ。	褐色 7.5YR6/6	褐色 7.5YR6/6	密・良好	1124	各地	大角-78
Po 218 61 12	C-4-2	施動陶器 灯明皿	①△ 2.5 ③△ 9.3	底の小さな鉢底から大きく開く。 口縫部のみ燒成。以下は露胎。底 面は回転糞切り。	転胎を施す。底面は やや粗い燒成。	施動: 淡赤褐色 5YR3/3	施動: にぶい 黄褐色 10YH7/4	密・軟質	540	底地不明 肥前か	大角-87
Po 219 61 12	施動陶器 皿か	—	①△ 1.7 ③△ 11.4	口縫部は浅く大きく開く。露胎。 底面は回転糞のかかる。	底面は回転糞のかかる。	施動: ピー アグリ 10YR2/2	施動: 灰白色 7.5Y8/6	密・軟質	365	底地不明	大角-75



挿図60 黒色土包含層土器実測図(9)

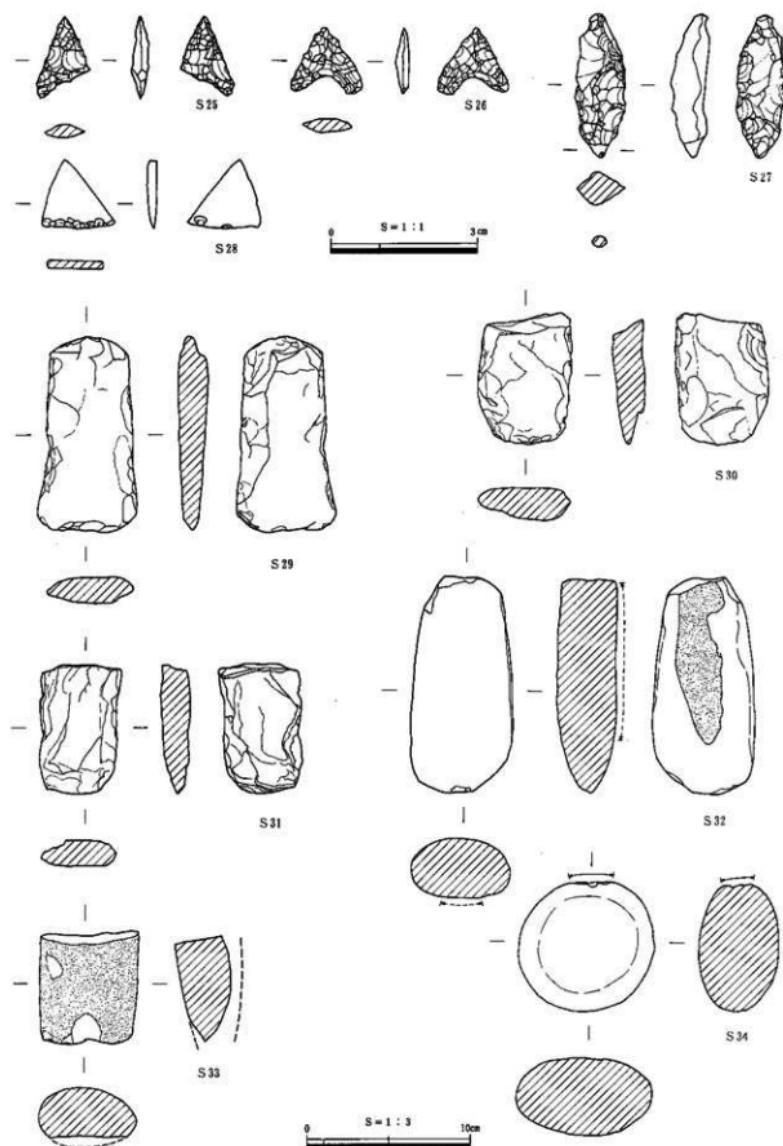
遺物番号 試験番号	遺物名	種類 器	形態上の特徴 外 面 観 察	法 線 (cm)	形態上の特徴 外 面 観 察	内面研磨	内面色調	外面色調	紹介・施成	取上法	備 考	実測値(cm)
Po 220 61 12	C-3-3	施釉陶 瓶	①△ 8.7 ②▲ 10.5	やや傾いた形の体部。体部は内側 に灰白色の胎。	灰白色の胎に白色粘 りがる。	施釉: 灰白色 2.5Y7/1	断面: 淡黄色 2.5Y7/3	織柄(砂粒を 少量含む)・ 軟質	307	産地不明 肥前か	大角-56	
Po 221 61 12	C-4-4	施釉陶 瓶	①△ 8.0 ②▲ 8.0	高台は比較的高くケズり出す。底 部は約2度で非常に薄い。絵灰色 の胎に質。高台付近は削鉈。	底面に墨形のわずか な物切れ。トラン版 か。	施釉: オリー カ褐色 10Y8/2	断面: 褐色 7.5YR5/4	織密・軟質	22	肥前	大角-58	
Po 222 61 12	-	ぬめ付け 瓶	①△ 8.7 ②▲ 11.0	粘土のため青褐色にみえる素地に 横・斜め方向の支撑を施す。高台 付付。	口縁部附近にわずかに 剥離付着。	施釉: 灰色 10Y6/1	断面: 黄灰色 10Y6/1	織密・硬質	1381	肥前	大角-67	
Po 223 61 12	-	ぬめ付け 瓶	①△ 2.5 ②▲ 11.0	粘土のため青褐色にみえる素地に 横・斜め方向の支撑を施す。高台 付付。	口縁部附近にわずかに 剥離付着。質入り。	施釉: 灰色 7.5Y7/1	断面: 灰色 5Y6/1	織密・硬質	215	肥前	大角-66	
Po 224 61 12	C-5-2	ぬめ付け 瓶	①△ 3.0 ②▲ 9.8 ③▲ 8.5	粗く角った高台をナギリ出す。高台 底中央に施釉。口縁部に質入り。底 面中央に点状の施釉付付。	「横筋」付2本。只 底のみ付付1本の施釉。 底面中央に文様。	施釉: 灰白色 10Y8/1	断面: 灰白色 10Y8/1	織密・軟質	448	産地不明 在地か	大角-60	
Po 225 61 12	-	ぬめ付け 瓶口	②▲ 12	口縁部は直立し尖る。口縁部に質 入りの施釉付付。	口縁部附近付近のみ質 入り。	施釉: 灰白色 10Y7/1	断面: 灰白色 5Y6/1	織密	67	肥前	大角-68	
Po 226 61 12	-	白磁瓶	②△ 3.0	口縁部は直立し丸くおわる。体部 下半分は削鉈。	-	施釉: 明暦灰 10Y8/1	断面: 灰白色 5Y6/0	織密・硬質	1255	肥前	大角-76	
Po 227 61 12	C-3-1	施釉陶 大甕又は 壺	①△ 1.6 ②▲ 14.4	底面は切子。立ち上がりに横方向の 溝のナメ。立ち上がりより底面を 削鉈する。	底面ナメ。削鉈。	にぎり 2.5Y5/4	灰黄色 2.5Y7/2	織密・軟質	1113	産地不明 中国地方	大角-72	
Po 228 61 12	C-2-2	施釉陶 罐	①△ 3.5 ②▲ 32.0	口縫部は折り返して貼り付けた。 口縫部を押しつけて貼り付けた。	わずかに擇の痕 あり。	施釉: 黄褐色 2.5Y5/4	断面: にぎり 赤褐色 5Y4/3	織密・軟質	756	産地不明 中国地方	大角-79	
Po 229 61 12	B-2-2	施釉陶 罐	①△ 9.5 ②▲ 32.0	口縫部を押しつけて貼り付けた。 口縫部を押しつけて貼り付けた。	紙、斜め方向の窓な 付目。	施釉: にぎり 赤褐色 5Y4/3	断面: にぎり 一色 7.5Y6/2	織密・軟質	1058	近代以降	大角-61	



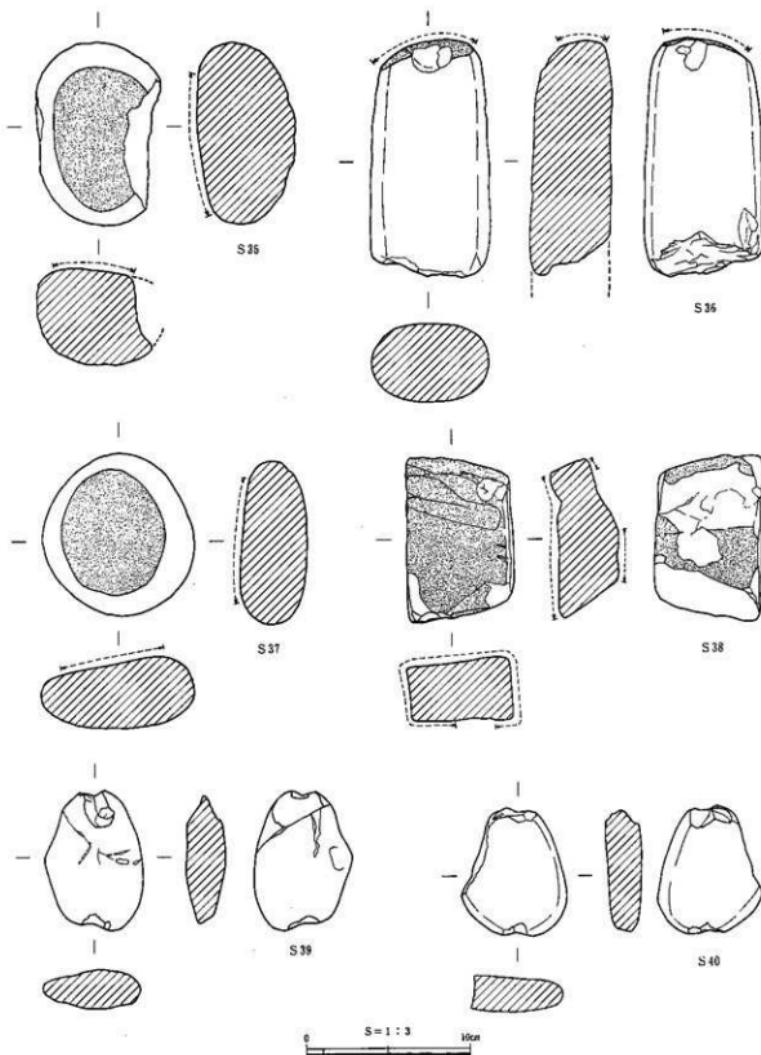
插図61 黒色土包含層土器実測図(10)

插表35 黒色土包含層石器観察表

遺物番号	標印番号	地図番号	遺物名	性質	法 厘 米 (cm)	形態上の特徴	重 量 (g)	石 材	取上地	実測者名
S 25	62	11	B-4-1	石鏃	⑤ 1.8 ⑥△1.1 ⑦ 0.3	抉り長 4mm / 全長 16mm で、抉りの深度は 0.22、頭部直径 1.0mm である。前面はレシット状で、内外面ともに中央部まで連続する細縫隙を有す。	△ 0.3g	黒曜石	133H 西川 5	
S 26	62	11	B-5-2	石鏃	⑤ 1.4 ⑥ 1.4 ⑦ 0.3	抉り長 4mm / 全長 14mm で、抉りの深度は 0.22、頭部直径 0.9mm である。前面はレシット状で、内外面ともに細縫隙が往々断続的に見られる。前面はレシット状で、頭部は内外面ともに非連続的削除調整を施す。	0.4g	田螺石 鹿久見産 同定No.2	151S 西川 3	
S 27	62	11	C-3-4	石鏃	⑤ 2.9 ⑥ 1.9 ⑦ 0.7	前面は裏面で、先端部に明瞭に磨滅痕が現る。先端部の断面は円形。	1.9g	黒曜石	106T 西川 2	
S 28	62	11	—	加工石	⑤ 1.5 ⑥ 1.4 ⑦ 0.2	左側の下側に連続する細かな横裂隙あり。	0.5g	安山岩	271 西川 1	
S 29	62	11	C-4-3	打製石斧	⑤ 12.1 ⑥ 6.0 ⑦ 1.6	彫形、ほぼ完存。	180g	半花崗岩(アブライト)	497 清水 124	
S 30	62	11	C-2-1	打製石斧	⑤△7.8 ⑥ 5.5 ⑦ 2.1	彫形の先端部付近。	△ 120g	半花崗岩(アブライト)	1196 清水 126	
S 31	62	11	—	打製石斧	⑤△8.0 ⑥ 8.0 ⑦ 1.8	彫形の先端部付近。	△ 120g	結晶片岩 櫛櫛石の結晶	215 清水 125	
S 32	63	11	D-3-1	磨製石斧	⑤ 13.3 ⑥ 6.3 ⑦ 3.7	断面は橢円形を呈す。	508g	閃綠岩	1505 清水 123	
S 33	62	11	C-2-4	磨製石斧	⑤△6.5 ⑥ 6.0 ⑦ 3.2	大型始刃石斧。断面はやや倒錐形か複合形。	△ 225g	閃綠岩	1063 清水 122	
S 34	62	11	D-3-1	滾石又は 磨石	⑤ 8.0 ⑥ 8.4 ⑦ 4.8	2ヶ所に敲き痕。または磨石として使用か。	480g	閃綠岩	1503 清水 119	
S 35	62	11	D-3-3	敲石	⑤ 11.2 ⑥△7.6 ⑦ 6.0	1ヶ所に敲きによる溝みあり。	△ 720g	粗粒黑雲母花崗岩	582 清水 115	
S 36	63	11	D-3-2	磨製石斧 又は磨石	⑤△14.7 ⑥ 7.3 ⑦ 5.9	石斧又は磨石に軽用か。先端部に磨り痕あり。延長化がすむ。	△ 980g	粗粒花崗岩 角閃石を含む	655 清水 171	
S 37	63	11	—	磨石	⑤ 10.0 ⑥ 9.3 ⑦ 4.3	側面に磨り痕が認められ。	560g	閃綠岩	1636 清水 114	
S 38	63	11	C-2-4	磁石	⑤ 10.2 ⑥ 6.6 ⑦ 3.9	側面に磨りによる断面V字状の溝が1條ある。	670g	流紋岩	48 清水 117	
S 39	63	11	—	石鏃	⑤ 8.5 ⑥ 5.8 ⑦ 2.7	両面からの打ち欠きにより絞掛け部をつくる。	160g	細粒花崗岩	365 清水 177	
S 40	63	11	C-6-1	石鏃	⑤ 7.8 ⑥ 6.4 ⑦ 3.2	両面からの打ち欠きにより絞掛け部をつくる。	140g	細粒閃長岩	1304 清水 172	
S 41	64	11	C-5-2	石鏃	⑤ 8.8 ⑥ 5.8 ⑦ 1.9	両面からの打ち欠きにより絞掛け部をつくる。	135g	細粒花崗岩	1816 清水 179	
S 42	64	11	D-3-2	石鏃	⑤ 7.3 ⑥ 5.9 ⑦ 1.5	両面または片面からの打ち欠きにより絞掛け部をつくる。	120g	半花崗岩(アブライト)	576 清水 173	
S 43	64	11	C-5-1	石鏃	⑤ 7.9 ⑥ 6.1 ⑦ 1.6	両面からの打ち欠きにより絞掛け部をつくる。	120g	雲母片岩	781 清水 174	
S 44	64	11	C-1-3	石鏃	⑤ 8.5 ⑥ 5.8 ⑦ 1.6	両面からの打ち欠きにより絞掛け部をつくる。	116g	結晶片岩	1591 清水 176	
S 45	64	11	—	石鏃	⑤ 9.4 ⑥ 7.9 ⑦ 1.7	片面からの打ち欠きにより絞掛け部をつくる。	96g	玄武岩質安山岩	67 清水 183	



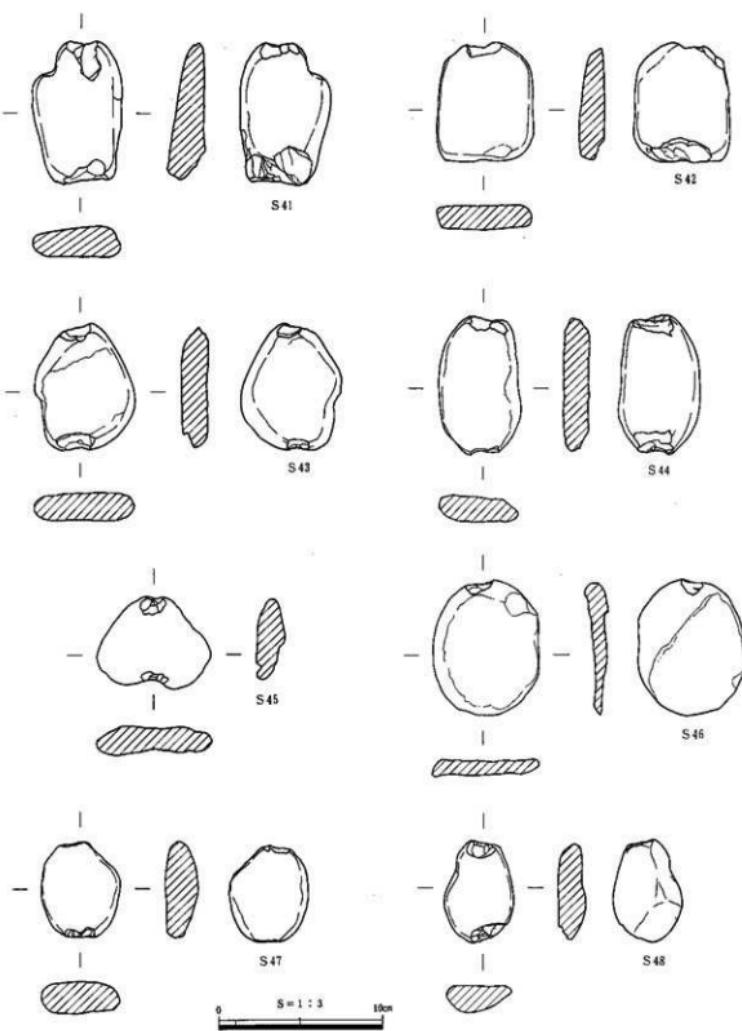
插図62 黒色土包含層石器実測図(1)



挿図63 黒色土包含層石器実測図(2)

##### 5. 石器 (挿図51・62~64 挿表33・35 図版11)

黒曜石石器・石錐、安山岩剥片石器、打製石斧、敲石、磨製石斧、磨石、砥石、石鏟が出土した。このうち石錐S27は先端部に明瞭な掠り痕が残る。石錐S39~48は全て2方向の打ち欠き石錐である。他の石錐も含め16点



挿図64 黒色土包含層石器実測図(3)

が出土しているが有溝石鍤はSK-08のS2の1点のみである。石材は鑑定の結果を記しているが、黒曜石と安山岩を除きいずれも日野川流域にみられる石材で、S31の打製石斧と造構外ではあるがS51の石鍤の結晶片岩のように上流の日南町多里付近で産出する石材もみられた。遠賀川系土器は出土しているものの石包丁などの稲作に深く関わる石器類は確認していない。

遺物番号	埋設番号	回収番号	遺構名	種類	法 (cm)	量	形態上の特徴	重量	石材	取上地	実測者名
S 46	64	11	D-S-4	石鏡	⑤ 8.3 ⑥ 6.5 ⑦ 1.2	打ち欠きで掛け部をつくるようだが斜面のため不明確。	85g	細粒花崗岩	440	清水-180	
S 47	64	11	—	石鏡	⑤ 6.0 ⑥ 4.8 ⑦ 2.0	両面からの打ち欠きにより掛け部をつくる。	84g	閃長岩	1398	大角-82	
S 48	64	11	R-S-4	石鏡	⑤ 6.4 ⑥ 4.2 ⑦ 1.7	両面または片面からの打ち欠きにより掛け部をつくる。	61g	細粒閃長岩	1376	清水-182	

挿表36 遺構外出土土器・陶磁器観察表

遺物番号	埋設番号	回収番号	遺構名	種類	法 (cm)	形態上の特徴	内面調査	内面色調	外面部調査	胎土・焼成	取上地	備考	実測者名	
Po 230	65	12	I区-括	粗製陶瓶 体部	① △ 5.2	横方向の比較的粗いナギの裏地に 手鉄錠等の鉄の工具で斜めまたは 横方向の文様を施す。	斜め方向の粗いナギ。 において褐色。 7.5YR5/4	において褐色。 7.5YR5/4	表面は褐色のナギ。 7.5YR7/6	表面は褐色。 7.5YR7/6	8	清水-145		
Po 231	65	12	I区-括	弥生中期 罐	① △ 1.9	下唇部に斜め方向の單線によ る文様を施す。	口唇部接合部のナギ。 褐色	褐色	表面は褐色。 7.5YR7/6	表面は褐色。 7.5YR7/6	5	大角-55		
Po 232	65	12	I区-括	染め付け 瓶	② 各 9.4	下唇部に斜め方向の單線によ る文様を施す。	口唇部接合部に斜め付帯。 褐色	褐色；灰色 7.5YR6/1	表面；灰色 7.5YR6/1	表面；灰色 7.5YR6/1	9	肥前	大角-68	
Po 233	65	12	I区-括	染め付け 瓶	① △ 4.7 ② 各 9.4	瓶のたまご底白色にみえる裏地に 模様と化した文様を施す。やや歪んで る染め付け。	—	—	表面；灰白色 2.5YR7/1	表面；灰白色 2.5YR7/1	9	肥前	大角-69	
Po 234	65	12	I区-括	染め付け 瓶	① △ 2.0 ② 各 15.0	口縁部は大きめに開く。裏地は やや緑色に近い褐色。	やや緑色に近い褐色 10YR7/1	褐色；灰白色 NR8/0	表面；灰白色 NR8/0	表面；灰白色 NR8/0	8	肥前	人角-64	
Po 235	65	12	I区-括	染め付け 瓶	① △ 2.4 ③ 各 14.4	低い高台をケギり出した。立ち上がり りは大きめに開く。裏地は白黒。高 台部内面は蛇の目剥刺ぎ。	見込みは剥離。立ち上 りに斜め方向の 緑色に近い染め付け。	施物；明オリ 2.5C7V7/1	施物；灰白色 7.5YR7/6	表面；明オリ 2.5C7V7/1	表面；灰白色 7.5YR7/6	8	肥前	大角-62
Po 236	65	12	I区-括	青磁 瓶	① △ 3.3 ④ 各 11.2	曲がり立ち上がり丸くおわる。 施物部附近は細かな質入。	施物部附近は細かな質入。 青磁部は細かな質入。	施物；灰白色 7.5YR7/6	施物；灰白色 7.5YR7/6	表面；灰白色 7.5YR7/6	表面；灰白色 7.5YR7/6	9	肥前か	大角-63
Po 237	65	12	I区-括	青磁 瓶	① △ 3.8 ④ 各 10.8	曲がり立ち上がり丸くおわる。 以下構造同の文様。高脚盤。	口盤部部に鉄錠。	施物；灰白色 7.5YR7/6	施物；灰白色 7.5YR7/6	表面；灰白色 7.5YR7/6	表面；灰白色 7.5YR7/6	9	肥前	人角-70
Po 238	65	12	I区-括	内壺 壺口付	① △ 2.3 ④ 各 7.0	やや内側しながら立ち上がる。	—	施物；灰白色 NR8/0	施物；灰白色 NR8/0	表面；灰白色 NR8/0	表面；灰白色 NR8/0	9	肥前	大角-74
Po 239	65	12	I区-括	陶器 擂钵	① 8.6 ③ 各 33.4	基部は厚い。立ち上がりはテグ モ压庄底。底面に磨擦物付。	誰なナギ。削面に比 べて胎土は厚い。	において赤褐色 5YR4/3	において赤褐色 5YR4/3	表面；良好	表面；良好	3	備前	大角-73
Po 240	65	12	I区-括	陶器 擂钵	① △ 3.5 ③ 各 10.4	底面は加藤余切り。立ち上がりは 削面ナギ。	が削面になるよう に2回の削り目を入 れる。	明赤褐色 2.5YR5/6	明赤褐色 2.5YR5/6	表面；良好	表面；良好	9	鹿児島不明 中国地方	大角-71
Po 241	65	13	II区-括	粗製土器	① △ 2.8 ③ 各 10.0	口縁部は水平方向に屈曲する。 横方向のナギ。	横または斜め方向の 比較的粗いナギ。	において赤褐色 5YR4/4	において赤褐色 5YR4/4	表面；良好	表面；良好	11	清水-111	

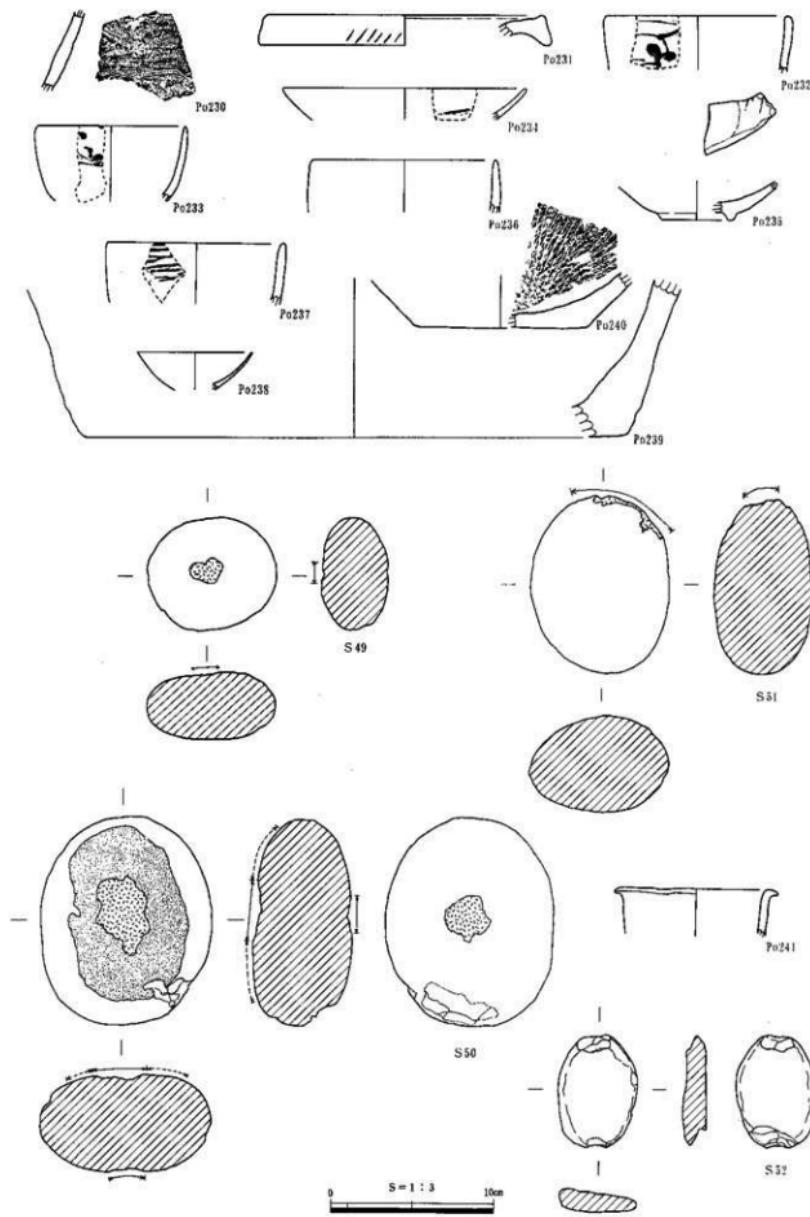
挿表37 遺構外出土土器観察表

遺物番号	埋設番号	回収番号	遺構名	種類	法 (cm)	形態上の特徴	重量	石材	取上地	実測者名
S 49	65	13	調査区内-括	凹石	⑨ 7.9 ⑩ 6.9 ⑦ 4.2	円窓の中央付近にわずかな盛みあり。	310g	石英斑岩	1	清水-113
S 50	65	13	調査区内-括	凹石	⑨ 12.8 ⑩ 10.5 ⑦ 8.0	円窓の中央付近に盛みあり。	1240g	石英斑岩	1	清水-121
S 51	65	13	I区-括	石鏡	⑨ 7.0 ⑩ 4.8 ⑦ 1.9	圓窓から打ち欠きにより掛け部をつくる。	81g	結晶片岩	97	清水-181
S 52	65	13	II区-括	敲石	⑨ 10.9 ⑩ 8.5 ⑦ 6.0	1ヶ所に敲打あり。	500g	閃長岩	58	清水-118

## 第9節 遺構外の遺物

遺構外の遺物として線刻のある繩文土器の体部片Po230、弥生土器壺の口縁部、陶磁器等がある。Po239は鉢の底部で、胎土は若干悪いが備前の可能性がある。陶磁器類は陶器と磁器がある。このうちPo232・237は灰色の陶器質の胎土に染め付けを施す。肥前で18世紀頃か。Po233は胎土が若干異なり肥前産かは不明。Po234・235は同一個体の可能性あり。肥前で内面に蛇の目剥刺ぎでやはり同時期か。またPo239は備前とみられるが、他は石見付近産の可能性もあり不明瞭である。

II区での出土遺物はPo241が第1遺構面上層から、S52が第1遺構面下の粘土層付近からの出土で、第2遺構面との間にあたる。この粘土層はI区のDライン付近まで続次第に薄くなるが、層位的には第2遺構面の暗茶褐色土包含層付近に相当するものと考えられる。II区第1遺構面下では唯一の出土遺物である。



挿図65 道橋外出土遺物実測図

## 鳥取県出土の木葉文土器について

西川 徹

### 1 はじめに

弥生時代前期を代表する土器文様の1つに木葉文がある。分布の中心は北部九州から近畿地方に至る瀬戸内海沿いである。鳥取県内で木葉文が描かれた土器（木葉文土器、以下同様）が出土した遺跡は数少なく、ほとんど知られていない。そこで、県内出土の木葉文土器を集成し、若干の考察を試みたい。なお、木葉文については幾つかの分類案が発表されている木葉文形態の名称もそれぞれ異なるが、本論では工業氏の分類方法に従い分類を行うことにする。しかし、出土資料はほとんどが小破片のため、木葉文の全体形や施文方法などが明確なものはわずかである。よって、以下で記述する木葉文についての解説は筆者が報告書等に掲載された拓本・写真から判断した結果であり、事実誤認をしている可能性が含まれることを予めお断りしておく。なお、木葉文の上下関係は特に断わりを入れていない限り報告書に従った。また、施文具は明らかに貝殻が使用されているもののみ記述し、ヘラ状工具<sup>(1)</sup>が使用されていると判断した大部分のものについては特に記述を行っていない。

### 2 出土した木葉文土器

(1) 西大路土居遺跡(1~2) 鳥取市の西大路土居遺跡は鳥取平野南東部の大路山という独立丘陵の北西側山裾に位置し、墓地造成事業に伴い1996年度に調査が実施された。遺跡からは多くの遺物が出土しているが、その中心は弥生時代中期と古墳時代中期から後期である。そのなかに2点の木葉文土器が存在した。

1は2本ずつの弧線が向き合う無軸木葉文と推測される。縦の区画線（以下、区画線）は認められない。2は4本の弧線からなる無軸木葉文と推測される。区画線は認められない。両方とも小破片のため明確ではないが、もう1本程度線が有るようにも見え、有軸木葉文になる可能性も残る。

(2) 長瀬高浜遺跡(3~56) 羽合町の長瀬高浜遺跡は天川河口の砂丘地に位置する古墳時代を中心とする大集落遺跡である。1978年度以降の下水道整備に連絡する天神净化センター建設に伴う調査で数多くの遺構・遺物が出土したが、そのなかに木葉文土器も多く含まれていた。

3は1条の上界線と3本の区画線の文様帯に2本ずつの弧線で無軸らしいX木葉文を描く。4は1条の界線と1本の区画線の文様帯のうち、中央の区画に2単位以上の有軸絞文が描かれ、両側の区画には2本ずつの弧線で無軸らしいX木葉文を描く。5は段の下に1条の上界線と1本の区画線の文様帯に3本ずつの弧線で無軸の木葉文を描く。6は1条の上界線と1本の区画線の文様帯に3本ずつの弧線で無軸の木葉文を描く。+(半截)木葉文である。なお、前述した5と6は文様がよく似ており、同じ工人によって描かれていると推測される。7は1条の下界線と1本の区画線の文様帯に3本を基本に一部4本の弧線で無軸の木葉文を描く。8は上1条・下6条の界線と2本の区画線の文様帯に2~3本ずつの弧線で無軸の木葉文を描く。左側の文様帯には右側と異なる文様が描かれている。下界線に沿って4本線の重弧文が連続する。9は1条の上界線と1本の区画線の文様帯に3~5本の弧線で無軸の木葉文を描く。<sup>(1)</sup>10は2条の上界線と1本の区画線の文様帯に軸線と1本ずつの弧線で木葉文を描く。図の網掛け部分の2条の上界線と木葉文以外の部分に赤色顔料が塗布されている。他に類例の無いものである。11は1条の上界線と2本の区画線の文様帯に軸線と1本ずつの弧線でX木葉文を描く。12は上2条・下1条の界線の文様帯に軸線と1本ずつの弧線でX木葉文を描く。13は軸線と1本ずつの弧線でX木葉文を描く。14は1条の上界線と3本の区画線の文様帯に軸線と1本ずつの弧線で木葉文を描く。15は3条の上界線と2本の区画線の文様帯に共に軸線があり一方は1本ずつ、他方は2本ずつの弧線で2単位の木葉文を描く。同一個体内に弧線数が異なる木葉文が併存する資料である。16は2条の上界線と2本の区画線の文様帯に4本の線で木葉文を描く。この内の1本は軸線で、1本と2本の弧線が向き合う17や19の様な形態になると推測される。17は1条の下界線と2本の区画線の文様帯に軸線と1本と2本の弧線でX木葉文を描く。右区画には無軸絞文を描く。18は2条の下界線と1本の区画線の文様帯に軸線と1~2本の弧線でX木葉文を描く。右区画には絞文を描いているようで、17と形態が類似する。19は段の下に3本線の重弧文が連続し、その下に1条ずつの上下の界線と2~3本の区画線の文様帯に軸線と1本と2本の弧線でX木葉文を描く。20はSI169埋土中出土で、上3条・下1条の界線と3本の区画線の文様帯に軸線と1~3本の弧線でX木葉文を描く。弧線は直線状で軸線を挟んで向き合って位置せず、軸線の片側のみに描いているようである。21は1条ずつの上下の界線と3本の区画線の文様帯に軸線と1~3本の弧線でX木葉文を描く。弧線には軸線を挟んで向かい合うものと軸線の片側のみに描くものが併存する。22は1本の区画線と軸線と2本ずつの弧線でX木葉文を描く。23はSI94埋土中出土で、1条ずつの上下の界線と2本の区画線の文様帯に軸線と2本ずつを基本に一部に1~3本の弧線でX木葉文を描く。24は3本の区画線の文様帯に軸線と2本ずつの弧線でX木葉文を描く。下の界線は認められない。25は2段の竹管状刺突文帯を挟む3条の上界線に軸線と2本ずつの弧線でX木葉文を描く。26はSI114埋土中出土で、2段の竹管状刺突文帯を挟む3条の下界線と1本の区画線の文様帯に軸線と2本ずつの弧線で木葉文を描く。27はSI156埋土中出土で、1条の上界線に軸線と2本ずつの弧線で木葉文を描く。区画線は無いらしい。28は2条の上界線と

1本の区画線の文様帶に軸線と2本ずつの弧線でX木葉文を描く。29は2条の上界線に5本の線で1葉を構成する木葉文を描く。中央の線は短いが軸線で他は2本ずつが向き合う弧線であろう。30は斜格子文帯を挟む2条の下界線に軸線と2本ずつの弧線で木葉文を描く。縦の区画線は無い。31は下界線となる割り出し突帯と1本の区画線の文様帶に5本の線で1葉を構成する木葉文を描く。中央の線は軸線となる可能性がある。区画線を挟んで木葉文は連続していない。32は1条の下界線と2本の区画線の文様帶に軸線と2本ずつの弧線でX木葉文を描く。<sup>(32)</sup> 2本ずつの弧線は貝施文具によるが、界線や軸線には貝施文具の痕跡は認められない。施文具が異なっているのであろう。33は1条の上界線と+状の軸線と2本ずつの弧線を描くもので類例の少ないものである。<sup>(33)</sup> 34も33と同じく+状の軸線と1葉は2本ずつ他の3葉は3本ずつの弧線で木葉文を描く。界線が無いため上下が明確ではなく、X状を呈するとの解釈もある。<sup>(34)</sup> 35はSI120埋土中出土で、段の下に2条ずつの上下の界線と3本の区画線の文様帶に軸線と3本ずつが基本の弧線でX木葉文を描く。36は3条の上界線と3本の区画線の文様帶に6~7本の線でX木葉文を描く。右側の7本線の1葉は中央の線が軸線で3本ずつの線は弧線と推測される。左側の6本線の1葉は弧線の向きによって2本と4本のほぼ平行する線に分けられるが、両方ともほぼ同じ位置で線を繋いでいる。4本線の中央側の線が軸線と推測されるが、この線は他の3本線と描っていることから一体のものと見なすこともでき、2本と4本の弧線が向かい合う無軸の木葉文となる可能性もある。37は2条の下界線と3本の区画線の文様帶に6本の線で木葉文を描く。このうちの1本は軸線で、2本と3本の弧線が向かい合う形態と推測される。38は2条の下界線と3本の区画線の文様帶に7本の線で木葉文を描く。中央の1本は軸線で、3本ずつの弧線が向き合う形態であろう。39は上1条・下2条の界線と1本の区画線の文様帶に軸線と2~3本の弧線でX木葉文を描く。40と41は同一個体と推測されているもので、2条の上界線と2段の竹管状刺突文帯を挟む3条の下界線の文様帶に軸線と2本ずつの弧線でX半截木葉文を描く。縦の区画線は無いようである。この文様帶の下に3本線の連続する重弧文が存在する。確実な半截木葉文の資料は他に目久美遺跡の87が存在するのみである。42は1条の上界線と1本の区画線の文様帶に界線に沿う3本線の重弧文と区画線を挟む2本ずつの弧線を描く対弧文である。43は3条の上界線と4本の区画線の文様帶に界線と区画線に沿って3本線の重弧文を描く。対弧文を表現しているのであろう。44は無理透形土器と報告されているもので、段の下に4本の線で木葉文を描く。拓本にはもう1~2本の弧線の一部と推測される部分もあり弧線数は増えるかもしれない。器形については「透形土器の頭部を失った資料」<sup>(45)</sup>との意見もあり検討が必要である。54は1条の上界線に4本の線で木葉文を描く。このうちの1本は軸線であろう。縦の区画線は認められない。<sup>(46)</sup> 55は1条の下界線と2本の区画線の文様帶に軸線と1本ずつの弧線で木葉文を描く。<sup>(47)</sup> 56は連続した竹管状刺突文を施す貼付け突帯を挟む上下1条ずつの上界線と1本の区画線の文様帶に、突帯に沿う2本線の重弧文と区画線を挟む3本ずつの弧線で対弧文を描く。<sup>(48)</sup>

上記の他に木葉文となる可能性があるものが若干存在する。45はSI156埋土中出土で、1条の上界線と1本の区画線の文様帶に2本以上の弧線を描く。+(半截)木葉文になると推測される。46は1条の上界線と2本の区画線の文様帶に3本以上の弧線を描くと推測されるもので、形がかなり歪んでいるのは施文具が貝のために生じた現象であろう。47は2段の竹管状刺突文帯を挟む3条の上界線と弧線の一部と推測される1本と2本の線が存在する。48では上1条・下2条の界線と1本の区画線の文様帶に、4位の右軸線杉文を描く区画と4本の弧線らしい僅かな線がある。4と同じ文様配列をもつ木葉文であろう。49は1条の上界線に軸線と1本ずつの弧線の木葉文に推定されているが、左側は1本しか線がなく木葉文とは異なる可能性もある。50は1条の貼付け突帯の下に1条の圈線と2本線の重弧文を連続して描き、上には2本線の重弧文と1本の区画線と2本の弧線らしい線があり対弧文であろう。51は1条の上界線と刺突文帯を挟む2条の下界線に3本の区画線の文様帶に3本ずつの線をX状に交差させて描く。52は1条の上界線と2本の区画線の文様帶に2本ずつの線をX状に交差させて描く。53は上1条・下2条の界線と1本の区画線の文様帶に1本ずつの線をX状に交差させて描く。

(3) イキス遺跡(57~65) 倉吉市のイキス遺跡は平野部を望む南北に伸びる舌状丘陵の先端部に位置する遺跡で、1988年度に耕地造成の目的で調査が実施された。突帯文土器や弥生時代前期の土器片が多く出土しているなかに木葉文土器が存在した。いずれも表面が風化して遺存状態は悪い。

57は1条の上界線と1本の区画線の文様帶に1本ずつの弧線で無軸の木葉文を描いているらしい。58は3条の下界線と1本の区画線の文様帶に3本ずつの弧線で無軸の+木葉文を描く。界線の下にも3本線の木葉文らしき文様がある。59は縦模とも1本の線で+状に区切った文様帶に3本ずつの弧線で無軸の+木葉文を描く。60は1条の下界線と2本の区画線の文様帶に軸線と1本ずつの弧線でX木葉文を描き、木葉文の中央交点に珠点を加えている。X木葉文に珠点を加える例はきわめて稀であり貴重な資料である。<sup>(59)</sup> 外面には赤彩が施される。61は2条の下界線と2本の区画線の文様帶に軸線と1本ずつの弧線で木葉文を描く。62は1条の上界線と2本の区画線の文様帶に軸線と1本ずつの弧線で木葉文を描く。63は1条の下界線と1本の区画線の文様帶に軸線と1本ずつの弧線で木葉文を描いているらしい。64と65は2条の上界線と2本の弧線らしい線を描くが、鋸歯文などの一部で木葉文ではない可能性もある。<sup>(60)</sup>

(4) 後中尾遺跡(66~67) 倉吉市の後中尾遺跡は高城山から東に延びた舌状台地上の遺跡で、1982年度に圓場整備工事に伴って調査が実施された弥生時代から古墳時代にかけての集落遺跡である。<sup>62</sup> 未報告のため遺構・遺物の詳細は不明だが2点ある。<sup>63</sup> 66は2条の上界線と2本の区画線の文様帯に6本と7本の線で2葉を描き、木葉形の間に界線に沿って3本線の重弧文を描く。<sup>64</sup> 軸線の有無は不明である。区画線は木葉形のために線が重んでおり、通常と逆に木葉形が先に描かれた可能性がある。66は中部地域には類例がなく、米子市久美遺跡の84~87が類似する。67は2条の上界線に軸線と2本ずつの弧線の木葉文と推測される。

(5) 上野遺跡(68~73) 大山町の上野遺跡は大山町内を北流する阿弥陀川によって形成された扇状地の裾部近い標高約30m付近に位置している。遺跡は第1遺跡と第2遺跡の2地点からなるが、戦後ももなく耕作等に伴って発見されたもので、幾度か遺物発見当時の状況や出土遺物の概略などは報告されているが、<sup>65</sup> 嚴密な出土状況や遺構との関連性などは不明である。出土土器は弥生前期を主体とするものであり、綾杉文や斜格子文などが描かれた土器と共に木葉文土器が存在している。木葉文は鋸齒状の陰刻の残る貝殻が施文具として使用されている。68~72は同一個体と推測される。68には2単位の木葉文があり、69と同じく中心の交点部分を通る横線が存在し共通する。異なるのは木葉文に挟まれて2本線の山形文を描くことで、これは異なった文様を組み合わせることで意図的に装飾性を強調する西部瀬戸内地域の文様配置方法と推測される。<sup>66</sup> 文様帯の下界線は貼付け突帯で、突帯の面上に1条の沈線を入れ綾杉状となる刻みを付ける。刻みは貝殻ではなくヘラ状工具のようである。69は2条の界線の下に5単位のX木葉文を描く。木葉文には区画線が無いが中央の交点部分を通る横線が存在し、この横線で上下に分けられる。通常はこのような横線は描かれず特異な例と言える。むしろ上下は別々の単位で、鋸齒状に配列した木葉形が2段でX状になるように意図的に描いていると考えるべきではなかろうか。X半截木葉文には縦の区画線がないものもあり矛盾しない。70は2条の上界線と6本の弧線を描く。71は貼り付け突帯の下界線と6本の弧線を描く。72は中央の交点部分を通る横線とX木葉文を描く。73は軸線と2本ずつの弧線を描く。軸線はヘラ状工具で描かれるなどは別個体の可能性が指摘されているものである。

(6) 塚田遺跡(74) 大山町の塚田遺跡は孝靈山北麓の妻木川に臨む舌状台地上に位置し、圓場整備工事に伴い1978年度に調査が実施された。弥生中期の土器が中心であるが、そのなかに木葉文土器が1点存在する。74は十状の軸線と縦線を挟んで向き合う各弧線の両端との交点が間隔をあけてずれるX3型木葉文で、弧線は3本が基本だが4本の所が1箇所ある。上下の界線・区画線とも不明のため、報告者は木葉文を十状に推測しているが、X状の可能性も残る。X3型木葉文は県内に類例が無い。

(7) 大袋丸山遺跡(75~76) 米子市の大袋丸山遺跡は小松谷川に架かる桜木橋の架け換え工事に伴って調査が実施された遺跡である。1988年度と1990年度の2回調査が実施されているが、1988年度の調査で突帯文土器や弥生前期土器が多く出土したなかに1点木葉文土器が含まれる。75は縦横とも1本の線で十状に4つの小区画に分けた中に3本ずつの弧線で無軸の木葉文を描く。上下の界線は不明である。75の他にも木葉文を意図していると推測されるものがある。76は底部脇に2本の縦線と斜線を挟んで2本と3本の斜線を描く。全体形は不明だが2本の縦線が軸線とすれば斜線は2本と3本からなる弧線となり、長砂第3遺跡の82の様な形態になる。また、縦線が区画線とすれば斜線はそれが1葉を構成する弧線となり、錦町第一遺跡の89の様な形態に復元できる。どちらの場合も木葉文は底部脇に描かれていて76と矛盾しない。近接する遺跡から類似する木葉文土器が出土していることから76も木葉文土器の可能性が高い。

(8) 長砂第1遺跡(77~78) 米子市の長砂第1遺跡は米子市の南側を流れる加茂川の改良工事に伴って1989年度に調査された低湿地に位置する遺跡である。加茂川のや下流には弥生時代の水田跡や木製農耕具類が出土した池ノ内遺跡や日久美遺跡が存在する。長砂第1遺跡からは弥生時代前期の壺形土器・壺形土器が多く出土したが、そのなかに木葉文を描く2点の変形壺形土器が含まれていた。77は大井部に十状の軸線と1本ずつの弧線で木葉文を描く。磨滅のため遺存状態は悪い。78も軸線と1本ずつの弧線で木葉文を描いており、77と同じ十状になると推測される。共に器形は口縁が大きく開き、器高が高く、つまみ部に1条の沈線を施すものである。

(9) 長砂第3遺跡(79~82) 米子市の長砂第3遺跡は道路建設に伴って1997年度に調査が実施され、4点の木葉文土器が出土した。79は壺形土器で、つまみを囲む2条の界線の下に放射状に4つの木葉形を描く。軸線と2本ずつの弧線で木葉文を描くが、軸線は2本で県内には後述する82以外類例の無いものである。口縁外周に沿って木葉形の間に2本線の重弧文を描く。線は2本が単位で、平行線を意識して丁寧に描いている。80も壺形土器と推測されるもので、1本の軸線と共に1本、右に2本の弧線で木葉文を描く。残存部には79の様な界線は認められない。81は底面に木葉文を描く。1本の軸線と2本ずつの弧線の木葉文で、軸線は短く弧線も雜である。82は底部脇に軸線と2~3本の弧線で3つの木葉形を描く。軸線には1本と2本のものがある。

(10) 久美遺跡(83~88) 米子市の久美遺跡は加茂川下流域に存在する遺跡である。下水道管敷設工事に伴い1994年度に調査が実施された。細長い調査地のため遺構は不明確だが、突帯文土器から弥生時代中期にかけての土器が多く出土しており、なかでも前期の土器が多い。そのなかに5点の木葉文土器がある。83は櫛齒文を挟む2条の上界線と2本の弧線を描く。弧線の総数や区画線の有無は不明である。84~86は同じ文様形態と推測

され、1条の下界線に軸線と2本ずつの弧線、界線に沿う木葉形の間に2~3本線の重弧文を描く。残存部に区画線は認められない。87は上下1本ずつの界線の文様帶に鋸歯状の軸線と軸線の左に1本・右に2本の弧線を描く。上下の界線に沿う木葉形の間には1~2本線の重弧文を描く。

また、1995年度に道路改良工事に伴って実施された調査では、出土した多くの弥生前期土器の中に「壺形土器の肩部で木葉文状の文様」をもつものが含まれる。88は遺存状態が悪く文様は不明瞭だが、3条の下界線に沿う2本線の重弧文を描き、斜行する弧線の一部のような線がある。<sup>90</sup> 84~87と文様形態は同じか。

(11) 錦町第1遺跡(89) 米子市の錦町第1遺跡は施設建設に伴い1995年度に調査が実施された。弥生時代の遺物としては中期から後期の土器の出土が多いが若干前期の土器も含まれ、木葉文を描くほぼ完形に復元できる遠賀川系の壺形土器が出土した。89は肩部の段状の2条沈線に縫杉文を描き、底部付近に逆八字状に開く2葉単位の3つの木葉文を描く。いずれも軸線と1本ずつの弧線で木葉文を描き、2葉の間に2本単位の区画線がある。さらに、かなり傾いた状態で1葉と区画線と推測されるものがあり、2葉の一方を共有することでもう1單位の木葉文を表現しようとしたのではないだろうか。

(12) 口朝金遺跡(90) 会見町の口朝金遺跡は小規模な平野部とそれに続く谷部との境界部分に位置する。県道溝口伯太線の道路改良工事に伴い1986年度に調査が実施された。晩期を主体とする縄文土器が多量に出土した遺跡で弥生土器の量は多くないが、そのなかに1点木葉文土器が存在した。90は3条の上界線と2本の区画線の文様帶に軸線と1本ずつの弧線で木葉文を描く。

(13) 久古第3遺跡(91・92) 岸本町の久古第3遺跡は中国横断道建設工事および県道名和岸本線道路改良工事に伴い1982年度に調査が実施された。古墳時代の遺構・遺物が中心で弥生時代の遺物は僅かであるが木葉文土器が1点存在した。91は1条の竹管状刺文帯を挟む4条の下界線に軸線と2本ずつの弧線で木葉文を描く。<sup>90</sup>

久古第3遺跡久古地区が1989年度に圃場整備工事に伴って調査された。土師器や須恵器が出土遺物の大半を占めており、弥生土器の量は多くないがその時期は前期のものが中心であり、1点木葉文土器と報告されているものがある。92は1条の下界線と2本の区画線の文様帶に4本の線がある。右側3本は弧状、左側1本は直線状である。左の線が軸線ならばその左側に右側3本と向き合う弧線が存在するはずだがその痕跡は認められない。左の線は右線に対応する弧線と考えることもできるが、数が少なく弧線状のため可能性は低い。区画線の右側にも左傾きの線が少なくとも2本あり全体では三角状となることは間違いない、長瀬高浜遺跡の20・21のようなやや退化した+木葉文であろう。

(14) 上菅荒神原遺跡(93) 日野町の上菅荒神原遺跡は日野川上流域の河岸段丘上にあり、国道建設工事に伴い調査を実施した。遺跡からは石器類と共に縄文時代早期から突堤文土器期にかけての土器が主に出土したが、弥生前期の遠賀川系統の土器も若干あり、その中に木葉文土器が1点含まれていた。

93は壺形土器の肩部の破片と推測され、接合はしないが胎土・焼成・モチーフの一部が共通するため同一個体と推測される底部から胴部にかけての部分も出土し、肩部以下の文様モチーフがかなり明確になっている。2条の下界線の文様帶に軸線と1~2本の弧線で木葉文を描く。区画線はない。下界線の下には3~5本の平行沈線を鋸歯状に描く。同一個体と推測されるものにも鋸歯状の平行沈線があり、その下に2条の横線、2本線の連続する重弧文、3条の横線、鋸歯状に描く3本の平行沈線とその間に1つだけ描かれた下に開く2本線の重弧文、底部脇に2条の横線を描く。外側はヘラミガキ調整後に文様が描かれており、内面はナデ調整である。

### 3 派生する問題点

鳥取県内からは14遺跡93点の木葉文土器が出土している。この数には疑問の残る資料や同一個体となる可能性のある資料も含まれているため、実際の個体数はこれよりも減ると思われる。出土資料の6割は長瀬高浜遺跡から出土しているが、木葉文が描かれている器種をみると無頸壺形土器とされるものが1点ある他はいずれも壺形土器であり、描かれた箇所も頭部から胴部上半に限られ、きわめて規則的である。それに対し、米子平野の場合1遺跡からの出土点数は少なく5遺跡で15点の出土はあるが、そのうち壺形土器が4点、底部脇に描かれたものの3点、底面に描かれたものが1点と、半數以上の計8点が壺形土器の肩部以外に描かれている。壺形土器に木葉文を描く例は近畿地方に多いと指摘されており、<sup>90</sup> 底面に施文する例がある<sup>90</sup>など施文箇所に多様性があり米子平野の遺跡は近畿地方と関係が深い可能性が推測される。

出土した木葉文土器をみると、いくつか注目される点が存在する。21の木葉文には通常の形態の軸線を挟んで弧線が向き合うものと軸線の一方のみに片寄つて弧線を描くものが併存しており、文様が退化して施文工程の簡略化が始まっていることが分かる。さらに、20では弧線を全て軸線の一方に片寄つて描き、木葉文形の意味が失われ文様形態が変化し始めている。51では3本ずつの線をX状に交差させて描いている。この3本の線を積極的に解釈するならば、20では直線的ながらまだ弧線として認識することもできた線が、51ではさらに簡略化されて描かれた結果、軸線と同じくそれぞれの弧線が対角線状に繋がった線となったのではなかろうか。つまり、この3本の線は軸線と弧線を表現していると考えたいのである。この解釈が許されるならば20の木葉文に続く退化した木葉文形態と位置付けられることになる。そして、52の2本ずつの線をX状に交差させて描いたものへ簡略化

が進み、53のような1本の線でX状に描くだけのものに変化したと推測される。しかし、一貫して上下の界線と区画線は描いており、線によって1つの文様単位を区画する意識は残っていたようである。

貝殻施文が明確な資料は古くから指摘されていた上野遺跡と長瀬高浜遺跡資料の他には認められなかった。貝殻施文の木葉文土器は福岡県遠賀川流域以東から山口県響灘沿岸地域にかけての瀬戸内海西部沿岸地域で特に発達したものであり、盛行した時期もヘラ状工具施文の木葉文土器が前期中葉頃などに対し、やや遅れた前期後葉頃である。鳥根県松江市のタテチョウ遺跡・西川津遺跡から多くの前期土器の中に木葉文土器が含まれるが、貝殻施文されたものは少なく日本海側の特定遺跡に少量ずつ点在する出土状況である。さらに、33・34のように十状の輪線を持つ木葉文についても山陰地方に多い傾向<sup>(3)</sup>が指摘されており共通する。

施文具については、大部分はヘラ状工具によって描かれたもので、確実に貝によって描かれたことがわかるものは数少ない。最初に触れたように、ヘラ書きとされるものの中にもアサリやハマグリなどの貝で描かれたものが含まれている可能性が指摘されているが、具体的に区別することは難しく、報告書などあまり注意が払われていないのが現実である。そのなかで、36では2本と4本に分けることが出来る弧線が、両方ともほぼ同じ位置で線を繋いでいる。これはヘラ状工具によって描くならば不要な行為であり、伊東照雄氏が想定されているように端部が平滑な二枚貝の腹縫部が施文具として使用された為と推測される。

## 註

- (1)伊東照雄氏は実験により、二枚貝の腹縫部使用で施文を使用した場合と同様な施文が可能であることを明らかにした〔文献4〕。そこで、貝なども含めたヘラ状の線が描ける施文具という広い意味で捉えている。
- (2)図版では上下が逆になっている。
- (3)2本線を区画線・1本線を下界線と判断して、報告書とは天地方向を変更した。
- (4)『朝鶴川河川改修工事に伴うタテチョウ遺跡発掘調査報告書1』鳥取県教育委員会 1979
- (5)報告書では+状だが、高口勝人氏〔文献6〕・工業普通氏〔文献7〕はX状と判断されている。
- (6)文献31 註32
- (7)報告書に掲載された図版75のPo148と押図326の拓本は異なり、拓本は前述した22と同じものであったため、拓本ではなく写真に基づいて記述した。
- (8)図版74の中で8(Po115)と共に撮影されているが本文中に実測図や拓本の掲載はない。
- (9)図版73にPo78の表形土器と共に掲載され、竹管状刺突文は貼付穴帯やそれを挟む沈線が共通するため同一個体と推測されるが、Po78では帯下の文様が鋸歯状の範囲描文と推測されている。
- (10)文献27 P 46
- (11)報告書には他にも木葉文土器の可能性があるものとして1点挙げてあるが木葉文とするには疑問が残るためここでは除外した。
- (12)文献9

(13)倉吉市教育委員会および調査担当者の森下哲哉氏のご好意により拓本の提供を受けた。また、倉吉博物館の根鈴輝雄氏には情報の提供を受けた。

(14)深澤芳樹氏は文献31註14で深澤分類の鑿描斜軸木葉文と鑿描斜軸木葉文が同一個体に併存する例が後中尾遺跡にあるとされる。66のことであらうが、筆者は区画線は別にあると解釈しており、深澤氏と異なる。

(15)文献10・11・12

(16)文献24 P 253

(17)この土器は通常の木葉文とは文様形態が異なっており工業普通式〔文献27〕の対弧文の範囲で捉えるべきものと考える。対弧文について工業氏は「方形区画内を+またはXに区画するものではないから、木葉文の範囲には入らない」としながらも、結果的に木葉文と類似する文様となることから「变形木葉文とも言い得る」とその位置づけに躊躇されている。しかし、同じく木葉文を検討された深澤芳樹氏〔文献31〕や亀谷尚子氏〔文献28〕は木葉文の1形態として位置づけられている。ここでは木葉文の範囲に含めることにする。

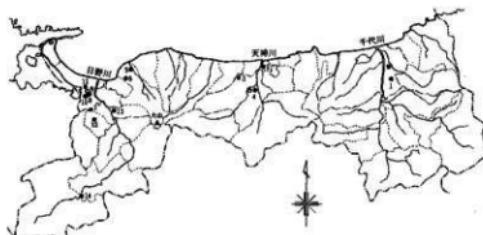
(18)実測図と遺物写真では中央の線の位置が異なり、実測図では無軸のようにもみえるが、写真から有軸と判断した。

(19)文献27 P 54

(20)文献28 P 5

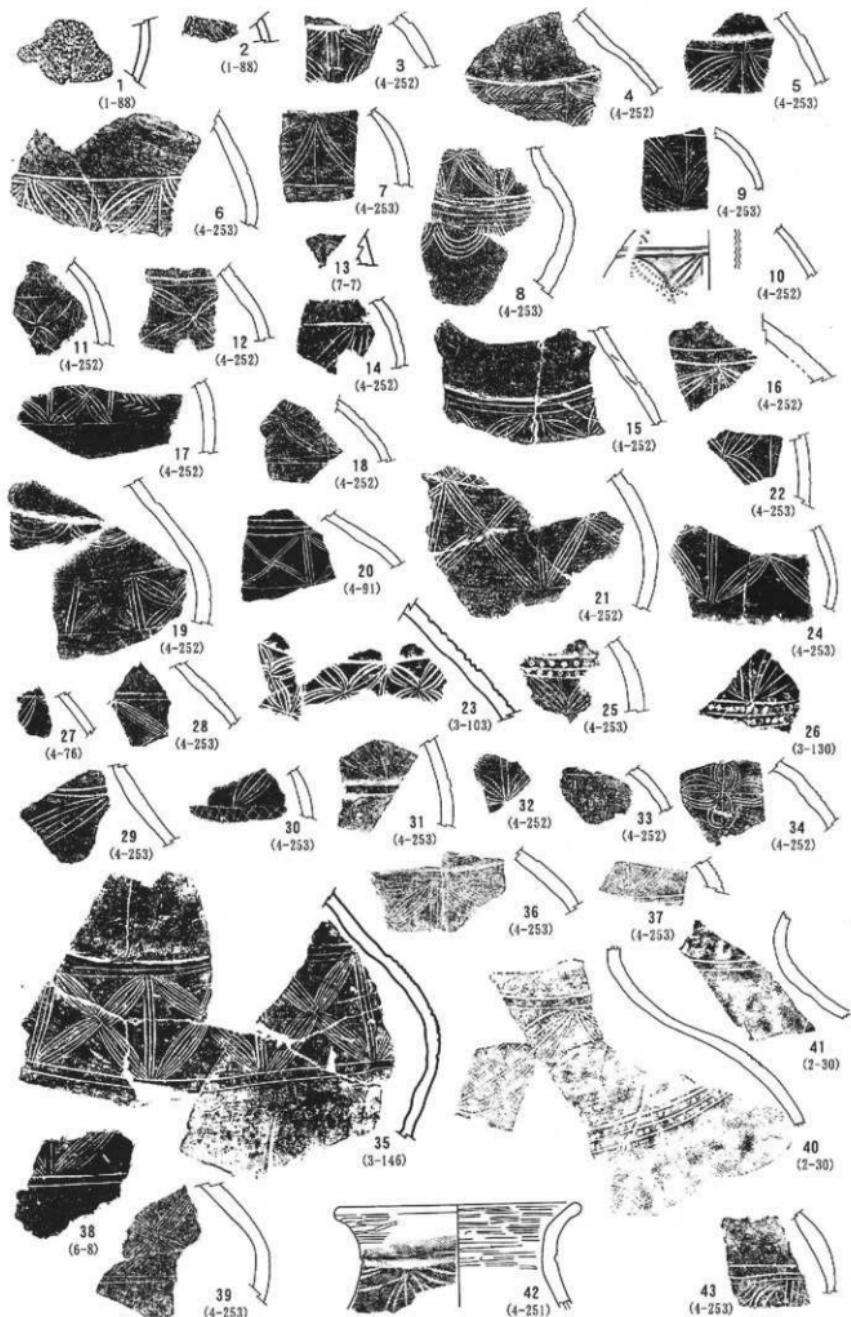
(21)文献32 P 139

(22)文献24 P 280



数字は文章中遺跡番号と対応

図1 木葉文土器出土遺跡位置図



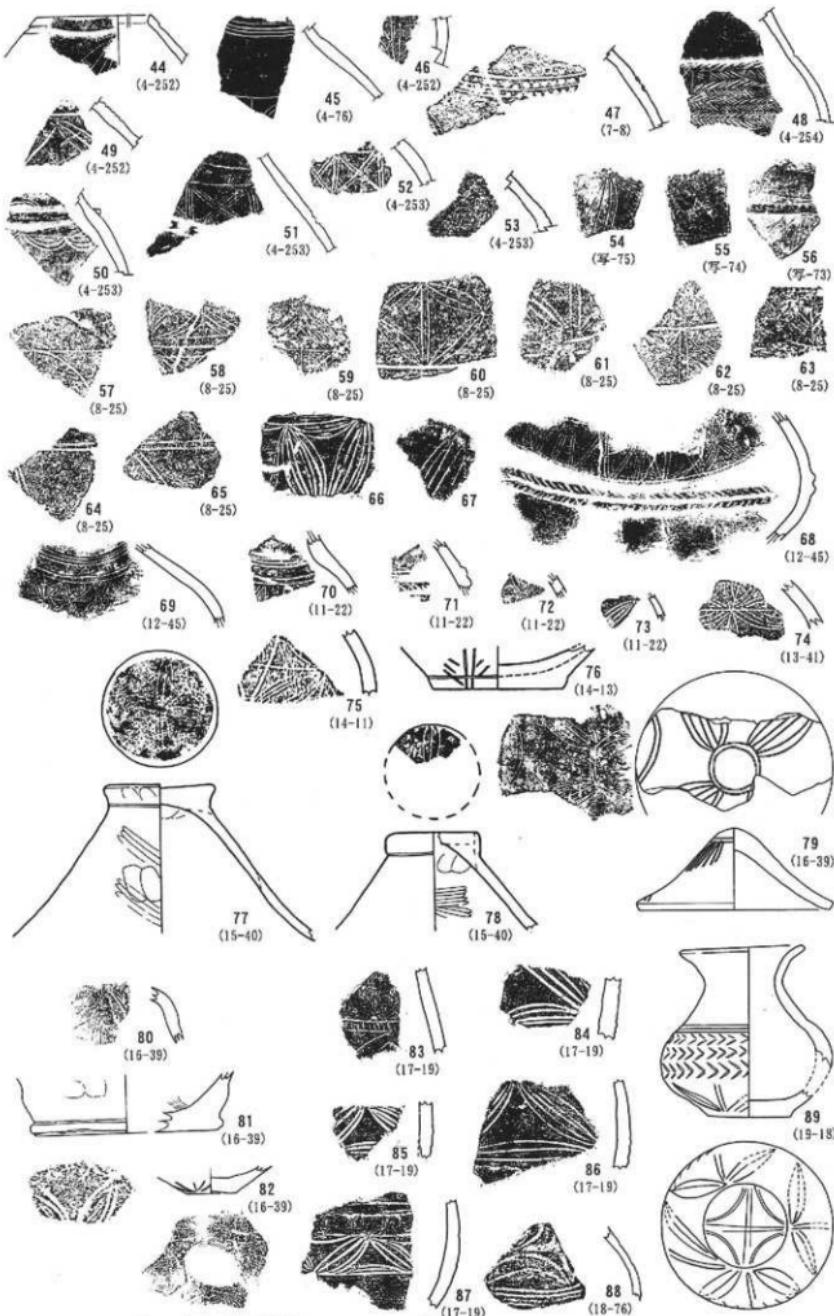


図3 木葉文土器集成 2

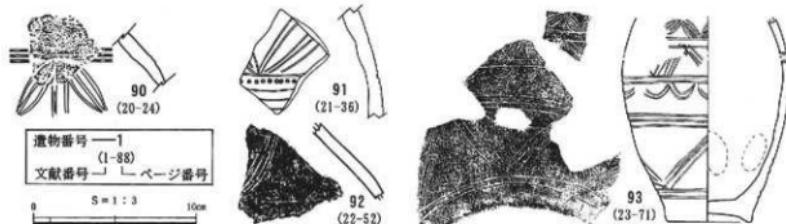


図4 木葉文土器集成3

\*図は後中尾遺跡を除き各報告書から転載したが、一部改変したものがある。

### 文献

- (1)「西大路土居遺跡」 財團法人鳥取市教育福祉振興会 1993 P 88 Po15・16 図版29
- (2)「長瀬高浜遺跡Ⅰ」 財團法人鳥取県教育文化財団 1978 P 30 Po10・11・13 図版1
- (3)「長瀬高浜遺跡発掘調査報告書V」 財團法人鳥取県教育文化財団 1983 P 103 Po16 P 146 Po17 図版38・47
- (4)「長瀬高浜遺跡発掘調査報告書VI」 財團法人鳥取県教育文化財団 1983 P 76 Po18・19 P 91 Po2 P 251 Po86  
Po252 Po115・123・136・147・149～151 P 253 Po152～166 図版20・21・73～76
- (5)「清水真一「弥生前期木葉文について」「長瀬高浜だより」9号 1979
- (6)高口勝人「弥生時代前期の木葉文について(その2)」「長瀬高浜だより」30号 1981 P 8 Po2
- (7)野島珠美「弥生土器にみられる文様あれこれ」「長瀬高浜だより」44号 1982 P 7 Po2 P 8 Po15
- (8)「イキス遺跡発掘調査報告書」 倉吉市教育委員会 1988 P 25 Po69～77 図版22
- (9)森下哲哉「後中尾遺跡」「鳥取県大百科事典」1984
- (10)佐々木古代文化研究室「所子山遺跡概報」「ひすい」13号 1955
- (11)斎光滑六・藤田等「山陰彌生式土器の研究(1)」「考古学雑誌」第48巻2号 1963 P 22 Po1・3・4・6
- (12)治部田史郎「大山山麓出土の弥生式土器について」「鳥取県立博物館研究報告」第13号 1976 P 45 Po8B・11B
- (13)「塚原遺跡」 大山町教育委員会 1979 P 41 Po1 図版10
- (14)「大堀丸山遺跡」 米子市教育委員会 1991 P 11 Po16 図版1
- (15)「長砂第1・2・3遺跡」 米子市教育委員会・鳥取県米子土木事務所 1990 P 40 Po187・188 図版23
- (16)「長砂第3・4遺跡」 (財)米子市教育文化事業団 1998 P 39 Po58・59・62・66
- (17)「久美久遺跡Ⅳ」 (財)米子市教育文化事業団 1995 P 19 Po247～250・254 図版6
- (18)「久美久遺跡V・VI」 (財)米子市教育文化事業団 1998 P 76 Po8 図版16
- (19)「舎町第一・二遺跡」 (財)米子市教育文化事業団 1996 P 18 Po58 図版4
- (20)「口朝金遺跡」 会見町教育委員会 1988 P 24 Po203
- (21)「久古第3遺跡・貝田原遺跡・林ヶ原遺跡発掘調査報告書」 財團法人鳥取県教育文化財団 1984 P 36 Po19 図版14
- (22)「久古第3遺跡(久古地区)発掘調査報告書」 岸本町教育委員会 1990 P 52 Po21 図版11
- (23)「上荒神原遺跡」 財團法人鳥取県教育文化財団 1999 P 71 Po180 図版10
- (24)伊東雄三「弥生式土器の文様と施文具」「日本民族文化とその周辺 一考古篇一」 1980
- (25)藤田豪司「中部瀬戸内の前期弥生土器の様相」「鳥取考古館研究集報」第17号 1982
- (26)佐原真「鳥根の弥生文化」『82特別号 鳥根の古代』鳥根県立八雲立つ風土記の丘 1982
- (27)工業普通「速賀川式土器における木葉文の展開」「文化財論叢」 1963
- (28)龜谷筒子「木葉文土器の考察」「西部瀬戸内における弥生文化の研究」山口大学人文学部考古学研究室 1984
- (29)高橋謙「隠葉紋」「弥生文化の研究3 - 弥生土器 I - 」 1966
- (30)松本岩雄「木ノ葉文土器と流水文土器」「大社町史研究紀要」2 大社町教育委員会 1987
- (31)漢澤芳樹「木葉紋と流水紋」「考古学研究」143号 1989
- (32)漢澤芳樹「木葉紋と流水紋とからみた西川津遺跡」「朝の河川改修工事に伴う西川津遺跡発掘調査報告書V」 1989
- (33)米田鉄也「速賀川流域の木葉文」「地域相研究」第24号 1996

木葉文土器資料の集成に際し、鳥取県立博物館の岸本浩忠氏には上野遺跡の資料実見にご配慮頂いた。倉吉博物館の根鈴輝雄氏には後中尾遺跡についてご教示頂き、倉吉市教育委員会の森下哲哉氏には未報告である後中尾遺跡の拓本を提供して顶いた。財團法人米子市教育文化事業団の平木裕子・佐伯純也両氏には長砂第3遺跡についてご教示ならびに資料提供を受けた。あらためて深く感謝する。

## 上菅荒神原遺跡の遺物と遺構

八峰 興

### 1. 遺物

上菅荒神原遺跡出土の縄文土器および弥生土器についてまとめておきたい。表1では暗茶褐色土包含層・黒色土包含層を加え型式が明らかなものをまとめた。これによると早期の押型文系土器群は、黄島式直前の山形文土器が1点出土している他は確認していない。SD-02の底面上からの出土である。早期末は織維土器が114点を数える。表2では縄文を中心とするものは約50%、条痕を中心とするものは約38%で、表は縄文で裏が条痕のものが2.6%である。このうち表裏縄文と表縄文裏条痕は島根県篆文遺跡で出土例があるため篆文式としている。SK-11がこの時期の可能性のある遺構である。前期初頭の土器では羽島下層2式が1点出土している。また胎土に織維を含み端部に隆起と貝殻による施文をもつものもあり、織維土器と羽島下層2式の折衷的な要素をもつものと推定している。このように本遺跡では早期末から前期初頭にかけてある程度継続して生活していたことを窺わせる。これ以降中期前半頃までの遺物は確認していない。中期中葉から後半にかけて船元2~4式、里木2式(併行を含む)土器が58点出土している。遺構はSK-03を確認している。後期は中津式、布勢式、北白川上層式など後期前~中葉にかけてわずかではあるが出土する。遺物の遺存状況は良く破片も大きいものが目立つ。また後期後半から末には馬取式が1点、宮滝式が2点出土する。それ以降は晩期末までの遺物は確認していない。

表1 上菅荒神原遺跡の時期別土器一覧表

時期	型式	点数	主な遺構
縄文時代	黄島直前か	1	SD-02
早期	織維上器	114	115 SK-11 SD-01・02
前期	羽島下層2	2	2 SD-01
中期	船元2~3	8	
	船元4	15	
	里木2	19	58 SK-03
後期	中津	1	
	布勢	4	
	北白川上層	1	
	馬取か	1	
	宮滝	2	12
晩期	突帯文土器	108	SK-06・16
弥生前期		133	SK-09
中期		163	SK-15
後期		3	

表2 織維土器の調整別割合

表裏縄文	表縄文裏ナデ	表縄文裏条痕	表裏条痕
52点	5点	3点	37点
45.6%	4.4%	2.6%	32.5%
表裏条痕	表裏ナデ	不明	合計
7点	6点	4点	114点
6.1%	5.3%	3.5%	100.0%

表1における点数の左側の欄は形式名の明らかな点数、右側の欄は不明瞭なものも含めた点数

○ V字状の刻み目突審

△ 切り目状の刻み目突審

● 無刻み目突審

■ 無刻み目突審 口縫端部を押さえ

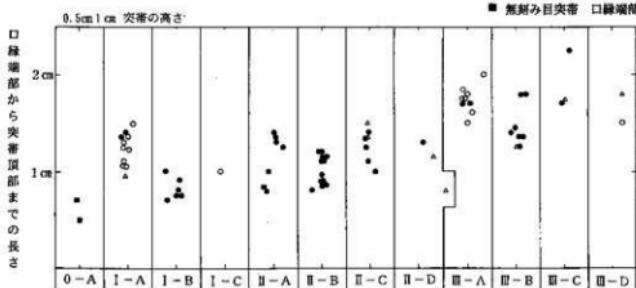


図1 突帯文土器計測図

縄文時代から弥生時代にかけて最も多くを占めるのが突帯文土器である。口縁部だけで108点を数え、体部片を含めるとかなりの割合がこの時期に集中しているものと考えられる。遠賀川系土器と同じ黒色土包含層からの出土である。突帯の形状と位置による分類を図1に図化したが、それぞれのまとまりは指摘できるものの調整や焼成の差は大きくなく、時期差を想定するのは難しい。この後中期前半までの遺物はなく、弥生時代中期後半の遺物が比較的多く出土している。遺構はSK-15がある。また後期の土器がわずかに出土している。

このように縄文時代早期末・中期後半・後期前半・晩期末から弥生時代前期・弥生時代中期後半などの定住的な様相とそれ以外のわずかな生活の痕跡とが交互にみられることから、この地は縄文時代早期から弥生時代後期まで消長しながら断続的に利用されていたことがわかる。立地状況からみると小河川が大河川に流れ込む小高い地で、石器や落し穴などの遺構を見る限り狩猟や漁撈を行っていた様相が見受けられ、縄文から弥生時代の人々には重要な位置を占めていたことが考えられる。

## 2. 遺構

今回の調査で確認したピット群から平地住居を復元した。県内ではこれまで報告された縄文時代の住居は竪穴住居が中心で、平地住居についてはほとんど明らかになっていない。そこで県内の報告例を集め、平地住居と仮定してその構造や時期について若干の考察を行いたい。

県内の平地住居は本遺跡や新たに復元した遺跡も含め5遺跡を数えるが、現時点ではその全てが鳥取県内でも中・西部、いわゆる伯耆地方に所在する。これは竪穴住居でも同様の傾向がうかがえる。

取木遺跡は倉吉市取木に所在する。縄文時代の遺構としては竪穴住居1棟、礫群2基を検出している。礫群はいずれも亦変しているものが多くあり、1号礫群から押型文土器が1点出土している。これを挟むようにピットも検出されており、柱を建てて屋根掛けをした可能性もある。ピット群から壁立式平地住居を2棟復元した。東側には竪穴住居もあるが、掘り込みが不整で付近にピットもあるため平地住居の想定も可能であろう。

石脇第3遺跡操り地区は泊村操りに所在し、県東部との境付近にある。SI-01は石脇8号墳の約25~30m北西に位置する。ややいびつな形態で、遺物は付近から石礫が出土している。石脇8号墳墳丘下ピット群は石脇8号墳の後円部下にある。古墳の盛土のため掘削を免れたものと考えられる。梁間1間型平地住居1棟と壁立式平地住居4棟を復元した。建物跡が密集しており本遺跡の住居のあり方と類似する。旧表土中および下層から磨消縄文土器をはじめ縄文時代後期頃の土器が出土している。付近は日本海を見下ろす丘陵部にあり、SI-01も含め尾根上に集落が存在していたものとみられる。

鶴田荒神ノ峯遺跡は会見町鶴田に所在する。6基のピットが半円状に並ぶ。内外面に条痕をもつ深鉢が出土しており、時期は晩期とみられる。

県内ではこの他に壁を立てる壁立式の竪穴住居も確認されている。壁を立て棟持柱を持たないという点で壁立式平地住居と共通しているためここで取り上げておきたい。

大塚遺跡は名和町大塚、阿弥陀川河口右岸に立地する。住居の北側には周堤状の高まりが確認されている。中央に石圓炉をもち壁際に柱穴があぐる。縄文時代後期の上器が出土している。

泉前田遺跡は米子市泉に所在する。SK-09は中央に脩円形のピットをもち壁際を直径10cm程度の小ピットがめぐる。底面から石匙が出土しているが時期は特定できない。

平地式住居は県内では早期まで遡るがその多くは後期から晩期にかけてのものである。縄文時代のピット群として報告されることが多い、復元によると何回もの建て替えを行ったものとみられる。梁間1間型平地住居は石脇第3遺跡操り地区でも確認できたが、壁立式平地住居とともに確認されており、これらはほぼ同時期に建てられ何らかの関係を持っていたことが想像できる。

主柱2本型伏屋式平地住居は比較的簡単な構造であるため住居であると判断しにくいものと思われる。県内では類例が確認できなかった。本遺跡では主柱の間に土坑状の掘り込みをもつものもみられ、例えば取木遺跡の集石炉の覆いなど、調理や貯蔵など用途に応じてその都度建てられたものと推察したい。

県内の堅穴住居は縄文時代前期からみられ後期のものは調査例も多くなるが、屋内に地床炉または掘り込みの石組炉をもつものが多くみられる。これに対し平地住居では炉跡が確認されておらず例えば戸外に簡単な覆いをした炉を設ける可能性や屋外に集石的な炉を設けることも考えられるが、平地住居が堅穴住居とは異なる住居の様相を示している可能性もある。平地住居が比較的容易に用途に応じて建てることが可能であり炉の機能も有していないとすると、堅穴住居よりも移動に重点をもった住居か季節による住み分けとして使用をしていたことも考えられよう。しかしその構造的な性格から堅穴住居ほど遺存状況はよくないため、縄文時代の遺構として検出される機会は少なく構造も不明な点が多いものと推測する。

このように県内の様相と比較すると本遺跡の壁立式平地住居と梁間1間型平地住居は、構造的には石脇第3遺跡の墳丘下ビット群に類似する。このビット群は後期と考えられるが、本遺跡では後期の遺物は縁帶文系土器や凹線文系土器が確認されている。とくに縁帶文系土器は数は少ないものの遺存状況はよい。遺物からみると縄文晩期から弥生前期の土器が最も多く、遺構もこの時期の可能性が高いが、石脇第3遺跡の例からみると縄文後期まで遡ることも考えられよう。ただし壁立式平地住居は取木遺跡のように縄文早期に遡るものもあり、本遺跡で行った年代測定でもSB-13については縄文早期の年代が示されており、II区の壁立式平地住居については遡る可能性も否定できない。また主柱2本型伏屋式平地住居については本遺跡の層序と遺物により縄文晩期～弥生前期と位置付けておきたい。ただし県内では他に類例が少ないためあくまでも現段階での想定であり、今後の調査の結果によっては変更する必要が生じることも考えられる。

### 報告書名

- 『取木遺跡・一反田遺跡発掘調査報告書』倉吉市教育委員会 1981
- 『石脇第3遺跡森末地区 操り地区 石脇8・9号墳ほか』財団法人鳥取県教育文化財団 1998
- 『鶴田荒神ノ峯遺跡他』財団法人鳥取県教育文化財団 1996
- 『横峯遺跡発掘調査報告書』閑金町教育委員会 1986
- 『名和町内遺跡分布調査報告書』名和町教育委員会 1994
- 『泉中峰・泉前田遺跡』財団法人鳥取県教育文化財団 1994

### 参考文献

- 「第1節 堅穴住居について」『大下畑遺跡』財団法人鳥取県教育文化財団 1994  
 森下哲哉『鳥取県の縄文時代住居址－後期・晩期を中心に－』『考古学の諸相』坂詰先生還暦記念会 1995.1  
 宮本長二郎『第一節 平地住居と堅穴住居の類型と変遷』『先史日本の住居とその周辺』同成社 1998.12

表3 鳥取県の主な平地住居・壁立式住居

遺跡名	遺構名	形態	柱穴・炉跡	遺物	時期
1 取木遺跡	ビット群	壁立式平地住居 付近に別棟の集石炉か	壁柱多数	付近から押型文土器	早期か
2 石脇第3遺跡 操り地区	SI01	壁立式平地住居	壁柱多数	付近から石器出土	不明
3 石脇8号墳	墳丘下ビット群	梁間1間型平地住居	主柱 壁柱多数	磨消縁文鉢	後期前葉
〃 石脇8号墳	〃	壁立式平地住居	壁柱多数	〃	〃
4 鶴田荒神ノ峯遺跡	SI-01	壁立式平地住居	壁柱多数	粗製深鉢	晩期か
5 大塚遺跡群	第20トレンチ堅穴住居	壁立式堅穴住居	壁柱多数 中央に石器炉	粗製土器	後期か
6 泉中峰・泉前田遺跡	SK-09	壁立式堅穴住居	壁柱多数 中央にビット	石器出土	不明
7 上若荒神原遺跡	SB-01・11	梁間1間型平地住居	主柱 壁柱多数	粗製土器	晩期～弥生前期か
〃	SB-02～10・11～16	壁立式平地住居	壁柱多数	粗製土器	〃
〃	SH-01～75	主柱2本型伏屋式平地住居	主柱2本	粗製土器	〃

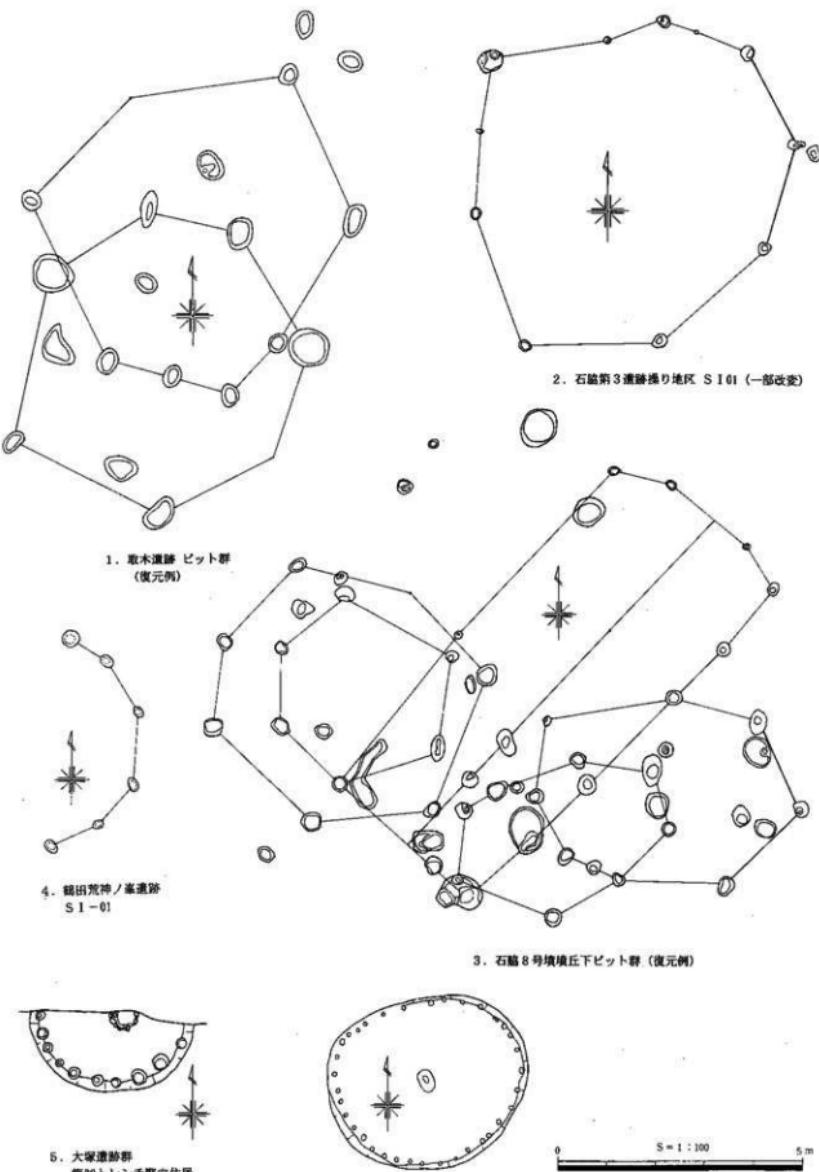


図4 鳥取県の主な平地住居・壁立式住居